

---

# 灰色の話

べほま

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

灰色の話

### 【Nコード】

N8506M

### 【作者名】

べほま

### 【あらすじ】

ふかくかんがえるとしめはなし。

気分転換として最近はまだ一方の小説に時間かけてます。

こっちの更新は少なくなるけど、よかったらあっちも見てねという露骨な宣伝。

## 第一話 「ぷろろ」

シロとクロ。

オセロのように濁りない綺麗なそれではなく、曇天を連想させるような灰色に近いくすんだ黒白。それが俺の目の前でうねるように動くのだから気味が悪い。

まるで限界まで酒に酔った時のように、眼前の光景が上下に揺れる。左右に揺れる。ばやけて歪む。不愉快極まりない視界。

何故こんなことになったのか、何故この状況を受け入れたのか。何故俺はそれから目を離さないのか。

(気に入らないなら目を閉じればいい)

声に出さずして心に落ちた言葉は、何一つ文句のない正論だった。だが、それは出来ない。しないのではなく、出来ない。

何故かはわからない。説明する気にも論理立てた上に理解する気にもならないのだからしょうがない。

(……………)

呆けるようにそのクロとシロを眺める。

ああ、先ほどは光景だのなんだのと言ったが正直な話、俺にもこの『クロ』と『シロ』が一体何なのかなどわからない。

そもそも此処はどこだ？ ……興味がない。

「おっ」

ふと漏れた声が空間に響く。

気付けば俺の周りは汚れ一つ、穢れ一つ見えないような白の空間だ

った。あれだ、太陽の光を真正面から見据えたような、あの焼けるような光景。焼けるような、光景。  
といってもこの『シロ』は相も変わらず汚い白だ。この空間じゃよく目立つ。

「お前、何？」

何となく、『シロ』に話しかける。だが答えはない。期待していたのか？……興味がない。

俺の意味もない問いかけに『シロ』はただうねるだけだった。そんなこいつのすぐ横を見る。いたのは『クロ』だ。  
こいつもこいつでなんだか格好の悪い黒だった。黒といったら漆黒と表現されてもいいほどに濃いべきだろうに。これじゃあ手垢がつきまくった液晶画面みたいだ。

「汚いな」

言っではみたものの、やはり『クロ』も答えない。なんなんだろうな、一体。……興味がない。

にしてもこの『シロ』も『クロ』も鬱陶しいくらいに歪んでいるというのに、一向に交わる様子が見られない。渦潮のように二つとも混ざればいいものを。子供の頃に あー小学生か？ 芸術の時間に白と黒の絵の具が旨く混ざらないような。なんだろうな、灰色ってのは存外難しい。

「あー……だから俺が灰色に？」

漏れた言葉に、驚きも、違和感も、恐れもなかった。  
何を思っってこんなことを俺は言っったのか。誰に対してこんなことを俺は言っったのか。というかお前らだっって見た目は灰色に近いじやな

いか。汚い色をしゃがって。

そもそも灰色とはなんだ。色に意味を持たせるのか？

白は     まあいいイメージだ。なんとなくわかるだろう？

黒は     まあ悪いイメージだ。なんとなくわかるだろう？

白は     まあ綺麗なイメージだ。なんとなくわかるはずだ。

黒は     まあ汚いイメージだ。なんとなくわかるはずだ。

「パンダじゃ駄目なのか？」

あれなんか白も黒も混ざることなく一つの個体として     興味がない。  
い。

いや、興味がないんじゃない。意味がないだけだった。そりやそう  
だ。そりやそうだ。

「というか地味だな。白と黒と灰色って。しかもお前ら、灰色って  
何だか知ってるのか？ お前らがいるなら別に作れるじゃねえか。

…… ああ、だから作った？ なるへそ、納得」

じゃあ、俺は新品だ。気分がいい。シロとクロを撫でてやる。  
撫でる？ おかしい。おかしいぞこれは。

先ほどまでただの色としてそこにあったはずの『シロ』と『クロ』  
は俺が手で触れることの出来る何かに変わっていた。

名を示す様にそれぞれの身体の色は白と黒。手に触れた感触は擦ら  
れるような暖かさ。あれだ、犬とか触ってるみたいだ。

「犬？」

いや、犬じゃない。

四本足。おお、犬だ。

かわいらしい二つの耳。うん、犬だ。

尻尾がない。あー、犬じゃねえ。

馬みたいに長い顔。あ？

というか鼻が長い。ゾウのつもりか。

「あー……駄目だ。出てこない」

頭を捻り、目の前で蠢く二匹の生物を記憶の中の何かに当て嵌める。探す。探す。探す。まだ探す。ぐるぐると回る頭の中を想像したら、吐きそうになった。俺は何をやっているんだ。

そこでふと視線を自分の身体に向けてしまった。しまった？ 別にいいだろうに。

特に問題はない。二本の手。二本の足。五本の指。重い頭。人間に違いない。クロと白から生まれた俺がこの不思議な生物の特徴を備えていたら……悲しくなる。

「だが灰色」

問題があるとすれば、俺の身体がコンクリートのようになめらかな灰色だったことだろうか。洋服店にあるマネキンよりも不気味な身体。なんだかな。コンクリートというよりセメントみたいだ。

「鏡はないのか」

せめて顔だけでも見たいとシロに聞けば、あるわけがないと首を左右に揺らした。クロには聞かなかった。持ってなさそうな気がしたから。

まあ、なけりやしょうがない。どちらにしても灰色じゃ元がよくても気味の悪いだけだろう。

「あ？」

一つ息を吐いて腰を下ろせば、クロがその長ったらしい鼻を俺に擦り寄せてきた。一瞬鼻水まみれになるかと思つて顔を歪めたのだが、存外クロの鼻は綺麗だった。色合いはやっぱり小汚いが。ドーベルマンみたいな格好のよい黒毛には程遠い。身体も寸胴型だしな、お前ら。

内心の嘲りが通じたのか。クロは、そしてシロまでもが俺を咎めるような視線を送ってきた。そこらの人間よりもその視線に乗せた感情が豊かだったのに驚いた。バクの癖に。

「あー……あれか。お前ら、バクか」

ようやく気付いた。  
こいつら、バクだ。

バク。ああ、そうだな。たぶんシロとクロはそういう種族なんだろう。

といつても記憶の中にあつたバクの姿はどうにもぼやけたもので、曖昧なものが剥がれない。そりゃバクなんぞテレビでしか見たことがない。それも動物モノの番組で。なんだったかな、あの番組の名前は。

だが何故にバクなのだろうか。

もそもそと口元を動かす彼らの姿は、まあ、好きな人には可愛げがあるものなのだろうが、俺から見れば何だか獣臭くて仕方がない。猫や犬などの人間の暮らしに隣り合うような雰囲気がない。あれだ、飼い犬や野良猫を見たような安心感がない。

「結構でかいな」

一度、シロの頭を撫でる。そうすればクロもまたそれを乞うかのように毛むくじゃらの頭をこちらに擦り付ける。何だか二匹のバクと以心伝心だなんて妙な気分だ。

真っ白な空間で濁った白の生物とくすんだ黒の生物と灰色のマネキンが戯れる。異常極まりない光景を第三者から見たくもなかった。

「夢」

シロとクロが口を揃えてそんなこと言った気がした。それとも俺が無意識に零しただけなのか。座り込んだ俺の前に並ぶシロとクロもまた、犬のお座りように佇んではこちらを見ていた。

夢。急に言われても困るが　バクで夢。

あれか、夢喰いって奴か。

じゃあ何だ。俺の夢もこいつらに食われたってことか？

「違う」

今度の声は確実に俺のものだった。だがおかしい。そうやって否定する材料など何一つ俺は見つけていない。なのに俺の口は言う事を聞かない子供のように駄々を捏ねる。

「違う。違う。違う。違う。違う」

壊れたブリキ人形のように呟く灰色のマネキン　つまりは俺。

何だ？　この状況は。そもそも俺は、誰だ？　先ほどの記憶は誰のものだ？

……興味がない。



シロとクロの話をしよう。無論、俺の話ではなく、だ。

見た目に関しては別に今更付け加えることはないだろう。小汚い身体に子豚くらいの体長、名を表すにはあまりに不格好なのが、バクそのものがそれほど格好のよい生物ではないのだから仕方がない。なんだろうな、動物園にでも実物を見れば俺の認識は変わるのだろうか。目の前に実物がいるというのにおかしなことを言う。

ああ、あと、あれだ。こいつらは夢を食う。

何故だ、とか、どうやって、だとか。そういうような疑問は横に置いておく。そうした方が楽には違いない。

そも、それを手伝ってやっているのは俺でもある。

シロとクロは時が経つと、腹が減ったと俺に言う。

別に驚くことでもおかしいことでもなんでもない。生きてりゃ腹も減る。だから食う。それだけだ。

兎にも角にも腹が減ったのならば食わせてやらねばならん。何故俺が？　そういうもんなのだろうさ。

基本、俺達の埒は白い空間だ。俺とシロとクロ以外の色を持たないつまらない空間。確かめたわけじゃあないが、どうにもこの広さは無限に広がっているようで気味が悪い。一度シロを連れて出来るだけ歩いてみようとも思ったが4歩進んですぐに止めた。つまらないから。

だが飯を食う時は違う。ああ、夢を食う時、って意味でな。

曰く、俺らにとっては食事の時間なのだが、この時ばかりはこのくだらない空間も色彩を取り戻す。穢れ一つないような白の空間が侵食されるように黒に変わり、そして貼り付けられた黒の景色がボロボロと崩れ落ちた時、俺らの目の前に広がるのが餌場ってわけだ。

それは夢の世界。

誰の夢なのか？ あまり興味はない。

その持ち主がなんであれ夢って言うのは大抵素敵なものには変わらない。

過去、現在、未来。

常識、非常識。

真実、虚構。

その全てが無意味な世界だ。

何せ夢っていうのは基本的フリーダムだからな。ふりーだむ。

『あるんならある』そういう世界なのさ。

で、俺たちはそれを食うんだ。

シロは悪い夢を。

クロは良い夢を。

そして俺はただの夢を。

なんだろうな。よく説明できそうもない。

夢に優劣なんぞありはしないし、善悪なんぞあるわけもない。  
だが俺たちはその夢に区別を付けて貪るんだ。

基準は、その夢の主がどう思ってるかってこと。

早く覚めてくれと願えばシロがきつたねえ涎を垂らす。

覚めないでくれと願えばクロが下品に腹を鳴らす。

俺は　特に基準はない。それが基準なんだろう。旨そうだと思っ  
たら食う事にしてるが。

そして喰ったらあの味もそっけもない白い空間に戻ってくるわけだ。  
そして俺たちは次の飯の時間を、ただのんびりと過ごすわけだ。

そうやって……生きていくわけだ。

俺の話をしよう。

便宜上『ハイイロ』とは名乗っているが、その名で呼ばれることを  
好んだのはシロとクロだけだ。

何せ俺たちが漂うのは夢の世界。住人は俺とシロとクロだけで、隣

人は俺とシロとクロで、家族は俺とシロとクロだけなのだ。  
心底つまらないと思う。

ちなみに俺と言う存在はシロとクロによって生み出されたらしいが、  
どうにも怪しい。あいつらが言うには『ダレカ』の『夢』を基準に  
したらいいんだがな。道理で俺の思考の基準がシロとクロと合致し  
ないわけだ。

過去、未来、現在。

それが夢には何一つ意味を齎さないものだと言ったものの、  
やはり夢の内容はその主に引つ張られることが多い。そりやそうな  
んだが……たまにあるだろう？ 自分が違うナニカになった夢って  
主が虫になった夢もあった。主が木になった夢もあった。主が星に  
なった夢もあった。

だがやはり多いのはヒトの夢なんだ。夢の世界はその主の存在に引  
つ張られる。当然か。

そうやって様々な夢を見て、食っていくとどうにも外の世界に興味  
が移ってしまう。シロとクロなんてのは旨いかまずいかくらいにし  
か興味を示さないが、俺にとっては夢っていうのは鏡だ、それも酷  
く歪んだ。

夢で繰り広げられる様々な者、物、モノ。

その中に俺の知っている何かがあると、どうにも在りもしない郷愁  
が俺を襲う。

前は夢の中にあっただお菓子之家に妙な懐かしさを感じてしまった。  
あの夢を見た奴は絵本でも見たのだろうか？ それとも元となった  
モノだったのだろうか？ それともそれを望んだ乞食だったのだろ  
うか？

何にしても俺の興味は決して見ることの出来ない夢以外の世界にあった。すなわち現実に。

時折シロとクロに漏らしては苦笑されていたが。

バクに苦笑されるってのはあれだな。酷く不愉快だ。

と、こんな感じで生きてきたわけだが、この白い空間に俺達以外の色が現れた。

それは言うなれば客人なんだろう。

金の髪を靡かせ、身に纏う紫に彩られた衣服はどっかの道士を連想させる胡散臭いもの。そこに描かれた白と黒の対極図が何だか不愉快だった。あれだ、多分灰色がないからだ。仲間外れにしゃがって

そんなヒトガタが俺らを見て目を丸くしているんだ。

端正な顔立ちにして美麗。絶世の美女だなんて言葉使うとは思わなかったが、彼女にはそれが相応しい。絶世などと言っても俺の知る世界は狭いものだが。

兎にも角にもこの来訪にして邂逅はアチラにとっても予想外なものだったらしい。

白と黒と灰色を目の前にして金の紫はただ惑う。

なんだろうな、唐突にこのヒトガタと触れあいたくなって、俺は口を開くのだった。

「よう、ヒト」

## 第2話 「不幸幸福」

境界を操る、と言ってもそれは万能なものではない。

むしろ一個人が行使するにはあまりに行き過ぎた力に他ならない。

例外なく万物の境界を操り、その理を紐解いてしまうような力であれば……それは。

幸か不幸か、そんなヒトの手には余る力を持った妖怪がいた。

名は八雲紫。彼女の始まりがいつだったにせよ、どこだったにせよ、どちらでもよいことではある。確かに彼女は存在して、生きているのだから。

彼女は賢い。どうしようもないほどに。

それが境界を操るという力故なのか、それとも代償なのかは本人にしか分からぬことだが、その能力を自由に使えるほどの賢さを彼女は持っていた。

どのように扱えばいいのか、どこまで扱ってよいのか、そしてその結果どうなるのか。

それをきちんと理解した上で、彼女は世間一般において大妖怪と謳われるまでになったのだ。

世間一般、とはまた妙な話ではあるが。

そんな彼女の趣味の中に、他者の夢に入り込むというものがある。現実と夢の境界を操り、その中に入り込んで頬を歪ませる。なんとも趣味の悪い話ではあるが、そこは妖怪。『常識』とは違う何かがあるのだろつ。

その日も八雲紫は変わらなかった。

妖怪としての矜持を守り、人間を化かし人間を食い、気ままに気まぐれに生きていく。

とある傲慢な人間の夢に入り込むことだったただの気まぐれだった。傲慢。それは圧倒的強者の立場にある妖怪の立場からすれば、人間のそれなぞ失笑ものだった。

武器をちよつとだけ普通よりも振るえるくらい。金を普通よりもちよつと多く持っているくらい。立場がちよつとだけ普通よりも高いくらい。

どれに当て嵌まったのかは分からないのだが、兎にも角にも八雲紫の『本日の玩具』はその傲慢な人間に決まったわけだ。

どのようにして化かしてやろうか。

どのような悪夢を見させてやろうか。

どのように食ってやろうか。

麗しい顔立ちを邪悪に歪ませて、八雲紫は隙間を開く。

気味の悪い目玉。不釣り合いな西洋の結び目。名を表すような紫の空間。

スキマ妖怪である彼女の操るそれは、ありとあらゆる境界を飛び越える。

そして今日も夢の世界へ。

気付けば 彼女は白の空間にいた。

「よう、ヒト」

自らの意識が遙か遠くに飛んでしまっている状態。そんな紫の耳に聞こえてきたのはあまりにそっけない一言だった。

どこから？ 当然、目の前にいるわけのわからないものからだ。吐き捨てられたように投げられた声色は確かに男特有の低い音。ダンディと言うには程遠い、だが無邪気と言うには無理がある。そんな声。

「……………」

だが紫の理解はその声を分析するだけで止まった。

此処は？ あなたは？ 何故？ 私は？ …… 八雲紫だ。

唖然とした表情を変えることなく自問自答をはや一瞬で済ませた彼女は、ようやく口を開くことに成功した。



「えっ……と。あなたは？」  
「ハイイロ」

いくつも浮かび上がる疑問の内から選んだ質問は、これまたそっけない一言で返された。

そんなもの言われなくても分かる、そんな内心を顔に出すことなく紫は目の前のナニカを見据える。

ハイイロ、灰色、ハイイロ。名前か、それとも通称か。どちらにせよその言葉は彼を指すには十分であっただろう。

身体は隈なくその色で塗りつけられ、貼り付けられたような表情は泥が流れるように変わる。

ハイイロ、そう名乗った時はものすごく嬉しそうな顔をしていた。ヒトと投げかけられた時はどこか憂いのようなものが見えていた。

何だ。自分はよく彼のことを見据えられている。

予期せぬ邂逅でありながらその表情の粒さを記憶出来ていた紫は、ここになってようやく冷静さを取り戻していた。

「ハイイロ……そう、ハイイロね」  
「おう。で、こっちがシロ。こっちがクロだ」

安直。二匹のバクを指差して望んでもいない紹介をし始めるハイイロに、紫は身も蓋もないその名前に眉を少しばかり顰めた。

別にその言動に見え隠れし始めたマイペースさに不愉快を覚えたわけではない。シロとクロの見た目がバクの生物だということに、だが結論を投げかけるようなことはしない。まだ、しない。

「ちょっと聞きたいのだけれども……」  
「駄目だ」

此処は何処だと聞こうとした手前、ハイイロは右手を前に出して紫に手の平を見せた。

ちよつと待てのポーズ。まるで犬や猫を飼いならすような仕草だったが、それも仕方ない。何せ彼の傍に何時の日もいたのはバクだけなのだから。

が、どちらにせよその行為は紫にとって真実不愉快なものにしか成り得ない。

紫にとって、この空間も目の前のナニカも未知なるものである。

では未知に対して最も感じるものとは？ 無論、危機感。

知らぬナニカ。知らぬ場所。強引な言葉。それを認識した時、紫は徐々に妖気の類を身の内に込め始めていた。

右手を背後に回し、相手に見えぬように手を振る。小さなスキマが空間を裂くように開かれた。……力は、使える。

「おー……おー」

「？」

それと同じくしてハイイロは左手で顎を撫でては感心したように頷いていた。

疑問の顔を浮かべてはみる紫だったが、彼の視線は彼女の顔ではなく、隠された右手。

彼女の口から舌打ちが漏れなかったのは僥倖だろう。どちらにしても紫にとっては好ましくない状況だが。

「すげーな、それ。どうなってんの？」

「さあね？ 魔法かもしれないわよ？」

自分でも拙いと思ってしまうほどのやり取り。

本来ならば此処で少々力を行使用するのもしやむを得ないと考えた紫だったが、目の前のナニ力はそんな彼女の認識とはかけ離れ過ぎていた。

自分を指差しては二匹のバクとすげーすげーと盛り上がるハイイロバクの方は一向に興味を示した様子はなく、ただ一人はしゃぐ彼はなんとなく、頭がよさそうには見えなかった。しかし、その表情は気味の悪い色をしながらも喜悦に満ちている。

なんて、毒気を抜かれる。

ほんの少しの安心と溢れる困惑は紫の頭から『攻撃』という手段を薄れさせた。

そも、言語を解し興味を向けてくれるのならまだ余地はあるのか。これならば、私をしつこく追っかけ回す退魔師や陰陽師の輩よりはよっぽど文化的である。

大妖怪、八雲紫はそんなことを思い始めていた。

「で、此処は一体どこなのかしら？」

「だから駄目だって」

冷静さを、つまりはいつもの狡猾そうな眼を取り戻した紫であったが、やはりとも言うべきか。再びの問いはあっさりと却下された。今度は困ったように此方の言葉を遮ってくるハイイロという男の籠った声。そもそも男なのかどうか。

見たところ衣服のようなものを着ているのは見られない。筋肉の張りや肉のふくらみが全くないのではないのかとしか思えない。まるで子供の落書きのようにただ人の輪郭を象っただけ。

（気味の悪い……）

心の底に落とした言葉ははっきりとした嫌悪感だった。

その灰色の唇から音が言語をもつて出てこなければ、真実、ハイイロは化け物なのだろう。いや、生意気そうな言葉が出てくるこの状態も十分に気持ち悪いのかもしれないが。見てくれに捉われるのは一般的に好まれない。だが事実なのだ。心に浮かんだ感情を偽る理由も紫にはない。

だが肌を震わすような嫌悪感果たしてその見てくれが理由なのだろうか。

フリルのようなものが多分に付けられた道士服の下、紫の玉のような素肌は密かに震えていた。

勿論恐怖などではない。仮にも八雲紫は大妖怪。相手が神だろうと悪魔だろうと、現実を直視して心を諫める強さと賢さはある。

ならばこの妙な違和感は何なのだろうか。彼女は理解できなかった。

「次は俺が聞く番だろう？」

「ああ、成程。そういうこと」

不満。それを露わにした声色は紫を静かに納得させた。

「あれだ。まず名前」

「……八雲。八雲紫よ」

一瞬、自分の名を正直に答えるべきか否か迷った紫だったが、結局はその灰色の瞳に負けた。その濁った色の中に宿したキラキラと光る期待感に。

答えた名前にハイイロは「おー」だの「ふーん」だの感心したような興味がないようなあやふやな反応。

紫はため息をついた。……まあ、いい。次は私の番だ。

「で、此处はどこ？」

「どこって……何が聞きたいんだ？ 成り立ちか？ 座標か？ 名前か？」

ピクリ。紫のこめかみに血管が浮いた。

どうにもこの男、会話の節々に妙ないらつきを感じさせる才能があるらしい。紫にとってはその全てが知りたい限りなのだ。いちいち問い返さずにその全てを答えればいい。

「……名前よ」

「おー、やばい。どうするクロ。答えられねーぞ」

なるべく低く声を抑えて伝えた言葉に、ハイイロは頭を抱え込んだように蹲っては、隣で鼻をスンスン慣らすバクに助けを乞いはじめた。

うんざり、げんなり、いらいら。そのどれもが紫の脳内に満たされていく中、彼女には一つの推論があった。ハイイロの言動が能無しそのものだったが故に、彼女がそうする方が早かったとも言える。

というか、バクを見た時点である程度分かっていたことなのだが。

「ねえ、あなた……は分からないけど、その『獺』は夢を食べたりするのかしら？」

「ん？ おー、食うぞ。俺も食うし」

「あなたも？ ……『獺』？」

「ちげーよ」

小首を傾げて問えば、あるはずもない眉を潜めて否定するハイイロがいた。

何にせよ、これで紫の予想にしか成り得ない考えが少しばかり確信に近づいた。

そもそも彼女が此処に来る前に開いたスキマは夢の世界へ繋がるものだ。それも一個人の、あの小汚い傲慢な人間の夢の世界へと。

それが何の因果か夢を食い物とする獺の埒へと繋がってしまったのだ。言わば夢と現実の狭間。成程、境界を操る八雲紫ならではのアクシデントだったのかもしれない。

そも、紫は夢の世界を牛耳る神でも何でも無い。ただ『遊び』の一环としてその世界へ忍び込めるだけ。その全てを知り尽くしているわけでもない。

『獺』が食おうとした夢をたまたま選んでしまったのか。ともすれば紫が其処へ入り込めば夢もろとも、其処で寝転がる二匹の獺の腹に納められてしまうわけだが 紫は人知れず冷や汗を垂らした。

気付けば、その件の獺は紫がじっと見つめている。

その大きな頭部には不釣り合いな小さい瞳が彼女を捉えて離さない。なんだか自分の考えを読まれているようで、その上嘲笑っているようにも見えて、紫はたまらず眼を細めた。

このゆかりちゃんと言うヒトガタなんだが、どうにも俺の言葉を受けては機嫌を損ねている気がする。正直な話その詳細が俺にはわからない。

いや、おそらくは俺の態度がいけないんだってことは分かるさ。だがどう直していいものかが分からない。いや、思いつかない。所詮、俺がハイイロである時から過ごした時はこの白の空間（ゆかりちゃん曰く狭間）と他人の夢の世界での時間だけだ。

現実ではない。

これがねえ……情けなくもある。

夢、狭間、夢、狭間。その行程を人生の常として過ごしてきた俺にとっては、道理というものが分かっていない。

なぜならば、そのどちらの世界もそんな面倒くせえ理なんていらなかったから。

そんなただ唯一、夢の世界に定められた『自由』という理は俺を利口な子供にする機会を奪っていきやがった。

不条理がある      そういう夢だから。

不平等がある      そういう夢だから。

不可解がある　　そういう夢だから。

ありとあらゆる物事をそんな言い訳で処理できるそんな世界で暮らしてきた俺には　『現実』が足りていない。

「経験とも言っな」

「……………」

ほら。こうやって目の前で俺の言葉を待ってくれているだろう彼女を放って、自分勝手な思考に深く沈んだのがこの様だ。

視線は明らかな拒否の意思、嫌悪の感情、怒り、呆れ。沈黙が恐ろしい。

そんな意思をきちんと理解できる頭と造られた記憶があるというのに、それを旨く対処する経験が圧倒的に足りない。

出もしない冷や汗を感じながら、俺は隣で吞気に欠伸をする二匹の家族に助けを求めた。

なんだろうな、電腦空間では強気で現実では弱気な引きこもりみたいだ。そんな例えば、記憶にはある。

「あー……おー……」

「何か言いたいこともあるのかしら？」

大人の女性然りというような艶めかしい声は成りを潜め、獣の唸り声を感じさせる荒々しい口調に、俺は……まあ別に怖くはなかった。何せ俺は『現実』が見えていないモノだからな。いや、果たしてそれだけか？

だから恥とかプライドとか、そういうものを抜きにして物事も言える。

「あれだ。落ち着け。実のことを言つと俺は現実の道理なんて全く



わかっていなくてな。つまりはゆかりちゃんからしてみりや俺なんてただ生意気なガキなんだ。社会勉強が全くできていない世間知らずのお坊ちゃん。しかも筋金入りのだ。というわけでゆかりちゃんの感情の機微にも絶望的なまでに疎い。いや、君が怒ってるのはわかるんだがどうすりやいいのかわからない。むしろ忘れているのかもしれない。つまり、本当のところ悪いとは思っているはずだ。たぶん。オーケー？」

一息に出た言葉の羅列は意味がきちんと込められていただろうか。ひよつとすればここまで長ったらしい言葉を続けたのも初めてかもしれない。何せ俺の話相手はバクだ。なんとなく言葉は通じるが、互いに論争を繰り広げるような頭の固さも情熱も持ち合わせてはいない。

もしかしたら、一番長かった会話は2、3分だったのかもしれない。が、オーケーという言葉を使い終わると同時に一瞬ゆかりちゃんが妙な顔をしたのが気がかりだった。その表情に浮かんだ純粹な困惑に。

「つまりあなたは夢の住人であるが故に……」

「いや、もうちょっとわかりやすく言ってもらってもいい。俺は構わない」

「阿呆」

「ビンゴだ」

風の音も小鳥のさえずりも聞こえるわけもない空間に、俺の指を弾いた音がどこまでも響く。その後に気まずく続いた沈黙は悶絶ものだった。

滑っている。胡散臭い目で此方を見つめるゆかりちゃんが印象的だった。

阿呆。馬鹿。つまりはそういうモノなんだろう、俺は。

あれだ、親の仇を目の前にした復讐者に対して「話せば分かる！」

「復讐はよくない」などと空気も読まずに叫ぶような鬱陶しい愚かさがある。

……死んで治るような愚かさならばまだマシなのかもしれんが。

「で、だ。俺は『そういうモノ』だ。どうしようもないほど阿呆で、その癖正論しか吐かないような奴だ。吐けないような奴だ」

「……だから、何？」

「あれだ　そう怒ってくれるな」

おおぅ……こういう時に限っていい言葉が浮かばねえ。

だが仕方がない。だってそうじゃないか。

この愚かさが俺の性格であり、在り方であり、そして唯一の拠り所だ。ならばこんな厄介な在り方を許してもらうしかない。

果たしてヒトとヒトとの関わり合いとはこうも面倒くさいものだったのだろうか。シロとクロとの会話にこんなギクシャクしたものなどなかったはずだが。

……そっぴやお前らはバクだったな。忘れてた。

相も変わらず当の2匹は我関せずを貫くように、俺と目も合わせてくれない。そのくせ聞き耳は立てているようで俺が口にする一言一言に深く息を吐く音が聞こえる。

なんとも、性格の悪い奴らだ。せめて2色に別れたのならどちらかは天使であるべきだろうに。

「はぁ……分かった、分かったわ」

「おう。頼む」

「お願いします、でしょ？」

「おお、お願いします」

腰に手を当てて眉を下げたゆかりちゃんはどことなく姉気質のような頼もしさを湛えていた。包容力とはちよつと違う、手を引っ張っていつてくれそうな印象。

果たして俺の記憶にはそんな人物がいただろうか。いや、興味はないな。

「全く……とんだ不運だわ」

「つつても勝手に他人の夢に入ろうとした自業自得じゃね？」

「……………」

「お？ ああ、空気読めて無かった。すまん」

ジト目を向けられちゃあさすがに分かる。というか口走る前に分かるべきなんだろうけど。

どちらにしても不倶戴天の敵ゝなんて関係にならなくて本当によかった。何せこの狭間にやってきた初めての客人で、シロとクロ以外で出会えた初めてのヒトだからな。

もう、こうなつてくるとお喋りしたくて堪らないのだ、いろいろと。

俺にない何かを埋め合わせたくて。

交わした言葉はそれなりに多かった。

が、だからといってゆかりちゃんをいつまでもこの世界に留めさせるわけにはいかない。いや、特に消滅する危険があるとか夢に飲み込まれるとかそんな物騒な話でもなく、ただ会話が長引くに連れて彼女の顔色が徐々に不機嫌なものに変わったからなのだが。

あの時さりげなくそれを教えてくれたシロに感謝。クロ、てめーは寝てばっかだったな、こんちきしょー。

なんにしても現実世界のヒトと会話出来たのは、本当に本当に本当に嬉しかった。

様々なものを聞いた。現実を流れる時間軸やら妖怪という種族についてだとか。そのどれもが記憶の中に納められた驚くこともない事実ばかりだというのに、彼女の口からそれが語られる度に俺のあるのかどうか分からない胸の鼓動は早くなった。

夢を構築するヒトガタが生きる世界。

カツコつけた言い方をすればそんな世界が現実なわけだが……やはり降り立ってみたい。ゆかりちゃんからすれば、全ての物事に自由が保障された夢の世界は一種の楽園らしいのだが、やはり、味気ない。

「なー……ゆかりちゃんがこっちに来れるなら俺だって行けるだろー？」

シロとクロに聞く。

といっても別段聞かなくても俺が現世に降りられるのは知っているのだが、この2匹が率先して賛同してくれない。

まあ、そこらは俺と彼らとの違いがある故のことだから、重大な秘

密だとか危険な歪みだとかそういう問題はない。シロとクロにとつてそれは面倒くさくて、俺がただ駄々をこねているだけだ。

「というかゆかりちゃん、絶対俺のこと化け物かなんかだと思ってるよな？ うあー……全身灰色とか不便すぎる。そもそもお前らつて名前の割には指先とか肌色なのは何でよ。だったら俺もきちんとしたヒトガタにするべきだろうが。……何？ 出来るの？」

何にせよ。今日は最高にいい日だ。

2度と来るかと言わんがばかりの表情で別れを告げたゆかりちゃんとか、俺がはしゃぐにつれてそっけなくなってきたシロとクロが気になるが、まあ、それを差し引いても今日はいい日だ。

いい日、だよな？

名も知らぬ森の中。

日の光を遮る木々の群れがどこまでも続き、道なき地を鬱蒼とした草花で埋め尽くしたその森は、世間では死の森という名で呼ばれる忌み嫌われた土地だった。

といってもその名を知っているのは森に近接する村々で、そこに住

む大人たちが子供を戒めるのに名を呼ぶくらい。忌み嫌われたというのもありもしない噂が勝手に出歩いた結果のようなもの。

その森の先に何があるのかなど知るものはいないが、険しい山々が連なっているところを見ると、ひょっとすれば秘境のようなものもあるのかもしれないだろう。

果たして それは事実か否か。

そんな森の最奥。 昼時には見えない暗がりの中、虚空に不自然な切れ目が走った。

開かれるスキマ、暗がりの中でも不気味さを失わない境界の奥から、疲れたような表情を浮かべた八雲紫がふわりと地に下りた。

どこまでも景観と不釣り合いな道士服を靡かせて、彼女は一息ついた。

「夢……か」

見えぬはずの青空を見上げ、ただ茫然と呟く。

それはつい先ほど体感した厄介な人物を思い出した故にか、それとも輪郭を帯びていなかった『夢』という概念への理解が深まった故か。

実のところ、彼女にとってもハイイロとの邂逅は幸運だった。

何しろ、彼女の知られざる理想の中に、『夢の世界』とも変わらぬ楽園の創造があつたのだから。

「夢、現実。 ならば幻想はどこに向かうべきなのかしらね」

憂いを帯びた目はすでに空を見上げていなかった。

歩をゆつくりと進めるのは森のさらに奥の奥。

幻想郷。

まだその名で呼ばれる前の秘境が、そこには広がっている。

### 第3話 「穢れた期待」

悩みがある。

いや、そりゃどんな形であれ生きているんだから当たり前前の話ではあるんだが、悩みを持つということは俺にとってそれなりに特別なことでもあるのだ。

何せ俺は現実を知らぬ狭間の中に生きる者。まあ、言ってしまうば引きこもりなんだが。

兎にも角にも俺が様々な悩みを持ち始めたのはやはりゆかりちゃんと会ってからなのだろう。彼女と会う前から現実に対する関心は並々ならぬものを持っていたが、所詮それは俺の記憶が望んでいるものだ。ハイロの心が望んだものじゃない。

だからこそ現実に通い出る方法を知りながらも、いつまでも夢と狭間を行き来しては無難に生きてきたのだろう。

しかし、しーかーしー、だ。

ゆかりちゃんと会っちゃった。

心を持ち、心を動かし、心を隠そうとするヒトガタに会っちゃった。道理、心情、常識、そんな現実の象徴に絡め取られた『生きるナニカ』と出会っちゃった。

ならば、俺は変わるしかないのだろう。

今になって思う。

シロとクロと出会ってから、つまりは俺が生まれてから過ごしてきたハイイロはひどく機械的だった。口調も、表情も、心情も、どれ



もこれも記憶で塗り固められた受動的なもの。  
あんなに流暢に言語を並べていたのに、だ。

今になって思う。

夢の世界なんていう馬鹿げたものに張り付きながらも、俺はまるで  
無感動だった。

おかしいだろう？ 何度も言うが夢の世界とは全てを内包するもの  
だ。簡単に言えば全ての願いが叶うと言ってもいい。

なのに、俺の心は動かない。その夢の世界が他人のものだったとし  
てもだ。

今になって思う。

そんなポンコツ、ハリボテ、ガラクタの俺に残されたのは……記憶  
に残されたほんの僅かな郷愁だった。

夢の世界を垣間見る度にピクリとも動かない俺の心が波打ち、そし  
て消えていく。それをシロとクロに愚痴ったりしたこともあったが、  
所詮小さな波だ。流れを作るまでに大きくは成ってくれなかった。

そして、現実の一端に触れることの出来た俺は、今になって強く思  
う。

「外に出てえ……」

と。

悩みとは、まあいろいろだ。

現実には這い出てどうするつもりか。そもそもこの身は何に分類されるべきか。というか灰色の身体じゃ気持ち悪い。そういえば普通の飯も食っていない。ゆかりちゃん以外も此処に来ることが出来るのか。

今になって微々たる感情を取り戻した俺は、その日その日の終わりと始まりには常に考え込むようになっていた。

悩み。まあ期待と不安の塊だと思ってもいい。

どうすべきか。どうすべきか。どうすべきか。今まではその問いすべてに『夢』という答えを出してきた俺には、少々難しすぎる問題。シロは言った。まずはやってみればいいと。

クロは言った。まずは間違ってみればいいと。どちらも似たような意味合いではあったが、何分クロの方が辛辣ではあった。

こいつ、こんなに性格悪かったのか。

俺にとってクロとシロはある意味両親といってもいいのだろう。

核となったものは彼らから生まれたものではないとはいえ、生み出そうとした意思は確かに彼らにあったはずだ。未だ俺を生み出した意味は判明していないのだが。

何のために。たった五文字で聞いてみてもシロとクロは何も答えはくれない。まあ、別段それを気にし過ぎているわけではないのだ

し。

「なあクロよ」

いつものように寄り添ってくるクロに話しかける。

彼はよく俺にその黒い鼻をこすりつけようとする。それが機嫌のよさを表すのか、それとも何か訴えるものがあるのかはその時々だが、兎にも角にもクロは俺に鼻を擦りつける。

一瞬子犬のような可愛らしさが脳裏を過ったのだが、実際に目の前にある不細工な顔にその幻想は一瞬にして崩れ去った。こればかりはどのようなお世辞を使ってもフォローできそうにない。残念ながら。

そんなことを表情に出さずして思えば、決まってクロは不機嫌そうに鼻から息を漏らす。こいつは俺の心の内でも読めるのだろうかなどと疑問に思ってくるが、ひょっとすればそれもあながち間違いなんかじゃないのかもしれない。

なんとなくそっちの方が素敵だ。

……彼の毛むくじゃらの顔を見ている内に何を問おうとしたのか忘れてしまった。

兎に角クロの機嫌を直そうと彼の頭を撫でてやる。優しく、ゆっくり。手に伝う温かい感触が気持ちよかった。

そして当然のごとくクロを撫でてやればシロも「自分も自分も」と寄ってくる。

短い脚を精いっぱい動かして此方へ駆け寄ってくるその様は……あれだ。非常に愛い奴ではある。まあ見た目に関してクロとシロはただ色が違うだけで他はほぼ一緒だけだ。

シロは俺によく気を遣ってくれる。

もしもクロが親父というならば、シロはどちらかというとおふくろの位置にいるのだと俺は思う。少々放任主義の気があるのが玉に傷なんだけどな。

といっても比べるモノがクロしかないのだから、ひよっとすれば他から見たシロも意地悪な輩なのかもしれない。俺が狭間に寝転がるときの枕になってくれる彼には非常に感謝しているのだが。

「なあシロよ」

お前は外に出たいとは思わないのか？

目の前で気持ちよさそうに俺に撫でられ続け、そのうち眠ってしまいそうなシロをじっと見やる。前足に頭を乗せ、目を瞑るその姿は俺の悩みなんぞには知らん顔。

声に出してしまえばいいものを、肝心の言葉は内心に落ちただけで声にすることは憚られた。

事実、シロとクロは外の世界に……現実に興味はないのだろう。

現実に対する羨望と期待は複雑な過程によって生まれた俺しか持ち得ない。そも、夢の世界を行き来することに充足を満たされずにいるだけでも異常なのだ。

シロとクロの在り方こそが『本当』なのだろう。

飯の時間だ。

唐突に俺の思考はその言葉によって遮られた。と言ってもただ単に空腹感が俺を襲ったからこそ、そのような言葉が脳内に淀む悩みを消し飛ばしただけだが。

面倒くさく色々と悩んではみるものの、単純な欲求に負ける俺の思考に我ながら呆れる。

兎にも角にも飯だ飯だと、我らが三匹は腹を鳴らす。

いつものようにダレカの夢と繋げるように狭間の世界を歪め始める俺。未だにどうやって歪めているのかは説明しづらいのだが……まあ出来るのだから別にいいだろう。

現に白の風景がガラスに罅が入るように砕け始め、その隙間から黒の色が漏れ始める。後は餌場に自動的ってわけだ。

正味な話、入る夢を選ぶことも出来るのだがそれじゃあ面白くない。まずいか、旨いか。それが分からない食事というのも『飽き』ないためには中々に有効な趣向ではある。

（なんだろうな……出来ることは無数にあるというのに）

現実にも降りられる。夢も選ぶことも出来る。ともすれば俺はこの世界において万能であるはずなのに。何かと理由を付けてそれを縛る様は何だか無様だ。

徐々に黒に変わってゆく世界をぼんやりと眺めながら、俺はそんなくだらないことを考えていた。

その景観を徐々に彩りのある夢の世界へと変えていく。それが俺た

ちの常であり、餌場へと移動した合図でもある。

だがしかし。白の世界を侵食しきった黒の世界は、そのまま色を取り戻すことなく漆黒の色を象ったままだ。ともすれば淀んだ黒色であるクロが見えにくくなるくらいには。

これはおかしい、とは思わなかった。

稀にいるのだ。夢の中ですら色を望まずに、ただ闇の中で慟哭することを望む輩が。

罰を望むもの。悪夢を望む者。苦痛を望む者。

決まってヒトは夢の世界を思うがままに操ることは出来ない。何せ彼らは寝ているのだ。確かに夢の世界は万能だ。しかし主はそれに気付かない。なんだかずるい気もするのだがそれが夢っていうものなんだから仕方がない。

で、今回のように悪夢を望む連中っていうのはその例外に当たる。何せ選ぶことが出来ない夢の世界であるはずが、悪夢を見続けるというのだから。それが意識的にか、それとも無意識的にかは別として。

それを為すのは人外染みた罪悪感か、それともそれを愉悦として感じる破綻者か、それとも目的のための手段か。

何にせよ、わざわざ苦しいだろう悪夢を望む意味なんか俺には全く理解できないが、今回の夢の世界の主はそういった輩らしい。

そいつは困る。何せ悪夢を平らげるのはシロであり良い夢を貪るのがクロだ。つまり、今回クロはお預けということである。

と言っても、俺たちが夢の主に止めるだなんて言うわけでもなく。常であれば運が悪かったとクロを慰めながら、シロの腹が膨れて満足そうな不細工顔を眺めるだけだった。

しかし。

全く……何を思って俺はこんな行動に出たのか。

自分でも少々理解出来かねるのだが、俺は『なんとなく』この闇の中で独り茫然と突っ立ったまま動かない主に話しかけてしまったのだ。

理由を付けると言われれば、おそらくは俺が変わったからだろうと言えるだろう。だが変わったからとはいえ、主に接触を図ったのは別の理由だ。

徐々に表に出始めてきた、好奇心の表れ。歓迎すべきことなのかは未だ分からないのだけれども　まあ、価値はある変化だろう。

が、どう声を掛けていいものか。

目の前に佇む一人の少女らしき姿をした人型を前にしてしばし悩む。黒に染まった世界で不自然な輪郭をなぞるその姿は、ひどく周りの景色と不釣り合いではある。少しばかり歪みのある桃色の髪、纏う衣服は白と水色の模様で彩られた和風の着物。まるで地べたに座り込むようにして頭を擡げるその表情は、黒の世界では少々目にきつ

い髪の色に隠れて見えはしない。

だがこの姿が本当に夢の主のものかと問われれば首を傾げざるを……いや首を強く振らざるを得ない。

何せ夢の世界では主の姿すらも不定形だ。故にこの見た目麗しそうな少女の正体が、夢から覚めてみればいかついおっさんだということもあり得る。

……込み上げる吐き気。吐きだすものなどないと言つに。

といつてもわざわざ悪夢を望む輩が夢の中では違う見てくれを持つとは思ひ難い。自分の姿すら固着させる所業は驚くべきものであるが。

再び思う。全くもって理解できない。わざわざ苦しい夢を望む意味もないだろうに。

相も変わらず灰色に染まつた指で頬を搔けば、再度どうしたものかと頭を捻つた。

正直な話、俺は今更ながら後悔し始めていたのだ。純粹な好奇心からこの夢への干渉を望んだものの、よくよく考えてみれば対象が悪い。

言つてみれば実験対象を間違えたというところだろうか。

……言い方は悪いが、間違えてはいない。

俺の好奇心を満たすために、わざわざこのような面倒くさそうなヒトガタを選ぶ必要などなかった。さらに言えば、夢そのものに特殊性を望む必要すらない。

悪夢を望むヒトガタよりも、ただ普通に夢を見るヒトガタに接触を試みた方が、よほど俺の好奇心は満たされる。



何せ、俺の好奇心が向かう先は 現実なのだから。

故に、夢の中ですら悪夢を望むなんてものなどまるで必要がない。その程度の異常など、この夢の世界では吐いて捨てるほどもあるのだから。

内心に次々に浮かぶ後悔と嫌悪の数々は、ともすれば他人に見せることのできるようなものではないのだろう。

勝手に興味を持ち、勝手に失望し、勝手に嫌う。目の前で頂垂れる主に対するあまりにも行き過ぎた侮辱、蔑み。しかし本心だった。

（ゆかりちゃんに聞かれたら……いい顔をするはずもないかー）

彼女の顔を浮かべては、あの綺麗な顔が般若の如く歪むのが連想出来た。いや、彼女はそこまで他の何かに同情的なヒトだっただろうか？ ……情報が、経験が足りない。

だが俺の記憶は明らかに今の俺に嫌悪感を示している。それこそ廃棄物を想うような勢いで。

しかし、俺の胸は痛まない。痛まないんだ。

「はぁ……」

つい漏れてしまった溜息が音をもって世界に響いた。

迂闊。俺の顔に張り付いた表情が歪む前に少女の肩がピクリと動き、放り捨てられた人形のように動かなかったその身体がゆっくりと生氣を帯び始める。

まるで空を見上げるように髪が分けられたその顔は、やはりということかなんというか美人ではあった。

といっても部品そのものは全て整っているというのに、瞳の奥の濁りようが尋常でない。生気がない、覇気がない、正気でない。ただ

一つの色しかない瞳を持つ俺でさえも忌避感を持つてしまうような瞳。

それだけでこのヒトガタが悪夢を望む者だと理解出来る気がする。

「……………」

「……………」

初めて面と向かって相對する俺と少女。

美女と野獸などと言うつもりなんてまるでないのだけでも、彼女の見下ろす形に突っ立っている俺は別段少女を害する気なんてあるわけもない。

……先ほど彼女に対して思った、筆舌にもし難い侮辱は置いておいてだ。

だが俺を視界に入れた少女が取った行動は……その顔に浮かんた表情は確かに恐怖だった。

「あ……え、ひっ……」

「いや、その、あれだー……っ」と

目に見えて怯え始めた少女に対する俺の言動はあまりにもヘタレていた。息を飲む暇すら与えられずにこうも真正面から怯えられると俺とて何を言っていいものか途方に暮れてしまう。

目には涙をため、手先は震え、地に投げ出した足は逃げるように地を這いずる。……これじゃあ本当に野獸みたいじゃないか。

夢の中、なんだけどな。どうにも目の前の人物が夢のモノとは思えない。まるで現実の主がそのまま此処に捕えられているみたいだ。

「いや……来ない、でっ……！」

「いや、動いてないんだけど」

うあー、違っだろうハイイロ。そんな言葉がほしいんじゃないだろう、彼女は。

俺に気づくまで彼女がどんな心を持っていたのかは知らないが、現状においての俺の存在は正しく『化け物』だ。急激に目の前に灰色のナニカが現れれば誰だって驚く。怯える。

「ちょっと待て、怯えるな。あれだ。喋られるだろ？ 俺。ほら、ちょっと身体の色がおかしいけれど、言語が使えて、顔も……あー、いや、顔は気持ち悪いけど、人間とほぼ変わらないじゃないか、変わらないよな？ だからあれだ、その、コワクナイヨー」

これは酷い。子育てに慣れない強面のオヤジだってこんなあやしかたはしないだろう。

だが俺の言葉の調子は恐怖を薄れさせるというよりも間抜けさを前面に押し出すようなものだ。ひょっとすれば少女も啞然としてくれるのかもしれない。

「いや、いやあ……」

駄目でした。なんだよもう、どうすりゃいいってのよ、もう。

まるでこの世の地獄を見ているかのように狂乱する目の前の桃色少女は……狂乱？ ちとそりゃおかしい気もする。

気付いたのは僥倖と言えるのだろうか。

何だかこの少女の恐怖は俺に向けて送られるような類のものではない気がする。果たして俺がただ感情の機微に疎いだけだというのならそれも納得出来るのだが、それにしても少女の反応は異常過ぎる。俺から離れると言うよりは俺を離れさせるというような。俺に恐怖するというよりは自分に恐怖しているような。この黒の世界に怯えると言うよりは……自分に怯えているというような。

なんだ、これ。

「もう、もう……殺したくない……っ」

はあ？

## 第4話 「愚図」

果たして彼女の慟哭を正しく理解することが俺には出来たのだろうか。

俺と少女のみが存在することを許された黒の空間に響いた彼女の言葉は、その惨たらしい意味に反してどこまでも澄んでいた。

兎にも角にも、俺は彼女のぐちゃぐちゃに歪んだ顔と擦れに擦れた声に圧倒された。

殺したくない。

意味が分らないと言えばその通りだ。てつきり俺との邂逅が彼女に恐怖を植え付けていたと思っていたのだが、その実、彼女は俺のことなどまるで目に入っていない。

現実から見れば化け物然りといったこの体色も、この顔も、そしてこの世界すらも、彼女の背負う『ナニカ』にとっては何一つ意味を持たない。

まあ、この悪夢に関係あるのだろうな、などと俺は彼女の顔から視線を外し、黒の世界に目を向けながら考えていた。

この夢の世界には……本当に何も無い。俺たちの罅である狭間のようにその住人以外の色を持たず、どこまでも味気ない。それとこの世界は非常に似ている。

何もかも塗りつぶすような濃い黒がどこまでも続き、その中で彼女だけが異様なまでに照らされている。

（悪夢……）

自らの身体を抱きしめ、狂ったように首を振るう目の前の少女をしばし眺めた。

俺の記憶に……といってもこの記憶は夢の世界の住人となつてからのものなのだが、悪夢と言えどもにも苦痛や恐怖を連想させるものが多い。例えば自らのトラウマを繰り返し見させる夢だとか、目に見えて痛々しい拷問器具のような物理的なものだとか。

まあ悪夢なんてその人それぞれで解釈が変わるんだからどうとも言えないのだが。

で、悪夢を自ら望む者の話なんだが……。

決まって何も無い夢を見るものが多い。今回のような黒の世界か、それともどこまでも続く荒野か、それともただの立方体としか形容できないようなどこかの部屋か。

何だつてそういう何もない……つまりは虚無的なものを彼ら彼女らが望むのかは正確には分からないけども。

おお、そうだ。聞けばいいじゃないか。

「おい」

「近づかないでっ……」

しばしの思案に暮れた時間はどれほどだったのか。未だこの世界が壊れる気配を見せないところを見ると、まだ現実の主は目が覚める様子がないようだ。

といつてもどうやって彼女を平静に戻すべきか。正直な話この世界は夢なんだと言ってやればそれで済むんだろっけどなー。

兎にも角にも。

「なー、あんた、自分の身体見てみてよ」

「ひっ……？」

んだよ……近づこうとしても駄目なんすか。

どっちにしても俺としては一つばかりどうしても確認したいことがある。くだらないことではあるのだけれども。まあ、ぐちぐち悩むよりは少しばかり強引にいつていいのかもしれない。

そう考えるなり、俺は自らの右手を彼女の前に差し出した。差し出すというよりはこちらの掌を少女に見せるような。そういえばゆかりちゃんにも同じようなことをした気がするな。

そしてごく当然のように俺は掌を巨大化させ、その一面を彼女の身体全体がはつきり見える鏡へと変化させた。

他人の夢故に、彼女自身やこの夢の世界を変化させることは出来ないが、俺自身に限って不可能はない。……さつさと自分の姿を変えればよかったと気がついたのはこの瞬間。とんだ間抜けではある。

「な、何で……」

「そこに映ってるの、自分の顔？ 自分の身体？」

「どう、して？」

「いーから」

灰色の眉をキリリと尖らせてもう一度問えば、彼女は怯えを隠すことなく頷いて見せた。

ということはこの夢の世界において自己を失わずして反映させるほどに、彼女は『病んでいる』ということだ。

なんというか、これで現実がおっさん姿ということなくなったわけだ。どうでもいいことだけど。

「おっけー、安心した。ででで、今の俺の変化どう思う？ どう見ても人間じゃないよね？ まあ事実人間なんかじゃないんだけど。しかもだ、俺って全知全能なのよね。つまりは強靱、無敵、最強なわけ。理解出来た？」

「え？ え、えつと……」  
「つまりは 死なねーってこと」  
「……………」

啞然としたような表情を浮かべる少女の視線を正面から受け止める。どうやら俺の予想は確かに当たっているらしく、こちらが並べた嘘とも真実とも言えぬ法螺の数々は役に立ったらしい。事実、彼女がおそらくは懸念しているだろう生死の問題にも俺は無関係なわけだし。

そういえば、俺は死ねるんだろうか。

いいや、今この状況においても埒に帰った後になってもその疑問は意味の無いものだろう。

それ以上に俺には知るべきモノが、知りたいと願うモノが多くあるのだから。

人間、神、悪魔に妖怪、それこそ玉石混合の魑魅魍魎が『正しく認識されている』今の時代にとって、異能というものは別段珍しいものではなかった。



ヒトを害する異能、ヒトには理解できぬ異能、ヒトには触れられぬ異能。その力の程度に差はあったとしても、そういったものを理解できる者にとって少々目を見開く程度の驚愕しか覚えないものである。

だが、それ以上に世の中には『持たぬ者』が多すぎた。

すなわち、人間。いや、どちらかと言えばこの世界に多く蔓延る人間が、運悪く『持たぬ者』であったと言っべきか。

例えば。人間は言語を行使できる。

それは虫にとって、鳥にとって、花にとっての異能である。しかし非常識ではない。

例えば。人間は長く生きられない。

それは妖怪にとって、樹木にとって、星にとっての異常である。しかし常識ではある。

この世界は、人間の常識によって成り立っている。

空を独自に飛ぶ。それは異能だ。腕を振るえば大樹が折れる。それは異能だ。みょうちきりんな光線が手から出る。それも異能だ。人間を主軸として、この世界の『常識』は成り立っている。

なんという、残酷なことか。

そんな狭苦しい世界で偶然にして現れる『持ってしまった者』は、往々にして弾かれる定めにあったと言っていいだろう。

例えば、漬物石すら満足に持てぬ様相の女子が、ただ願うだけでヒトを殺せる。

例えば、山のように大きい巨漢の男が、紙切れのように空を舞う。

例えば、誰よりも麗しい貌を持つ女性が、夜になるとおぞましい化け物の姿に変わる。

なんという、残酷なことか。

ただ一つ、種族という括りさえなければある程度の幸せを手に入れたはずが、『持たぬ者』と同じ括りであったがために不幸を味わう。

そういう意味では、ハイイロの目の前で座り込む少女　西行寺幽々子は不幸であった。

果たして彼女の異能が徐々に表に出始めたのはいつだったであろうか。

母の乳に口を付けた時だろうか。父の固い髭を擦り付けられた時だっただろうか。それとも子供ながらに行う遊びごとで庭先を走り回った時だっただろうか。それとも、それとも、それとも。

今となってそんな始まりなど彼女にとってはどうでもいいことであった。

始まらなければ、全ての不幸など起こり得なかったと思っているから。

彼女の異能とは　ヒトを死に誘うこと。

そんな子供の浮かべる絵空事の中にでもありそんな異能の一つが、彼女の持ち得てしまった異能であった。

どのような異能であれ、それ自体は忌避されるものではない。一見物騒に見えるその力も、時と場合によって大きくその価値を変化させるのだから。

戦場において。狩りににおいて。はたまた純粹に戦うためか。

どれもこれも血なまぐさい話においてのみその価値を上げる異能ではあるが……無価値ではない。

異能を持ってしまった者とは、そのような価値を見いだせる場所と

時を探し、自らの価値を示すのが常道ではある。

だが、その異能と本人の気質が絶望的なまでに合致しなかった場合は。

西行寺幽々子は、どこまでも聡明で、優しい娘だった。

彼女が最初に憎んだのは誰だったのだろうか。

否、彼女が何者かを憎み始めるのにも多くの時間を有したというのが第一に語らなければならぬことかもしれない。

一人目。純粹に彼女はその死を悲しんだ。だが気付かない。

二人目。彼女は悲しみ、そしてなお、他に悲しむ者を慰めた。だが気付かない。

三人目。度重なる事実、自ら出来ることはないかと模索し始めた。

そうやって続いていく凶事に最初に当たりは付けたのは、彼女を取り巻く何者でもなく、ただ一人の呪術師だった。

曰く、「彼女は呪われている」と。

悲しみがないというわけではなかった。振って落ちてきたような不

幸は終生共にすることを強制され、なお且つその呪いは自分でも制御できないときた。

ただ存在することで有象無象区別なく殺し、唯一の対策と言えば隔離すること。

彼女の心が、崩れ始めた。

最初に呪ったのは天だった。

神が、絶対者が、戯れにこのようなものを齎したのだと。

幽々子は憎たらしいくらいに青い空を睨みつけた。

次に呪ったのは、両親だった。

このような不幸を身体に背負わせたのはお前たちなのだと。

幽々子は、もはや顔を見ることも出来ない親を睨みつけた。

次の呪ったのは、そのような怪異を望む妖怪共だった。

私を呪って嘲笑っている者がいるのだと。

幽々子は、その果てに呪術師や陰陽術師など善意の異能持ちをも睨みつけた。

そうやって荒れていく一人の少女。

そんな彼女に残されたのは、不幸にも、不幸にも　不幸にも、心優しい本質だった。

どんなに狂って見せても、西行寺幽々子の持ち得るその慈愛のような心は薄れない。

天を憎んだ。しかし一日の果てに両手を重ねて祈ることを忘れたことはなかった。

親を憎んだ。しかし眠りの床で繰り返すうわ言はいつだって謝罪の言葉だった。

妖しを憎んだ。しかしただ一人いる友人を憎むことはできなかった。

果てに彼女が辿り着いたのは、自己の否定。

故に彼女は悪夢を望む。

幸福を得ることが罪。自由を得ることが罪。贖罪を為し得ることすら罪。

存在することが、罪。

今、西行寺幽々子の目の前には不可思議な物体が存在している。

流動する灰色のヒトガタが言葉を解し、言葉を操り、妙に楽しそうな声色を放ちながら自分に話しかけている。

それを正しく把握する前に、幽々子を選んだのは拒絶だった。相手が何者であれ、そこに『人っぽい』ナニカがいるのならば、死に誘ってしまう。殺してしまう。

そうやって少々の言葉を交わしてみれば、ようやくにして彼女は様々なことに気付き始める。

此処は、あなたは、私は。

なんとも八雲紫がハイイロと初めて出会った時と同じ反応であった。といってもそれが普通故に、別段うんざりするような展開でもないが。

しかし彼女が理解を、というよりも勘違いをするのは八雲紫よりも早かったと言えよう。何より此処は、彼女が望んだ悪夢の中なのでから。

「これが、罰……？」

「はあ？」

殺したくない宣言より数秒。

目の前で身体の動きを止めているハイイロにぼそりと彼女は呟いた。

「だって、私は、いっぱい殺して、そして、許されるはずもなくて」「あ、あ？　ちよつと、ちよつと待ってくれ。予想は出来るが理解は出来てない。まず一から、そう。一から話してみてくれ」

もはや話を通じることにはなかった。

いくら夢の世界にいるとはいえ……いや、夢の世界であるからこそ西行寺幽々子は目の前のナニカと言葉を交わす選択をしなかったのだ。

所詮夢は夢。他者の存在が居ても良い世界ではない。

それに対するハイイロとは言え、常の感情が籠らない声色は成りを潜め、何をやっても反応を示さない少女の有様にほとほと困っていた。

何せ彼の一番に望むものは『交流』であり、それを為すにはどうしても幽々子との会話が必要だったからだ。

話し掛けてみても意味の籠った返答は既になし。近づいてみても此

方に気づく反応もなし。ならばいつそのこと触れようと……しかしハイイロはしなかった。

手持無沙汰。いや、八方塞と言っべきか。

彼の上っ面に宛がわれた『感情』などというものを鑑みれば、この時点で彼は西行寺幽々子のことなど捨て置くべきだった。

そもそも、彼自身が言っている。異常な事態など必要ない、必要なのは現実であると。

その言葉通りであるならば、目の前で発狂するヒトガタなど彼の望みの範疇にある者ではないはずである。

理想を言うとなれば、まずは夢の世界の有様に驚き、目の前に現れたハイイロを畏怖し、徐々に説明される事実をいぶかしみながら慣れ、やがてはハイイロと言葉を交わす。

そんな平凡とも言えるやり取りの中で現れる現実味こそが彼の望みだった。

しかし、彼は、彼女の目の前より離れない。

ハイイロは気付かない。

望まない状況であるにも関わらず、自分の貌に笑みを浮かべているという事実を。

そしてその醜い笑みが一層深まった時、彼の背後の空間が裂けた。

「むあ？」

妙な感覚につい声が漏れた。

目の前の少女から外れなかった視線がゆっくりと自分の胸の当たりに落ちていけば、徐々に視界に入ってくるのは俺の胸から突き出たナニカだった。

「お？」

またしても言葉が漏れた。

しかし頭の中に浮かぶ様々な疑問が鬱陶しい割には、そのナニカが誰かの手だと言う事が理解出来た。

しかしあれだな、自分の胸から手が生えるっていうのも初めての経験だ。実に面白い。

というか、だ。

「あー……どちらさん？」

単純な疑問の下に首だけを後ろに向けてみる。

俺の背後から抜き手を試み、そして間違いなく貫いた下手人の正体は金髪の美女だった。

……何だ。ゆかりちゃんじゃないの。興味はない。

「出て行きなさい」

「あ？」

「出て行けと言っているっ！」



え？ 何これ？ 何で怒ってるのよ。

正味な話全くもって理解できない。そもそも話、ヒトの夢へと入り込むことを糾弾しているというのなら彼女とて同じじゃないか。しかもゆかりちゃんも俺と同じようなことをよくやってるんだろう？ なのに何故、そんな混じり気のない純粋な殺意を俺に向けるんだ？

疑問。 疑問。 疑問。

ああ、何だか最近に分からぬことが多すぎる。それが実に嬉しい。楽しい。

相も変わらず俺の胸から突き出ている手が少しだけ揺れた。

血は出ていない。出るはずもない。ヒトガタではないから。

傷口とも言える部分は陽炎のように揺れるだけ。泥の紛れた水のようにただ濁るだけ。

おそらくはゆかりちゃんにとって、俺に触れた感触など幻に触れるが如きと言ったところだろう。

答え。俺は一般的には致死にいたるような物理的接触では死なない。一つ、疑問が解けた。心地よい。だが寂しい。

「この娘も、ゆかりちゃんも。もう少し言葉を交わしてくんなきゃわかんねーよ」

「ならばすぐさま罫に帰りなさい。夢を喰うことを咎めはしない。咎める権利も持ってはない。だけど、この子の夢を犯すのは許さない」

「許さないってなー……どうしてよ？」

「……あなたは、本当に、どうしようもない」

それ以上口を開けば殺すと言わんばかりに睨みを利かせるゆかりちゃん。おそらくは、その拒絶の理由でさえ教えられぬ事情と言うものがあるのかもしれない。

別に減るモノでもあるまいし。そう考えてしまふのはやはり俺が阿呆だからだろうか。

しかし、まあ、いいか。彼女の怒りを買ってまで固執するもんでもないし。

俺は桃色の髪の少女と金髪の少女を見比べては息を吐いた。

一体どんな理由があるのやら。ちよつと気になっちゃうじゃないか。

そういえばこの桃色さんとゆかりちゃんが知り合いというのもまた、なんだか奇縁な気がする。もしや彼女が狭間に来訪したことがきっかけで何かが？

いや、興味ないな。

「わかった、わかったよ。さつさとこの夢をシロに喰わせて俺は帰るよ。それでいいんだろ？」

「賢明ね」

「じゃあとつとと出て行こうか」

俺の言に目を見開いたのはゆかりちゃんだった。  
なーにを驚いてるんだか。

「ほら行くぞー」

「え、ちよつと……」

胸から突き出たままの手をむんずと掴むと、ゆかりちゃんは狼狽するよつな声を上げた。が、俺はもはや聞く耳なんてありやしない。全く、なんだかすつきりしない感じで帰ることになっちゃったし、

すんげー怒られるし、もう厄日ってこんな感じのことを言うのかね？  
俺はもやもやとした感じが抜けきらぬまま、桃色さんの夢の世界からゆかりちゃんを連れてばやけて消えた。

あー、名前も教えて貰わなかったな……。――。

舞い戻ってきたのはいつもの変わらぬ狭間の世界。先ほどの真つ黒。今いるのは真つ白。あんまりメリハリの在りすぎる変化はどーかと思う。隣で此方を睨むゆかりちゃんの髪がいつも異常に綺麗に見えた。まあ、まだ会って二回目だけど。  
というよりも睨むなよ。ちゃんと彼女の夢から出たじゃん。

「おー、美味しかった？」

そんな彼女をほっという俺に寄ってきたシロの頭を撫でる。表情なんてわかるわけもないが、なんとなく満足したような貌をしている気がする。

前足に顔を乗せたまま此方を見向きもしないクロの機嫌は如何ほどのものか。ま、運が悪かったとも思ってもらわないと困るけど。

「あれだ、次はゆかりちゃんの夢でも喰わせてもらおうか？」

……ほんの冗談のつもりなのに。

場を和ませるつもりが、どうやら彼女には全くもって笑える要素もない話だったらしい。

もうこれって、あれじゃね？ 俺が空気読めないんじゃないかってゆかりちゃんが短気なだけじゃね？

シロの頭をわしゃわしゃやりつつ、横目で見た彼女の眼は鋭かった。

「あのさ、睨まれても困るんだけど」

「……何故私まで連れてきたのよ」

「君が居ていい道理がないのと一緒になんじゃね？ 他人の夢から出ていけなんて道理を作ったのはゆかりちゃんだろうに」

難しく言うてはみたものの、簡単に言えば不公平だと言う事。どんな理由があつたとしてもゆかりちゃんが俺を異物だと言うのなら彼女自身もまた異物なはずだ。

ひよつとすれば子供染みた我儘だったのかもしれないけども、間違っているとは思わない。

あそこが夢の世界故に。

「わたしは」

「何？ まさかあの桃色さんを慰めるとか励ますとかそういう話？」

「それは」

「んなもん現実でやれよ。現実でもあの娘がああいう感じだったらの話だけど」

あーもー話すのも面倒になってきた。

記憶から消え、ただ一夜限りの世界で何をしようが現実には残らない。正夢だとか夢のお告げだとか言うわけわからんものがあるかも

しれないけど、そんなものを期待するのなら、現実においていると行動するのが当然だろうに。

「そもそも、あの娘は自分の望みを夢にまで反映させるおかしな子だ。となればあの悪夢であればこそ、彼女の望みは叶う。ゆかりちゃんかどーのこーのしちゃったら……あれじゃん。あー、その、駄目じゃん」

「何が駄目なのよ。せめて夢の中で幸福を感じてもらいたいと思うことのどこが駄目だって言うのよ」

「あ？」

だってそりゃそうだろうよ。

夢は現実には勝ち得ない。夢は現実を超えることはない。夢は現実には押しつぶされる。

あんな自由すぎる世界で起こる幸福も不幸も所詮、『夢』だからこそそのものだ。ありとあらゆるモノが保障されているからこそ起こりえるものだ。

そんなべらっぺらっのモノが現実には勝るはずがない。

ありとあらゆる道理によって縛られ、ただ一つの物事すら満足に行かない現実であるからこそ、ありとあらゆる物事は価値を帯びる。

そうだ、夢の中に望みを託すことなど、畜生にも劣る思想に過ぎない。

だからこそ俺は現実に興味と羨望を持ったはずなんだ。

現実で出来ぬから、せめて夢の中で？

何だ、それは。

「ゆかりちゃん」

「……………」

「それは、駄目だ」

会話の最中も、思考の最中も常に眺めていたシロの顔から、彼女へと視線を変える。シロを撫でていた手は既に止まり、俺の意識はゆかりちゃんにしか届かなくなっている。

目の前のヒトガタが、酷く鬱陶しかった。

「君が、あの娘とどういう関係かは……まあ、なんとなく分かるけども。何にせよ、明日にも繋がらない世界に『ナニカ』を託さないでくれよ。こんな味気のない世界でごちそうを探したところで見つかりはしない」

「……何を……」

「兎に角、駄目なんだ」

それが俺に言える精いっぱいだったのかもしれない。もはやゆかりちゃんへの興味は失せ、話す気もなくなってしまった。

気だるくなってしまった俺を察してか、シロは一鳴き、というよりも鼻を鳴らすとゆかりちゃんは霧のようにその場から消えてしまった。

おそらくは現実へと戻ったんだろう。なんだ。シロ。お前そんなこと出来たのか。

ああ、嗚呼、なんて不愉快なんだ。

しかし夢にまで託されるナニカがああ桃色さんにはあったということになる。

やはり現実を生きるものにとって、その世界の在り方そのものに興味を持つなんてことはおかしいことなのだろうか。俺のように夢の中で生きるからこそこんな異常染みた感情を抱くようになったのだろうか。

不幸も、幸福も。俺にとってはそれが現実である限り何より嬉しい事なんだけどなー。

ふと、そんなことを考えてみれば、シロとクロに目が行った。

「もし、もしもお前らが消えたりしたら、俺はそれに歓喜すること出来るのだろうか」

今の俺が感じるであろう最大の不幸、やはりそれはこいつらが死んだり消えたりしてしまう事なのだと思う。

だとしたら、その折に俺の心に浮かぶ絶望、悲哀、後悔。そういったものを感じて尚、俺は現実を嬉々として受け入れることが出来るだろうか。

無意味な考えだ。所詮、俺たちは夢の住人。現実とは、彼女たちとは立場が違う。

となれば……やっぱり同じ立場に立ってみたいと思うんだ。俺は。

## 第5話 「ここまでが主人公設定」

考える。

俺の見てくれは全身灰色の化け物とは言え、その色の象る輪郭は確かに人型であり、そして男性である。それをベースにするとすれば、きちんとした肌色を手に入れ、その表情を現実で生きるそれに近づければ、20代前後の青年と言ったところか。

考える。

今の時代、というよりもゆかりちゃんより聞いた年代を考えれば、妙な材質のものを連想するのは憚られる。よくて着物、もしくは甚平か。いや甚平はまだ早いかな？

どちらにしても俺の記憶にはないような古臭いものを考えねばならない。

浴衣でもいいのかもしれないと、ふと思いついた。

考える。

背景はどうしてくれようか。人間？ 神？ 妖怪？ 悪魔？ それとも人に化けたモノノケだろうか。

いや、こればかりは人間以外を選ぶつもりはない。大体現実によくいるのは人間だ。わざわざ人間以外を選んで面倒なことになる必要もない。

……いや、それもまた一興か？

あー……記憶が邪魔だ。

腕を組み、あぐらを組み、頭をこれでもかと捻り返せば、あまりに多すぎる情報と生み出される懸念に、俺の頭からは湯気が出そうになった。



しかしそれは喜ぶべきモノだ。何せこれから現実を生きる『俺』を創り出すというのだから。

正直な話ではあるが、こんな回りくどい自己の構成に頭を捻らせる必要なんて何一つないのだ。無論、この灰色の身体のまま現実を闊歩しようとも問題はない。

しかし俺を見たときのゆかりちゃんの反応然り、そして桃色さんの反応（彼女の眼中に俺が入っていたのかどうかは微妙だが）然り、どうにもこの身体は気味が悪い。

俺の中の記憶を考えても、おそらくは気持ち悪い。

となれば必要なのは現実で生きるという『ハイイロ』を象る『設定』が必要だろう。

各地を見て回る旅人という立場でもいいのかもしれない。自然を満喫するのも魅力だが、やはり人の交流が欲しい。どこかの村に腰を下ろすのもいいのかも。

駄目だ、勝手に顔がにやけてしまう。

しかししょうがないだろう？　ようやくにして現実に降り立つ心を決め、知りながらにして手の届かなかった世界に生きるというのだから。

「まあ、夜になれば帰ってくるって」

そんな俺の態度にまるで興味を示してくれないのがこの毛むくじやら二匹。この野郎、空気読めよなー。いや、俺が言えないけど。

どちらにしても彼らにとって重要なのはやはり食事であり、俺の進退に関しては好きにやればという一言のみ。

まあ、俺としても長く現世に残るのも疲れるため、ちよくちよく狭間に帰る必要はあるのだが、だとしてもこの無関心っぷりはどうし

たものか。

「ほら、心配事とかねえの？ …… ないですか、そうですか」

そりゃそうだ。所詮『設定』を決めると言ってみてもそれは『ハイイロ』という存在を左右するものではない。人間を名乗っても飢えることはないし、死ぬこともないといった具合に。

というか夢の住人でありながら現実を生きる矛盾とはどういうことなのだろうか。自分でも不思議に思う。

そういえばこの狭間と現実の位置関係であるのだが、曰く、というか俺の考えでは『裏表』の関係に等しい。

現世のどこにしようが俺が望めばすぐさまこの狭間のこの場所に帰ってこれる。なんとという便利な、そしてそれを残念にも思う。そうか、やっぱりそんな安易なものかと。

まあ、どうでもいい話だ。

とにかく自分の容姿くらいは早く決めておかないとな。

なんだか、クリスマスに胸を躍らせる子供のような幼稚すぎる期待感に、妙な気恥かしさと幸福感を俺は覚えていた。

それから紆余曲折あり、自分の設定をどーたらこーたらと悩みながら決め、俺は溢れんばかりの期待で現世へと繰り出したわけだ。はつきり言って現実へと降り立つ座標はどこだって構わない。ゆかりちゃんの話を聞くと、どうやら俺の記憶やら縁やら考えて日本に降り立つ可能性は高かったと言わざるを得ないが。

ま、どうでもいい話だ。今、重要なのは俺が現世に降り立つというただ一点。

だが、聞いてくれ。俺は未だ、この狭間にいるんだ。

「どーいうことだよ、おい」

クロのわき腹をごしょごしょと弄れば、彼は鬱陶しそうな視線を俺に投げつけた。なんだよ、現世に降り立つの簡単、つつたのクロじゃねーか。こちらにも負けずにジト目で睨むがまるで効果は見取れない。

いや、ジト目で見たからどうだと言う話かもしれないが。

そう、俺は現世に降りることが出来なかったのだ。

きつちりと用意された衣服、顔、身体、設定を用意し、そして確かに俺は現世へと降り立つことに一時的には成功したはずなのだ。

白一辺倒という面白みのない狭間の景色が崩れ、俺が瞬きもせず内に俺の視界はどんどん様々な色で埋め尽くされていく。

まるで誰かの夢へと侵食するような見慣れた流れ。だけでもその空間に流れ込んでいく多くのものが俺には鮮明に感じられたのだ。

例えば匂い。俺の鼻に流れ込む空気の流れは多くの情報をもって俺の脳を刺激する。まるで肺まで止まることなく流れるその清涼感と

少々の水っぱさを感じた。

例えば音。あの何一つ『他』が存在しない狭間では考えられないような、それでも小さな音。鳥の囀り。風の流れ。それによって摩く物。頭を打つような轟音ではない。それでも耳に響くそれは心地よかった。

そして視界。見上げれば青。遠くを見ればどこまでも広がる緑。ああ、此処はもしかするとどこぞの野山なのか。その色の濃さなど関係無しにどれもが眩しかった。

分かるだろうか。ただの一瞬で多くの望みが叶った俺の歓喜のほどが。人との交流を第一に想っていてもあれだけの光景を前にされれば、俺とて踊り出したくもなる。

白と黒と灰色以外の色を現実として受け止め、俺はその歓喜のあまり大声で叫ぼうとしたその瞬間、俺は、この狭間へと戻されたのだ。

「二つ」

ぼそり、呟く。予想、それとも証明に成り得る事実か。

うんうん唸っている内に、俺の顔に固着させた『余所行きの顔』が崩れかけた。灰色の靄にぶれた顔は酷く気味の悪いものに違いない。だがそれを気にすることなく俺の脳裏では様々な考えが巡って行く。

俺は、夢と現実の間にははっきりとした優劣があると判断している。それは先日ゆかりちゃんに吐き捨てた想いを思い出してみても明白だ。

夢は、現実に勝ることはない。

となれば夢の世界の住人である俺が現実で生きるなど所詮無理な話だったのであるうか。いや、クロもシロもそれを無理だと断言することはなかった。

「嘘じゃないよな？」

疑いの視線と言葉を投げ掛ければ、彼らは揃って力強く頷いた。願えば叶う、と。

その言葉に深く感謝し、そして無様なほどに安心する自分がいる。しかし夢のヒトである俺が現実に降り立つ、つまりは顕現するというのは、それすなわち夢が現実を侵食すると同義なのではないだろうか？

思考、反転。

夢は、現実を打倒する。

駄目だ。そんなくだらない事実だけは認められない。

いや、それは果たして俺が悩みに悩んで生み出した理屈か？ ただ感情に、植え付けられた記憶による郷愁と憧れが生み出したただの傲慢ではないのか？

やはり、現実が足りない。

そもそもにして俺の表した価値観の多くは現実と夢との比較で成り立っている。夢に対して現実はどうだ、だからこうだ。現実に対して夢はこうだ、だからこうだ。

現実を何一つとして経験していないと言うのに。

「何だ、これは……なんという机上の空論」

もはや俺の身体は灰色の霧と化し、中途半端に『設定』が混じってしまった化け物のそれ。なんという醜い身体、醜い価値観。そんな汚らしい価値観の崩壊。俺にとっての常識の歪み。根幹の

腐敗。膝が折れてしまいそうなほどに震えていた。  
だが、それでも、俺は。

「は、ははは……こいつは、素晴らしい」

歡喜する他ない。

そうだ、これは言うなれば自分探しの旅じゃないか。もはやただの満足感を得るためだけに現世へと繰り出すのではない。夢の中でさえ完結しない己を真に造り上げるための行程そのもの。

それが俺のいつ終わるかもしれない一生で成し遂げられるかなどすら重要ではない。

いつか、誰かの夢の中で聞いた覚えがある。

成長、変容、踏破。それはヒトが持ち得るものでもあり、それこそがヒトを名乗る証とも。

その是非を問うつもりはない。問うことも俺には出来ない。

そうだ。俺は俺を何一つ理解できていない。俺の器とは何なのか。皿か茶碗かコップか、はたまた酒瓶か。

器すら理解できていないと言うのに、そこに入れるものばかり無駄に厳選し、そして見つかりもしない。

叫んだ。何て叫んでいたのかは覚えていない。むしろただの雄たけびだったのかもしれない。クロとシロが腹を鳴らすその瞬間まで、俺はずっとそうやって叫び続けていた気がする。

俺は今日、確かに生まれただ。

「すみませんでした」

まずは正座。背を伸ばし、目の前の人物を目を逸らすことなく見つめる。指先をまっすぐにして地に手を着けて、ゆっくりと、しかし深く頭を下げる。

ミシリ。

そんな体制が故に視界から消えてしまった彼女は、俺の頭上でそんな音を鳴らしていた。

歯でも食いしばったか？ 拳でも握り締めたか？ それとも頭の血管でも。

どれもこれも喜ぶべき反応でないのがとても残念ではある。

「……………」

「申し訳」

ごさいませんと続くはずだった言葉は、俺の頭を襲った衝撃に遮られた。

ああ、完全に踏みつけられてるし。

「私はね。妖怪なの」

「ふあい」

「人生のいくらかを血生臭いもので生きていく種族」

「ふぁ」

返事すら最後まで言わせて貰えないのか。

痛みなんぞ俺が認識しない限り感じるわけもなく、それはひよっとすれば誠意が足りないことなんじゃないか、と思った。

本当に申し訳ないと思っているのならば、どーのこーの。

「まあ、そんな話は別として。私、嘗められるのってあまり好きではありませんの」

「そりゃそう……何でもないです」

まあ、後は彼女の怒りを鎮めて貰うために踏みつけられたり、そう珍しくもない説教じみた言語の羅列を右から左へ受け流したりしていた。

こめかみに青筋を浮かべ、ゴミを見るような目で俺を蔑むのはゆかりちゃん。ああ、紫さんって言えって叩きこまれたから、これからそっちの呼び名を使うか。

経緯はそう難しいものではない。

意味不明な自信と辻褃の合わない主張で彼女の願いを一蹴してしまったことへの謝罪は必要だろう？ だから呼んだ。ただそれだけだ。まあ、勝手に呼ばれたということだけでも彼女を怒らせるには十分だったのだが。そんなつもりはないのに。

……といってもそれだけが呼びだした理由じゃないんだけど。



あれだ。俺は現世で生きてみたい。だがそれをするには未だ俺の認識も存在も薄過ぎる。

例え話をしよう。妖怪とはヒトの恐怖を糧として生まれたものであるという側面が強い。忌み嫌われる負の感情、暗闇への畏怖、もっと根本的な話で言えば『理解出来ないもの』への恐怖。

もう一つ。神という種族についてだが、元々にしてその種族である者は意外に少ない。例えば異能を持った人。例えば雄大な自然の一部。例えば形すら持たなかった意思の塊。その全てが須らくヒトの信仰を受けて神と成る。

そう、どれもこれも、この世界ではヒト無しで生きていけないのだ。そこに例外はない。

ならば俺を現実にて知り得るヒトはどれほどいるというのだろうか。俺は妖怪でも、神でも無い。それでも、誰からも認識されることなく生きてきた俺が、現世に顕現出来るのであろうか？

「無理ね」

「おー……」

紫さんにその旨を話してみれば当然の如く一蹴された。まあ、いい。予想してた答えだし。

ちなみにまだ正座。足は痺れんけど。

「そもそもあなたは現実で固着化するという具体的なものはあるのかしら？」

「あれだ、その、『獺』の飼い主、みたいな？」

「獺と言う存在ですらおそらくは何万、何億と言われる年月を掛けて現実へと這い出たはずよ。魔界、天界、法界、顕界。どの世界に属するような生物でも、『現実にいる』という理からは逃れられな

い。そういつたことを鑑みると、『夢』というものでありながら現実にも知れ渡る猥は異常なのよ」

「どうということ？」

「出発点が絶望的」

「わお」

そうだ、そりゃそうだもんなあ。多分夢の生物と言えど誰、とても誰かに聞けば、猥やら夢魔やらそういったものが連想されるのは当然だ。そこで「ハイイロ」などという名前が挙がるはずもない。

簡単に言えば。俺は認知度が足りん

「なんかアイドルみてえ」

「意味はわからないけど、その頭の悪そうな喋り方は止めなさい」  
「御意」

可能な限りのシリアス感やら真面目モードやらを全て導入して話してみれば、紫さんはとてつもなく気持ち悪そうな顔しながら口を押さえた。

何だ、吐くほどに気持ち悪かったのか。

「しかし、そうだよなー。お前ら有名だもんなー」

目の前で地べたに這いつくばったままだらしく垂れている二匹に向かって口を尖らせる。

こいつらが実際どうであれ、現実では悪夢を喰ってくれる神の獣として信仰を受けているというのだから仕方がない。

どーみても神でも妖怪でもなく、『夢の獣』っていう分類なんだけどな。

「で、今まで散々私を馬鹿にしたあなたが、一体何の頼みなの？」

「いや、馬鹿にしていたつもりは……あー、いや、そのだな」

「どうせ現世に繰り出したいとかそんなものでしょう？」

「はい」

腕組みしながら舐めまわす様に値踏みする紫さんに、俺は続けようとした言葉も遮られる。というかやっぱ彼女は頭がいいんだろうか。俺の言いたいことも察してくれるし、簡単に要約もしてくれるぞ。以心伝心、善きかな善きかな。紫さんのことなんぞさっぱり分からんが。

「ま、あなたの生まれた要因が純粋な猥とは違うし、言うなれば現実と夢の狭間の……」

「ん？ どしたー？」

「こ、こんな奴と、私が被るなんて……」

「いや、境界の分かりやすい例として夢と現実を前に出してるだけだろ、あんたは」

白い地面に手をついて愕然とした様子を隠すこともない彼女に、ちと複雑な気持ち。クロがその奥で大きく口を開けて欠伸をしていたのが何だか絵的に間抜けだった。

俺の視線に気づいたのか、紫さんは一つ咳払いをすると酷く真面目な顔を始めた。

「等価交換、なんて固執するつもりはないけども。あなたの願いを叶えて私に得なんてあるの？」

「埒に来てもいいぞ」

「あなたの許可もいらないし、そもそも必要でもないものだわ。却下」

「むむむ」

「何がむむむよ。それしかないわけ？」

何にも、持っていないんだな。俺は。  
今更ながらに俺はそれを痛感していた。

まあ 遠い話だ。

頭にちよこんと飾られた花が揺れた。

暗がりの中で灯された蝋燭台の明かりは、少々書き物をするに  
は十分でない灯り。全開にされた戸の向こうには、木造の廊下を挟  
んで綺麗に整えられた庭が広がっている。並べられた盆栽、観賞魚  
の泳ぐ小池、そして空には暗がりを補って余りある月光を落とす満  
月。

座布団の上で長く維持し続けた体制は、少女の足を痺れさせるには  
十分だった。

少々赤みのかかった薄紫の髪が廊下越しに流れてきた風で靡く。開  
けっぱなしにするにはちよつとばかり冷たい風。そこでようやくに  
して少女は時間の経過を正確に把握した。

「もう、こんな時間」

普通なら空が紅く燃える時点で気が付くだろう。しかし彼女にとつ  
てある書き物に没頭するあまり周りが見えなくなるのは別段珍しい  
話ではない。

このようにして周りの変化に気づくと同時に疲れを感じ始めるのも  
いつものことだった。

「こんにちは」

「あ、来てたんですね」

風と虫の鳴き声だけが響く中、少女の耳に届いたのはどこまでも通るような透き通った声だった。

花の少女は声のする方へと目を向ける。なんてことはない。さきほど眺めた庭の端にその主は佇んでいた。

純白の長手袋と胸元が強調された紫のワンピース。そして夜中でも不思議と持ち主に似合う日傘が特徴的な女性だった。

「ついさっきよ」

「そうでしたか。お茶入れますね」

「ふふふ、ありがとう」

ぱたぱたと小柄な体を走らせ、廊下の奥の暗闇に消えていく花の少女。実のところ彼女の住まう住居は広大であり、そして彼女は其処の当主であり　まあ、端的に言えば自ら動かずとも従者がそれをしてくれる立場にある。

しばらくして、黒塗りのお盆と使い古された感のある湯呑を持ってきた少女は、一息を吐くと共に来訪者の女性とテーブルに着いた。確かな疲れを感じつつも、友との語らいはそれに勝る。使い古された湯呑こそが彼女らのお気に入りだった。

「話は聞けた？」

「はい。苦勞しましたよ……まあ、その、苦勞した割は、という印象ですけど」

「だから言っただじゃない。私も彼も。あなたの気持も分かるけどね、阿七」

阿七、と呼ばれた少女は気まずそうに頬を掻いた後に首を振ってそれを否定した。

「いえ、ただの興味ですから。面白い話も聞けましたし。紫ちゃんとか」

「いつ!？」

お返しとばかりに年相応には見えない黒い笑みを浮かべて返せば、  
当の本人が目に見えてうるたえた。阿七の剣呑は、というか所詮茶化し合いである。

八雲紫の乾いた笑いに阿七は口元を隠しながら朗らかに笑うのだった。

「縁起に書き足すのかしら？」

「いえ、少々込み入り過ぎな話ですし……何よりそれを書き記すのは無粋ですよ」

「そうね。確かにそうだわ」

「あなたの項に付け足すのは面白そうですけど」

にやり、と薄明かりの中で阿七の浮かべた笑顔に、紫は口元をヒクつかせては今頃呑気に寝ているだろう男に意識を傾けた。

どう責任を取らせてやろうかしら。阿七から紫へ。紫から『彼』へ。黒い笑みは伝わっていく。

「まあ、元気そうなら構わないわ」

幾度繰り返しても変わらぬ阿七の姿に、紫は一つ息を吐くと本当に嬉しそうに笑った。そしてそれを向けられた阿七も恥ずかしそうに笑う。

年端の行かぬ美少女と、どこか妖しさを醸し出す美女の二人が笑う

その姿は、月光に照らされたことも相まってか、どこことなく儚さを備えた美しさがあった。

『揺蕩うヒトガタ』

狭間灰色 - H a z a m a H a i r o -

能力 夢を喰う程度の能力

危険度 低

人間友好度 極高

主な活動場所 無縁塚、人里

灰色の着流し、灰色の髪、灰色の瞳とその名の通りの特徴を持った夢喰。

独特な価値観とあっけらかんとした性格をした、夢と現実の狭間に存在し夢を食らう『夢喰』という種族の青年。一般的に有名な『獺』とは似て異なる種族らしい。

峙にしている無縁塚から足を伸ばし、ヒト（注一）と交流すること



を生き甲斐とする風来坊であり、世間話や身の上話というものを非常に好む。

時折クロとシロ（注二）という猯を散歩させながら、幻想郷各地を転々と歩き回っている。

なお、夢喰という種族故にヒトの夢を食らっていくが、特に被害とどのようなものはなく、むしろ悪夢を喰ってくれるという点で益となる種族である。

#### <目撃報告例>

・村の往来で痴話喧嘩をしている男女の間に、満面の笑みで入って行くのが見えた。有無を言わず殴り飛ばされていたけど。

（匿名）

彼は往々にして空気を読まない。

・魔法の森から白と黒の変な生物を連れて出てくるところを見た。その時はまだ昼時だったけどなんだか不気味だった。

（匿名）

おそらくは散歩中だったのだろう。しかし猯という生物が一般的には知られていないため、初見では大体気味が悪いと言われる。

・たまに取材活動を手伝ってもらっています。

（射命丸文）

趣味と仕事の傾向が非常に似通っているためだと思われる。二人揃うと非常に鬱陶しい。

<対策>

基本的に人間を害するようなことはなく、もっぱら話しかけられるだけ、ということの方が多いだろう。だが彼のさっぱりとし過ぎる性格上、非常に空気が読めてない発言が多く、そこにうんざりすることも多い。そういう意味では普通の人間に対するような対応を心掛ければ問題はない。

また、悪夢に悩んでいるなら彼に頼んでみるのもいいだろう。長時間の会話と引き換えにその悪夢を喰ってくれるかもしれない。

一つ気を付けることと言えば、彼は非常に交友関係が広く、危険な妖怪と一緒にいることも多い。巻き込まれないように、彼と接するのは人里の中だけにしておいたほうがいいだろう。

注一……言葉を解し、意思を疎通することが出来れば誰でも構わないらしい。

注二……彼曰く家族らしいが、どうみても飼いや飼われの関係にしか見えない。

## 第6話 「鳴る」

田畑を挟んで続く畦道は距離を離す毎に陽炎で揺れ、その中にポツポツと生えている木々には日光を反射するほどに青青しい濃緑の葉が生い茂っている。

そこで働く人たちの休憩場とも言うべき木陰は、4人も5人も入れるほどに広くない。じりじりと照りつける太陽の日差しは確かに夏たる象徴であった。

そんな木陰、木の根元に座り込み一時的な涼しさに心地よさを見出そうとする男がいた。

その全身を灰色に包み、着流しに覆われていない素肌が人間らしさを主張するばかり。木陰の暗がりもあってか、その景色の中に溶け込んでしまいそうな希薄さがあった。

右手に持った団扇を気だるげに振るい、灰色の髪を靡かせては風を感じているようだ。こんな炎天下の中で風を受けてもぬるいだけだろうに。

灰色の男、その名の如くハイイロと名乗る男は虚ろな目を晒したまま空を見上げた。ゆっくりと流れて太陽を隠してくれる雲は疎らに漂っているだけ。真夏の風物詩である入道雲なんぞ欠片も見当たらない。

どうやら今日一日はこの茹だるような暑さの中で過さねばならないらしい。

ハイイロは遠くに見える小高い丘の向こうを凝視した。彼の脳裏にあるのは一年中薄い霧に覆われた湖。だが悪戯されるのは勘弁してほしいハイイロだった。

やがて聞こえてきた地を踏みしめる音と背の低い草花を掻き分ける

ような音に気付き、そちらへ視線を向ければ、手ぬぐいやらズタ袋を背負った数人の男たちが額を拭いながらこちらへ近づいているのが見えた。

「おーう……終わったかい？」

「おう」

その中で先頭を歩いていた男にハイイロは声を掛けた。短い返答。だがそこに仲の悪さを疑わせるような緊張した空気はなかった。むしろ勝手知ったるとも言える気軽さが見て取れる。

暑さにやられて覇気がないハイイロに男たちは困ったように笑っていた。

「あんたも食えばよかったのによ。上白沢先生特製のかき氷はうまくいったぞー？」

「ありや冬ん時に保管しといた氷だったただだろうがよ。どちらかと言や、自然の賜物がうんぬんかんぬん……」

「最後まで気張れよ。だらしねえ」

先頭の男は一度ハイイロを鼻で笑うとズタ袋を手荒く漁り始めた。そうやって取り出したのは水玉模様の珍しくない一枚の手ぬぐい。それを徐にハイイロに投げつければ、農作業によって鍛えられて太くなつた両腕を腰に当ててため息を吐いた。

「汗拭うもんくらい持っとけ」

「……お前のかき氷をーっていう流れじゃねえの？」

「おお。腹ん中に溜めこんどる」

ぎやははと大声で笑う男たちにハイイロは苦々しく口を歪めると、のそりと緩慢な動きで立ちあがった。腰に着いた土を払う。その手

つきにも既に勢いはない。

なんともどこまでもだらしない様だった。

「寺子屋行ってくる」

「おめえは仕事に就く気はねえのかよ。上白沢の嬢ちゃんだってガキ共相手に」

「ああ？ 悪夢食ってやんねーぞ」

「だってよ、次郎さん」

またしても青い空に響いてゆく汚らしい、それでも本当に楽しそうな笑い声。遠くに聞こえる喧しい蝉の鳴き声の消してしまいそうな笑い声だった。

先頭の、次郎と呼ばれた男はハイイロの言葉にやれやれと地に下ろしたズタ袋を肩に抱え、ずんずんと畑の中に進んでいくのだった。

「俺は夢喰なんですう。君らとは違うんですう」

「目が泳いでんぜ、旦那」

「ああ、確かに泳ぎたいな。暑いもの」

「こりゃ駄目だ……さっ、始めっか」

ハイイロを置いて続々と畑に踏み入る男たちの背を彼はしばらくの間見つめていた。彼の目からは成長盛りの背の高くなつた様々な作物を弄くつているようにしか見えない。本来は虫が付かないようにだとか選定だとか色々やっているのかもしれない。

ようやくハイイロが人里の方へと歩を向けた時、彼が涼んでいた木陰は太陽の傾きによって影一つない黄土色の地面を晒していた。

人里の中心地。幾人もの人の流れによって踏み均された大通りは、いつも通り里の人間たちで賑わっている……というわけでもない。大通りの両脇に並ぶ雑貨店やら八百屋などの店先では、店番らしき人影が家屋の奥で草臥れていたり、荷車を押す業者のような者もいまにも倒れそうなほどにふらついている。

唯一例外と言えば、容赦なく照りつける日照りの中でも走り回る子供たちだろうか。昼時でありながら寺子屋に行っていないのは夏休みだから。

ちよくちよく里中に響く、頭突きの際の痛々しい音はなりを潜めている。

そんな子供の群れとすれ違いながら道のと真ん中を歩くのはハイイロ。夏場の黒はお勧めできない。身に纏うならば白の衣服ではある。まあ、絶え間なく団扇を振り続けているところを見ると、色による些細な差などどうでもいいのかもしれないが。

「暑いねえ。大丈夫かい？」

すれ違いに杖を付きながら歩いていた老婆に声を掛けられた。彼女もまたその暑さに辟易している感があったが、灰色はそれに勝る。今にも融けてしまいそうなほど蕩けた表情を老婆に向けた。

「春日のばつちゃん、元気だな。まだ死にそうにねえ」

「はん、孫の顔を見るまでに死ねるか」

からからと笑う姿は年による衰えなどどこにも見て取れない。むしろハイイロの腰の方が曲がっているようにも見える。幻想郷の人間は普通よりも『少々』たくましい。

妖怪などの人外魔境の中心に存在する人間たちの住む里だ。たくましくなるのも当然だろう。

所詮すれ違いに言葉を交わしただけ。それきり二人は手を振って別れた。

ハイイロと言う男の性質上、こんな風にさほど深くもない関係を持つヒトが非常に多い。親友というには遠すぎる。友というには馴れ馴れしい。

そんな微妙な関係の果てに人々は彼を『騒がしいご近所さん』と呼ぶ。あながち間違いでも無い。噂好きの主婦と少々被るかもしれない。

だが話しかけるのは大抵がそれなりに年をくった者ばかり。ヒトとの交流、簡単に言えばお喋りが好きなハイイロではあるが、それを受け入れてくれるのは暇なヒトくらい。

当たり前である。若い者は忙しい。

「あづ……」

ハイイロがカラカラになった喉を震わせて出した言葉は擦れていた。もはや彼の動きは幽鬼のような不気味さを放っている。

しかしそんな見た目死にかけの動きで歩き続ける彼を見つける人々は、大抵苦笑して流すのだった。

彼が長い年月で培った幻想郷で人々から受ける印象は、大体こんなものだ。

そうやってふらふらと歩き続け辿り着いたのは、比較的外観に目新しさが感じられる一棟の家屋。ひび割れの無い瓦屋根や腐敗など欠片も見当たらない軒先の木造柱。その柱には達筆の墨字で『寺子屋』と書かれた板が掛けられている。

ハイイロが目指していた目的地らしい。

「おおーい……入んぞー」

入口の戸を叩きながら間延びした声を上げるハイイロ。その声に気づいてくれたのか中からは床を踏み鳴らして近づいてくる者がいる。おそらくは閉じられた戸を開けて貰うまで待つべきだろうが、彼はそれを待つことなくガラガラと遠慮なく開けていた。

「おつす」

「出迎えくらいは待てないのか、あなたは」

開けた戸に寄り掛かりながら左手を上げて声を掛ければ、奥から出てきたのは青い西洋の衣服に身を包んだうら若き女性だった。頭には少々特徴的すぎる帽子を載せ、腰まで伸びた髪は青みがかったいた。

出迎えにしては辛辣な言葉だったが正論かもしれない。

寺子屋の先生として勉を執り、最近では里そのものの守護者としての役割を担いつつある彼女の名は上白沢慧音。里内では良識のある知識人として、はたまた子供に優しい女性として多くの人から良評価を得ている人物である。



その優しさが時に頭突きとなって表れてしまうのが一部有名であったりする。専ら痛いとの話。

「暑くてよ。勘弁してくれ」

「それはどこにいたって変わらないさ。それで？ どうしたんだ？」

「氷、余ってたりしない？」

「……………」

なんとも面の皮の厚い不躰な話であったが、彼女はそれを指摘するでもなくただ乾いた笑うを浮かべながら頬を掻いた。

さて、話の焦点にあるこのかき氷であるが、こつも簡単に振る舞われているのには理由がある。そもそも未だ冷蔵庫の開発なども遠く、氷の保存方法も氷室というそれ専用のものを頼るしかない時代にとつて、氷とは大変貴重なものである。

それを農作業に精を出すような一般、悪く言えば高貴な家に連なる者でない人間に振る舞われるのは大変珍しい。

「やっぱもうない？」

「いや、その、だな。あることにはあるのだが」

「『だが』とか付いている時点で、既に俺の望みが見えない」

「うん。私が今食べてる」

慧音の言葉を聞くなりがつくりと玄関に崩れ落ちるハイイロ。無様この上ないが慧音が何一つ悪くないは明白だ。ただ単に彼が喰い損ねただけ。

それでも本当にすまなそうに苦笑いを浮かべるのは彼女の気質故か。

「……………まあ、上がってくれ。冷えた水くらいでいいなら出せる」

「すまんね。図々しくて。だが暑さには勝てねえ」

奥へと促した慧音の後に、ハイイロは肩を落としたままついて行くのだった。

慧音の後に続いて寺子屋の中を進んでいく。たぶん彼女の私室に行くくんだろ。通りすぎた大広間を横目で見れば、長机やら教卓やら勉強を感じさせる雰囲気が見て取れた。廊下の隅に黒字で『きもなるとか』と落書きされているのを見てちょっとだけ笑いかけたけど、悪戯好きの文太だろうか。全く、笑っちゃうところだったろうが。

一人笑いを堪える、というか実のところ全く堪えられてなかったらしい俺の顔と視線の先を見た慧音はプルプルと肩を震わせた後、俺に向かって笑顔で頭突きをかましやがった。

目の下とかピンポイント過ぎるだろ……ちょっとだけ涙が出た。

「自業自得だ」

私室に案内された後に相対して座ったテーブルを挟んで、慧音は不機嫌そうにかき氷の盛りつけられたお碗をかき込んでいた。頭キーンするぞ。頭キーン。

頭を押さえる素振りは見せない。頭の固いヒトでよかったな、慧音。

「もう一度食らうか？」

「いつからさとりになった」

冷えた水を入れられた湯呑で目元を冷やしている俺に容赦ない一言を浴びせる慧音。

食らうならその宇治金時を下さい。彼女の食べるかき氷はちょっとだけ高価な味付けだった。

そもそもかき氷をこの幻想郷で提言し始めたのは俺だろーよ。権利を主張する。

発端は、というか俺が幻想郷という場所で生活を始めてから常日頃思っていたことだった。異能持ちやら人外の類が集まる幻想郷において、その力を行使するのはそんなに忌避されるべきことでもない。世間では畏怖の目で見られるような力も秘境として特殊な文化を形成するこの幻想郷では別に珍しい事でも無い。

異能持つてる。そっかー。こんなやり取りで済ませられるような話だ。

で、だ。普通に考えられればそういった異能行使の敷居が低いこの幻想郷では独自にそれを軸とした文化が形成されると思っていた俺なんだが、そうでもない。

むしろ外との貿易やら交流やらが少ない此処では外部の方が文化的に優れているところが見られる。いや、文化の優劣なんぞちょっと複雑で理解出来てないかもしれないけど。

兎にも角にも俺が思っていたこととは、便利なもん持つてんだから使え、ということである。

符術？ 魔法？ 妖力？ 霊力？ 一般には神秘的なものとして扱われるそれらの類は、考えようによっちゃ生活の改善にこれ以上な

いほどの潤いを与えるものであるし、幻想郷特有の文化として構築されるのも一考ありじゃねーのかよ、と思う。

まあいくら幻想郷でも異能持ちはマイノリティだ。希少価値と言うほどでもないが少数の、しかも生物の力に頼った文化の発展など危なっかしくてしょうがないのかもしれない。

だからってなあ……もうちょっと贅沢にいこうぜ。

そうやってまず考えたのは、今俺の目の前で旨そうにかき氷をかつ食らっている慧音のことである。

彼女に案内されて私室に入った俺の目に入ったのは、白く輝く氷がこれほどかと盛られた器が、直方体の結界と周りに張られた札によって囲まれている光景だった。

（客人に対応するためだけにこれ設置したのかよ。どんだけ融かしたくねえんだよ）

俺に対応する間に融けてしまうことを恐れての用意だったのかもしれないが、それほどまでに喰いたかったのかと慧音の顔をまじまじと見る羽目になった。顔色は赤かったです。

符術による外気との断絶、密封がどうのこうの。そんな技術によって冬より半年かけて保管される氷の塊は、人里における夏の風物詩ともなっている。

まあ、紫さんなんかは俺の考えを聞くなり自分だけ特別に毎年作っているらしいが、そもそもあれだ。俺が幻想郷の文化云々とほざきながらそれが広まらない最大の原因は、異能持ちのほとんどが自己中で、気まぐれで、素直じゃないってことなわけ。

ホント、慧音は幻想郷での異能持ち女性の中でも一番じゃねーかってくらいまとまな人物なのである。

俺の贅沢を望んだこの試みも彼女あつてのものだ。

まあ、神様は立場やら、妖怪はプライドやらで人間の文化的なものに触れるには少々複雑なのかもしれない。

それもまあ、面白い話ではあるけど。

にしても。

「ぐおおお……旨そうに食うなあ。くれ」

「断る。ちよつとだけ奮発したからな。美味さも格別だよ。しかしあなたとて力を……」

「却下却下。腹にも溜まらんしポリシーにも反する」

「流儀、だったか？　これを考えたあなたが言うには説得力が足りんぞ？」

氷をシャクシャクとかき混ぜながら困ったように慧音は言うが、そればかりは譲れんよ。というか『夢』で喰ったところで意味なんぞない。この炎天下の中で喰うからこそ、その食い物は美味くなるんだよ。冬に食うアイスも美味いけど。

どちらにせよ、この調子で色々と贅沢なことが増えればいいなとは思う。

便利、ではない。贅沢だ。此処を履き違えてはならない。所詮俺の中にある未来の知識はそのままに表に出してはならないものだ。これは紫さんとの話でもそう結論付けている。それを利用するとしてもこの幻想郷に、時代にあつた変換を必要とするのだ。

まあ、魔法とか符術とか見ていると未来のほとんどなんて別にいらないかーとも思ってしまうんだが。

記憶の中に存在する様々な人工物には魅力を見出せない。妖怪の山に生きる河童たちの技術がこの時間軸において、既に未来の技術に

近いものを持つているのが驚きだが。あいつらそのうち冷蔵庫とか作るんじゃない？

「にしても今日は特に暑いな。熱中症で倒れる人がいないか心配だ」  
「もーこーが竹林でハッスルしてるんじゃない？ まあ、ガキンチョたちは倒れやしねえだろ。あの元気さは異常すぎる」

「どう考えても関係ないだろう、妹紅は」  
「流せよ」

この話になると彼女は決まってへそを曲げる。唯一子供っぽい反応を見せる瞬間なのかもしれないけども、どうにも冗談が通じなくて困る。空気が読めてないんじゃないやなくて冗談を言っただけ。

たまに俺を罵る奴がいるが、空気なんぞいい加減読めるようにはなってるわ。そう言うのと大体の知り合いからはジト目を向けられる。

解せぬ。

まあ、かき氷が手に入らないのなら仕方がない。慧音とも世間話に花を咲かせたいが、机の脇に重ねられた紙の束を見るとどうにもまだ仕事は残っているらしい。だったらこれ以上邪魔するわけにもいかんだろう。どうだ、空気読むぞ。

俺は目元を冷やすために中に残した水を一気に呷ると、お暇するべく立ちあがった。

「すまん、こればかりは譲れなくて」

「構わんさー。喰い損ねた俺が悪い」

かき氷の話。

「別に此处で涼んでいてもいいのだぞ？」

「いやいや、仕事の邪魔するわけにもな。果たして夏休みの宿題は

何人持ってくるのやら」

「全員出してくれるさ。うちの生徒はみんないい子ばかりだからな」  
「親バカならぬ、先生馬鹿」

吐き捨てるように笑って言えば、そんな言葉など意に介せんとはかりに彼女は胸を張った。違う。彼女の子供を愛する心は本物だ。玄関へと向かう俺の見送りまで彼女はついて来てくれた。まあ、再びかき氷を結界で守ってたけど。あの札って作るの大変なんじゃないの？

「まあ、また邪魔しにくるよ」

「授業中は勘弁してくれ。あなたがいると話が進まなくなる」  
「覚えておく」

俺の言葉に呆れるその様はなんだか非常に彼女に似合う。心のどこかで慧音は苦勞人ポジになりそうだなあ、と思っていたりしていた。現にもこー関係で苦勞してるだろうに。俺にとっては面白い話だが。

兎にも角にも、俺は彼女に見送られながら寺子屋を出た。手を振りながら優しく笑う姿はこの真夏の中でもぼやけない。何で幻想郷の異能持ちは決まって美人が多いのやら。綺麗な薔薇の棘とかそんな話か？

「夢見が悪かったら言ってくれー！ 喰いに行くー！」

遠目に見えた彼女は少しばかり苦笑していたような気がする。

さて、少々涼んだとはいえ引いた汗も動きまわればまたぶり返すくらいには暑い季節だ。いくら野外とはいえ木陰の中で一時間経たずダウンした俺には、今日の暑さはきつ過ぎる。どこか時間を潰しながら涼めるところはないだろうか。

暇つぶしの方法を考えながら人里の中を練り歩く。

妖怪の山を流れる川の水辺、一度脳裏に浮かんだ霧の湖、はたまた人里の田んぼに流れる小川か。石場の上から足をその水面につけながら涼みたいものだ。

道すがら目に入る、店先に打ち水を振りまく光景を見ていると、どうにもそんなことが連想される。幻想郷には海がないという事実を酷く残念に思ってしまう瞬間でもある。

黒色を孕んでいく地面が、徐々に黄土色を取り戻していく様子を見るとげんなりしてしまうが。どんだけ暑いのだ……。ふと打ち水を振りまいていた店番の少女と目が合った。互いに苦笑い。

どうにも夏と言う季節は俺に合わない。それもこれも人と口を開く気さえ無くさせる茹だるような暑さが原因に違いない。これさえなければかき氷片手にはしゃぎまわることだってできるというに。温暖化には早すぎる。

「お



声には出さないが陰鬱とした考えをぐちぐちと浮かべていれば、目に入っただのは紅白の衣服に身を纏った人物の姿が。

慧音のようなウェーブがかかった長髪とは違って、腰まで流れる長髪は纏められることもなく漆器のような滑らかさをもって靡いている。古き良き大和撫子ともいう濁りの無い漆黒の髪がよく目立つ。今は暑そうにしか見えんけど。

「んー……」

声が漏れた。それはただ単純にその人物の衣服を見て漏れた疑問だった。

ちなみにその件の人物だが、幻想郷を人間側から纏める博麗の巫女という方である。その代その代の博麗の巫女が亡くなる度に新しい巫女が据えられるのだが、その女性たちは例外なく紅白の巫女服に身を包む。

まあ巫女が紅白のそれを着込むなんて珍しいものではないんだが、幻想郷ではちよつと違う。

何せ、彼女らは須らく腋の部分を全開にするというのだから。

夏場に見りゃ、道理にかなった改造だとは思うが、冬に見掛けるそれは苦行としか思えん。いや、苦行と言うのも職業的にありかもしれんが、だったら滝に打たれるほうがよほどそれっぽい。

「また下らないことでも考えているのですか」  
「うおっ」

顎に手を当てて考え込んでいれば、いつのまにか俺の顔を覗き込むようにして件の巫女さんが目の前に立っていた。いつのまに近づいたんだ、この人は。

前髪を一直線に切りそろえたそれは、どっかの竹林に住まう姫様を連想させるが彼女と重なるにはまだまだ狡猾さが足りない。その凛として輝きの衰えない瞳は素晴らしいと思うが。

「何か問題を起こす気があるのであれば……」

「起さねーし、起こしたこともねーだろ」

言っではみる者の、俺を咎めるような鋭い視線が揺れることはない。何故にこう、真正面から見据えられるというのに一種の居心地の悪さを感じてしまうのだろうか。

まあ、こんな感じに俺と当代の巫女の関係はすこぶる悪い。先代の巫女さんとはそれなりの関係を築けていたのだが、何を勘違いしているのか今代の彼女からは悪妖扱いされてしまっている。

妖怪じゃねっての。

まあ、あまり風聞がはつきりしていない俺だ。たまにはこんな関係を結んでしまうのもあるだろうし、こういうのも悪くない。

そもそも曲がったことは大嫌いという真人間っぷりに行くこの人だ。どっかに俺を悪妖扱いするちゃんとした理由があるのだろう。

「博麗季佳の名にかけて、私の目が黒い内は人里で好き勝手させるつもりはありません」

そうやって拳を突き出す姿がやけに神々しく見えたのは気のせいなのだろうか。

勘違いだっつってんのに。いや、待て。これはいい機会だ。

「ほー……じゃあ、心行くまで話し合おうか」

きりりとしていた瞳が若干揺れた。  
まあ、どちらにせよ、これはいい暇つぶしにもなるだろう。

「いらつしゃい」

暖簾を潜ればしわがれた店主の声に出迎えられた。いつもより少々声に張りがないのはこの暑さのせいだろうか。

今は昼時を越えたおやつ時、ひよつとすれば他の客人もいるかと懸念していたが、店に中を見るとそうでもない。ちらほらと見知った顔が居る程度だが、誰も彼もこの店名物の水だんごを頬張りながら世間話に花を咲かせていた。

「水だんご二つ。飲みもんはまかせるよ」

「分かりました。では少々お待ちくださいね」

所謂看板娘と呼ばれる女性に注文を頼めば、にっこりと笑いながら厨房へ消えていった。既に60を越える店主であるが、彼女が生まれた時は大層喜んだそう。既に老い先が見えている店主に代わって時期に彼女がここを切り盛りする時が来るのだろうか。

団子屋『双葉』の味は俺のお気に入りでもある。

「ほら、いつまで膨れてんだ」  
「膨れてません」

背後で不機嫌そうに顔を顰める季佳に声を掛ければ、それを隠そうともしない声色に少々苦笑してしまう。暖簾を潜ったならそういう態度は止めておけ、店主のおっさんに失礼だ。

梃子でも入口から動こうとしない彼女を、先に座った席から手招きで促す。

先に店の中で団子に舌鼓を打っていた客人たちが彼女を見るなりお辞儀してみたり、手を振ってみたり。やはり博麗の巫女はその信頼度が高い。ようやくにして俺に気付いた様子を見せる数人を見るとなんだかやるせない。

「いいですか？ 私は団子に吊られたとかではなくてですね」

「じゃあ、二人前とも俺が食うけど文句ねーな？」

「そ、そういうことではないでしょう!？」

「どういうことだよ」

ジト目を向ければそのままもごと口を紡いだまま黙ってしまった。愛い奴め。一旦ここで出されたお冷に口を付ける。うむ、美味い。冷たい。

吊られるように季佳も咳払いの後に冷や水を口に流し込んでいた。

そうやってほんの少しの沈黙が続いた後に運ばれてきたのは水色の器に盛りつけられた、半透明の水だんご。器をこっちに寄せればキメの細かいきなが崩れた。まあ、かき氷が食えないってんならこの甘味でも十分だ。

「いただきます」

「……いただきます」

手を合わせて口に出せば、ちょっと戸惑いをはさんで彼女は続いてくれた。そんなに意固地にならんでもいいだろうに。美味しいもんを食う時はただ徐にそれを口に運べば万々歳なのだ。妙なわかだまりなど必要ねえ。

水だんごは3つも4つも串に刺されて出されるような喰い物じゃない。そのまん丸なままに器に盛られ、上からきなこをぶっかける。それを爪楊枝で一つ掬ってはきなこを零さないように口に運んでいくのだ。

まったく、見た目単純な食い物だと言うのに何故にこの双葉の水だんごはここまで美味しく出来上がるんだろうか。お冷で潤された俺の喉はその粉っぽさなど微塵も感じない。ただただ笑顔が無意識に作られてしまっただけだ。なんという甘味の魔力。

唇を歪ませたまま前に座る季佳を見れば、彼女も同じようにしてほっぺが落ちそうなほどに顔を蕩かせていた。単純な奴め。だがそれが正しい。なーんも悪くない。

### 至福の時間

そうやって互いに器の上を空にしたのはそう時間が必要なものではなかった。食後に入れて貰ったお茶をすすりながら同時に息を吐く。何一つ文句のつけようのない『ご満悦』であった。

彼女が団子を食っている最中はずっと線目を晒していたと思う。主に笑顏的な意味で。

「満足？」

「はい。此処最近は甘味を愉しむ暇がなくて。それで……はっ」

「もう遅い」

暖簾を潜った瞬間の態度と今の態度がまるで違うことに気付いたのか、彼女は俺を見たまま茹でたこのように顔を赤らめた。代々の博麗の巫女を知る俺にとってはそういった一面を見せる季佳が酷く新鮮だ。

いや、代々の巫女とて子供のころはこういった初々しさを持ち得てはいるが、大抵その幼さはすぐに成りを顰める。早熟なのか、それとも職務の中で生える覚悟故か。

どちらにしても20を過ぎた季佳がこういう態度をするのは、代々を鑑みると非常に珍しい。俺はこっちの方が好きだけど。

「ぐぬぬ……」

「はいはい。で、俺のどこが悪妖だつて？ 縁起やら里の噂やら……その中にそれを示唆するもんでもあったか？」

俺の問いかけによっていつもの剣呑な雰囲気を取り戻す様は、なんというかため息しか出てこない。どこでこんな目で見られる要因を作ってしまったんだろうか。妖怪と人の関係については表だって関わることはなかったはずなんだが。

というか、なんだかおかしい。俺を糾弾するような雰囲気は何一つ失せていないというのに、その顔の赤さは引く気配がない。

「……何か恥でもかかせたか？」

「違いますっ！」

「おー声を荒げんな。周り見てみる」

椅子から立ち上がりその憤怒の表情で俺に詰め寄る様は、もはや許すまじと息巻く感が溢れている。そんな様子じゃ周りも驚くだろうに。

心配そうにこちらの様子を窺う他の客たちに季佳は黙って頭を下げた。

というかここまで怒るってことは俺が直接彼女になんかした可能性が高いのか？ どうにもそんな感じがしてしょうがない。

記憶を探る。

彼女と初めて出会ったのは、先代の紹介を受けて彼女が人里に顔を売っていた最中であった。お披露目会のようなものだったのだろう。里長やら稗田の嬢ちゃんやら里中の人とお偉いさんを前にして胸を張る姿が印象的だった。胸は今ほど無かったけど。

出会ったというよりは遠目に見ていたと言った方がいいか。未だ一方的なものにすぎない。

きちんと目と目を合わせて出会ったのは、先代が亡くなった後に俺が神社に訪れた時か。墓は作られたのか、それとも死の直前に即身仏にでもなったのか。先代の死後の扱いがどういうものなのかは知らんが、兎にも角にも手を合わせることくらいは必要だろうと思ってお参りしたのが発端だ。

何の用かと抑揚のない平淡な調子で声を掛けられたのを覚えている。やはり師とも言える存在の死は重かったらしい。重くて当然だ。そしてその心は敬うべきだ。

それから 記憶は途切れている。

いや、途切れているというわけではない。そもそも彼女が俺に敵意を向けるまでは彼女と『現実』で言葉を交わした記憶はない。時折人里ですれ違うことはあっても、所詮俺が季佳に目を向けるくらいだ。それに対して彼女は頭を下げるのみ。なんともそっけない。

「ああ……？ 全然心当たりがねえ。俺が何かしたか？」  
「こ、このつ……いいですか？」

今にも机を叩き割ってしまいそうなほどに固く力を込められた拳を見せた彼女に、少々冷や汗をかかされた。だって血管が浮き出てすごいんだもの。世界が取れるね、たぶん。

「あなたが、夢の中で、私に、何をしたのか。思い出しなさいっ！」  
「夢え？ お前何言って……」

夢なんぞその主が覚えてるわけねえだろうよ、などと反論しようとした手前、なんだか嫌な記憶が俺の中で蘇る。

いつだったか、俺は夢に現実を持ちこむ存在は少ないなどと考えていた時期があった。あれは初期の話だった気がする。だが人と出会ううちに『夢への介入』という事実はそう珍しいものでもないことが判明する。

いつだったか。夢の中では主の姿が綺麗にそのまま映し出されることはないと思っていた。

いつだったか。夢のほとんどは現実にて霞と消えるだろうと考えていたことがあった。

いつだったか。夢は現実を押しつぶすことなどありえないと考えていた時があった。

少しばかり過去に飛んだ俺の意識は、こめかみにまで血管を浮かせ始めた千代の顔を見ることによって引き戻される。

ああ、思い出した。

「あなたが、あなたの飼っているあの猯が、夢の中であたしを舐め



まわす悪夢が、未だ消えないのは何故ですか！！」

なんつーエロい表現。客人の中にいた野郎の客が此方を見るのは早かった。自重しろ。

いきり立つ彼女を押さえながら、まずは聞き耳を立てていた野次馬たちに視線を向ける。

「夢の話だから。勘違いすんな」「把握した」思ったよりも意思の疎通は円環に出来たと思う。

詳細を話そう。彼女の主張と合わせれば、2年ほど前の話だ。

夢喰である俺と獺であるクロとシロの主な活動はと言えば、勿論夢を喰う事である。これについては現実世界における時間軸など関係がない。腹が減れば共にあの狭間から夢を喰いに出かけるだけだ。紫さんによつて張られた結界によつて顕界の夢に介入することが難しくなった俺たちは、大体にして幻想郷に住まうヒトが見る夢を喰うことが多い。

まあ、この結界だけはどうにもならんし、そもそも契約を破棄するわけにはいかん。

そんな話の上で俺たちは幻想郷で夢を喰い漁るのだが、もちろんクロとシロも昔と比べれば随分はつちやけるようになってきている。現実には這い出ることも多くなったし、夢を選ぶことも多くなった。そして自ら他人の夢に介入して悪戯をすることも多くなった。お前からそれでいいのか、とも思ったが特に止めてはいない。

そして前述した2年前の話。

クロが博麗季佳に悪戯をした。

ただそれだけの話である。

「いいですか！？ 例え悪夢だとしても、悪戯だとしても、キチンと処理はしてください。それをあなたたちが夢に住まう所以と言うのなら、頭ごなしに否定する気はありません。ですが、あなたたちの悪戯によって私が、人間が害され、そしてそのまま放置するというのなら、それはれっきとした悪妖です！」

クロの野郎……悪夢を作り上げたんならちゃんと食べよボケエ。いや喰うのはシロか。

時折悪夢を喰うことによって礼を言われている俺たちの立場が足元から崩れ落ちんじゃないか。ここで払うつもりだった金銭だって、ついこの間悪夢に魘される人を助けてやった謝礼だろうに。

「あー……すまねえ。いや、ホントすまねえ」

これは謝るしかねえよ。

悪夢の処理が俺達にしか出来ないとはいえ、季佳は博麗の巫女と呼ばれる人外に立ち向かう象徴だ。それがお前、夢喰と猥にされた悪戯で魘され、しかもその解決を当の俺らに頼むなんてあっちゃあこんな酷い話はない。

そりゃ俺への敵意も、それを向ける理由を大っぴらに出来ないのも納得だ。

吐く息荒く肩を上下させるその様子は、他から見れば気の毒と言うほかない。俺は密かに野次馬たちに向けて人差し指を出した。「秘密な」「把握した」さすがである。

まあ、博麗の巫女に仇名するような人間なんていないか。

「今日中に喰いに行きます。真っ先に喰いに行きますんで。後クロにもきつく言っとく」

「当然です！」

未だその怒りは収まってくれそうもないが、こうやって真相を明らかにしてくれたおかげで突破口は見いだせそうである。

これから当分季佳には頭が上がりんな。どうやって償うべきだろうか。

まあ、兎に角。

「あー……団子また喰う？ 喉も乾いたろうしお茶も奢るよ」

「……あなたがそう言って下さるのであれば」

きつい口調でも喰い物に吊られるのはどうしたもんか。

「すみません、五人前追加で」

「なぬ……？」

文句があるのかとこちらを睨む彼女に、俺は縮こまるばかりだった。暇つぶしにはなったな。とんだ暇つぶしになったけど。

## 第7話 「無明、不明」

幻想郷が幻想郷たる所以はそこに住む者たちの種族が多岐に渡ることである、というのが主な理由だろう。異能持ち、神、妖怪、妖精、悪魔。どれもこれも一般には珍しいとされる種族もこの地ではマイノリティに属されることがない。いや、少数派であることは間違いないのだが、そういったことを奇異の目で見られることが少ないということだ。

幻想と謳われる者たちが集うから郷だからこそ、その幻想郷という名は体を為す。

が、それを抜きにしても幻想郷という地は日本と言う島国から見て特殊な位置に当たるのではないだろうか。

空を突っ切れば幽明結界に阻まれた冥界、その冥界の果てに存在する天界、妖怪の山の裏側を行けば辿り着いてしまう彼岸、死を受け入れねば辿りつかぬはずの地獄も今となっては行き来可能。

どうだろうか。まるで不自然なほどにこの世の幻想が傍に在るという事実は。ひょっとすれば人間達が幻想を否定せねば、そのどの地域も現世とは近い場所だったのかもしれない。

どちらにせよ、幻想郷という地がそういった『別世界』と近いのは事実だ。

力のある人外ならばそういった所へ足を伸ばすことも容易なのだろうが、何の力も持たない人間にとっては足を踏み入れてはならない場所に他ならない。縁起にも危険度高の文字を添えられて記載されている。

そんな縁起に載せられる多くの危険区域の中で、極高の判定を下された区域がある。

それは、『無縁塚』と呼ばれる、縁を無くした者が迷い込む禁域。時代の流れも不安定、季節の移り変わりもなく、まるで時間が止まってしまったようにして薄明かりを晒すその光景は白夜のようである。

冥界、顕界、外界のそれぞれを隔てる結界もこの地では意味を為さず、それぞれの世界より迷い込むモノが非常に多い。そしてそのどれもが縁を無くし忘却の憂き目にあってしまった『消えゆくモノ』たちなのだ。

そんな物騒な地を、狭間灰色は埒とする。

彼がそこを寢床としたのはいつごろだったのだろうか。彼岸の向こうで職務に励む閻魔や死神、彼をこの幻想郷に連れてきた八雲紫でさえ彼がいつ此処を住いとしていたのかは知り得ていない。

どちらにせよ、人里に下りてきてまで説教をして回るというお節介好きの閻魔にその話が届くのは早かった。

無縁塚とは彼岸で死者の罪を裁く閻魔にとって重要な場所でもある。何せこの地に紫の花を咲かせる妖怪桜は、罪人の魂を受けて花を開かせるというのだから。といってもそれは死者の魂を養分として咲くというよりは、閻魔の裁きを待つ死者の罪に反応して咲いてしまふというところだろうか。

そこまで物騒過ぎるというものでもない。どちらにせよ生者にとって危険な場所なのは変わらないが。

ごとん、とどこからか物が落ちてきたような音にハイイロは目を覚ました。

薄紫のつぼみが目立つ妖怪桜の木の根元。それに預けていた背中を浮かせば嫌な骨の鳴る音がした。胡坐のままに眠りこけていたために大分身体が固くなっていたらしい。

半眼のままにハイイロは口元を歪めた。一度、身体を伸ばす。

「……………」

声にならない伸びは代わりに骨をボキボキと鳴らす、まだハイイロの意識がきちんと覚醒するには足りない。彼はふらふらと足元もおぼつかない足取りで音のした方へと歩いてゆく。

道などあるわけもなく、ただ境界を越えて迷い込んだモノ達の成れの果てで出来た足場に行く。それを見まわしながら歩くハイイロの顔は無表情だった。

「ん、ああ……………」

大きく口を開けて掻いた欠伸を彼は手で隠そうともしない。傍に生えている妖怪桜が揺れた。しかしそれにハイイロが注意を向けることはなく、彼の興味は物音のした方にしかない。

しばし歩けばヒトに忘れられたモノが積み重なるゴミ捨て場のような場所へ辿り着いた。誰がどうみてもゴミ捨て場にしか見えないそ

れを、ハイイロは苦虫を噛み潰したような顔で見ている。  
悲哀。ハイイロは一度息を吐いた。何の意味があつてそうしたのか  
はわからなかった。

ハイイロはしばしその忘れられたモノたちを眺める。濁っているは  
ずの灰色の瞳が怪しく輝いていた。  
そして彼が見つけたのは。

「刀……」

抜き身のままに転がっている一本の日本刀だった。  
鞘は傍に見当たらない。柄に巻かれた布はボロボロに破れ、鈍く光  
る刀身は所々赤く錆びついている。その上欠けている箇所も多い。  
捨てられたか。ハイイロはそう思った。

柄の中で刀身がずれたのか、ハイイロが持ちあげればカチャリと耳  
障りな音を立てた。そのまま顔の前まで持ちあげた刀をハイイロは  
しばらくの間見つめ続ける。刀身から漂ってくるかすかな血の匂い  
と錆の匂いが重なって酷く臭う。

「声が聞けないっていうのは……不便だな」

ゆっくりとハイイロは瞳を閉じた。彼には物の声を聞く異能など持  
つてはいないし、この刀も意思を持つような力も歴史も持ち得てい  
なかった。

故にハイイロはただ銘も知らぬこの刀に、自分勝手な想いを馳せる  
のみ。それが彼にとって非常に歯痒いことだった。

縁を無くしこの無縁塚へ迷い込んだということは、現世においてこ  
の刀を知る者が既に消えたか。それとも忘れ去られてしまっただけに

どうしようもないなまくらだったのか。ただ単純に何処かへ置き忘れただけか。

どれにしても所詮、ハイイロの脳裏に浮かぶだけだ。

「ま、ゆつくりしてけ」

同じように忘却の果てに迷い込んだ品々がガラクタのようにして重なる傍、ハイイロはその刀を地面に突き刺した。その衝撃で刀身の根元が少し柄からずれる。格好を付けて墓標のように地面に突き立てたことを少しばかり後悔するハイイロだった。

「声が聞こえるから死者の魂が漂ってるかと思えば」

「あ？」

自分の考えなしの行為に苦笑を浮かべ、そのまま寢床に戻ろうと踵を返した手前、ハイイロの前に名も知らぬ誰かが立っていた。

青を基調とした着物とそれを締める帯の上には銅銭が飾られ、鮮やかな紅色の髪は両脇で結び、肩に抱えた大鎌はぐにやぐにやと歪んでいる。その姿を上から下までまじまじと見つめた後に、ハイイロは一人納得した。

死神か。

それを理解したのは主にその背丈には合わない大鎌を持っていたからである。それを無くしてしまえば、彼の目の前にいる女性は少々気だるげな表情の奥にこちらを観察するような瞳を湛えた普通のヒトにしか見えない。いや、この無縁塚においてそんな態度が取れるだけでも異常かもしれない。この地は生者にとって正気を保てるような場所ではない。



「知らん顔だなあ……俺はハイイロ。で、あんたは？」

「あたいはしがなない死神の小野塚小町。で、ハイイロだったね？  
此処で何してるんだい？ 此処は生者が居ていい場所じゃあないよ」

ハイイロは首を傾げた。此処に住まうことに関しては大分前に新人の説教臭い閻魔様を説き伏せて承認させたはずだった。

思い出す。幾度も此方の意見を通しても頑として首を縦に振ってくれない閻魔様に、彼は何度も、何度も、自分の意見を叩きつけた。それほどにこの無縁塚はハイイロにとって執着するものだったのか。ハイイロは遠く、何一つ輝くモノの見えない空を見上げた。

「聞いてるか？ 既に生氣と正気を失っているようには見えないが」

「すまねえ、ちょっとぼうつとしてた。で、だ。あんたの問いに答える前にちよつと聞きたいことがあるんだが」

「構わないよ。言つてごらん」

「幻想郷の彼岸で船頭やつてる伊賦夜の嬢ちゃんを知ってるか？」

ハイイロの言葉に小町と名乗った女性はその気だるげに開かれた眼を大きく見開いた。どうやら心当たりはあるらしい。

「伊賦夜の姉さん？ あの人は前任だよ。今は四季様の下で事務係をやってるけど」

「あーつまり、あんたは幻想郷彼岸担当死神の新人さんってわけか」  
「……なんかいろいろ知ってるみたいだね。教えてもらえるかい？」

彼女の持っている大鎌が肩から浮いた。確かに強く握りしめられたそれはハイイロに対する疑念の表れか。先ほど臭った刀の血生臭い匂いが彼の頭にこびりつく。

勘違いか早とちりなのかは知らないが、ハイイロを見やる小町から流れる空気は、少々剣呑なものだった。

小町ちゃん、だっけか。どうにもちゃん付けだと言いついて困る名前だがどう呼んだらいいものか。呼び捨てでもいいか。

そんなくだらないことを考えても目の前で此方を見つめる彼女が俺に持った印象など変わらないだろう。まあ、新人さんってことはおそらく俺について上司やら伊賦夜の嬢ちゃんやらから詳細を聞いていないものと見える。

そもそもいくら死神とは言え、此処に彼女が近づく理由なんてあったらどうか？ 死神の仕事ってのを細かいとこまでも知っているわけではないのだから何とも言えん。

どうにも説明するには話が長くなりそうだと思い、忘れ去られたモノが積み重なった山から椅子になるものを引きずり出した。一つは木製の長椅子。もう一つあれだ双方共に立ちっぱなしになる必要などなくなるのだが、残念。その長椅子しか見つからなかった。

ガラガラとその山を崩しながら長椅子を彼女の目の前に置く。当然の如く彼女は妙なモノを見るような目で俺を見ていた。

「座つときー」

「……あんだ、大丈夫かい？」

「失敬な」

疑念の瞳から憐れむような瞳へ。何だ、小町は俺を浮浪者か何かとも思っているのかよ。まあ傍から見ればそれも間違いでないのだからどうしようもないが。

そろそろ此処に家の一軒でも建ててみようか。そんな計画が頭に浮かんだが、クスリとも笑ってくれそうにない閻魔様の顔を思い出して止めた。

どさりと地べたに腰を下ろして顎で小町を促す。彼女はぐるりと辺りを見回すとやれやれといった風にその椅子に腰を掛けた。ギシリ、椅子が鳴る。さすがに強度なんぞありもしないか。今すぐ壊れそうなほどに撓らないのは僥倖だ。

「さて一気に話そう。俺は狭間灰色っていう名の『夢喰』っていう種族なんだが、俺の存在自体を死者だとか生者だとかの線引きでは引くことは出来なくてな。まあ、特殊なヒトガタだと思ってくれば構わない。ここまでいいか？」

「……ああ」

「で、だ。そんな俺にとって無縁塚っていう場所は酷く心地がいい。ああ、無縁やら空間の歪やらで危険すぎる場所を好む異常性は認識してる、心配すんな。でもってそんな心情の下に此処を壱とし始めたんだが、当然閻魔やら死神は待ったを掛ける。小町のように」

「そりゃあ、ねえ。あんだの言う夢喰って種族自体初めて聞く名だからなんとも言えないけど、こんなところに腰を下ろされちゃあたいとしてはたまったもんじゃないよ」

理解が早い。あの閻魔様の場合なんか最初は此方の意見なんぞ聞い

てくれなかったもん。十王が一審制にしたとかで閻魔の制度が一新された当時は、彼女も色々と新人閻魔として大変だったろうと今更ながらに邪推する。

そんな話と彼女の頭の固さは全くの別なんだろうがな！ 紫さんも苦手とするわ、ありゃ。

「で、なんやかんやあつて俺は閻魔様を説得しました」

「……へ？ それで終わりかい？」

「この過程を話すには長すぎる。一応聞くけど幻想郷の彼岸担当の小町なら上司は四季映姫・ヤマザナドゥだろう？」

「一応上司で、そして閻魔様なんだから敬称くらい付けて欲しいね。まあ、合ってるけど」

おつと失礼。彼女の名を呼ぶ時はきちんと様付けで呼んでるから勘弁してくれ。

俺の話を聞いている最中もその怠惰な眼をぶれさせない小町だったが、敬称云々のところでは俺をしつかり咎めるように意思が込められていた。うむ、上司への畏敬の念は素晴らしいぞ。

が、俺の話を一通り聞いてみても小町は腕組みをしたまま頭を捻ってみたり此方を窺うように眺めてみたり。その態度も当然のものかもしれないが、今の俺じゃあこれ以上説明できる方法もないしなあ。そもそも何で小町は俺のこと知らないんだろうか。伊賦夜にしろ映姫様にしろ引き継ぎくらいちゃんとやってけて話。……忙しいんだろーなー。

「上司か、お仲間の死神に聞いてきたらどーよ？」

「やっぱりそれが一番か。いやあ、手間取らせちゃってすまないねえ」

「いーのいーの。お仕事熱心なようで尊敬するよ」

「え？ …… あ、あははは。 うん、お仕事ね。 お仕事」

何か俺の言葉に引っかかるものがあつたのか、小町は曖昧に笑って流すだけだった。

一応その場しのぎとはいえ無用な言い争いを避けられたことについては喜ぶべきことだが、なんとも視線すら合わせてくれない態度が気にかかる。

そーいえば、小町は何故にこの人気の無い無縁塚を訪れたんだろうか。そもそも三途の川で船頭をやってる彼女が持ち場を離れてしまつては、裁きを受けに訪れる魂はどーなつてんの？

「……………」

「そつ、それじゃあたいは仕事があるのでこれで！」

小町から俺に投げ掛けられ続けていた疑念の視線は此处で反転する。その癖俺がジト目で見やれば彼女はそそくさと大鎌を抱えてその場より消えやがった。

あの居た堪れない感じを見ると先ほど彼女へ抱いた畏敬の念がボロボロと音を立てて崩れ始めてしまう。

「んだよ……サボりつてことかよ」

話す相手のいなくなつてしまった無縁塚では俺の声はよく通る。瞬時にこの場から消えたあれはどうせ異能なんだろうけど、だからつて逃げるように帰らなくてもいいだろうに。俺は映姫様みたく厳しくはないぜー。

ふと其処らに生える一本の妖怪桜を眺めれば、つばみだつたはずの花びらが一つ、その鮮やかな紫を惜しげもなく披露していた。やっぱサボりはよくないね。 うん。 そう言えばサボりつて通じるん

だろうか。サバタージュがどうのここの。  
ま、深く考えることもないか。

「小町いいいいい!!」

「うわ、やば……」

眼を凝らさねば気付かぬほどの薄い霧が立ち込める三途の川入口。  
古風と言つよりはいまにも沈みそうな古めかしさを感じさせる小舟  
が揺れる船着き場にて甲高い声が響く。

じやり、と足元に広がる小石の地を踏みつけてその場に現れた小町  
は、開けた視界の中で此方に向けてズンズン近づいてくる人影に顔  
を歪めた。

仰々しい帽子は荒々しい足取りにも関わらず頭からずれ落ちること  
はなく、小町の頭に振り下ろされるであろう悔悟の棒は腕を振る度  
に残像を残す。烈火のごとく顔を赤くして歩み寄る彼女はそれこそ  
阿修羅のように見える。

ああ、こんな顔で有罪とか言われたらそりゃ逆らえないねえ。

止まらない冷や汗を拭う事もなく、小町はそんなことを脳裏に浮かべていた。どこか諦めのような白い顔をしているのが非常に儚い。それこそ裁きを受ける罪人のような面持ちで立ち尽くす小町の目の前、仁王立ちをしたまま悔悟棒を指したのは四季映姫・ヤマザナドゥ。紛れもない幻想郷の閻魔である。

「私が、何を思い、此处に、こうやって！ 裁判の途中！ 忙しい時間帯に！ ……来たのはわかりますね？」

「は、はいいい……」

詰め寄り、声を荒げ、顔を近づけ、そして俯き 顔を上げたその表情は、どんな悪魔も裸足で逃げ出してしまいそうな凄惨な笑みだった。

こんな顔を閻魔がしているものなのだろうか。小町は頭の片隅に浮かんだ疑問を必死に消し去りながら、出来るだけはつきりと返事をしようと腹に力を入れた。

結果、どうしようもないほど情けない声が出た。

「……自らの生を律し、墮落することを拒むために法がある。いいですね？ 我々は、私は、その法の中でも死後の判定を下すものです。そこに『行き過ぎた怠惰』などあつてはいけない」

「あ、それじゃあちよつとくらいは……」

「その温情すら、ヒトの持ち得る許容の部分に付け込むあなたを！

私が！ 許すとても！ 思っているのですか！」

「きゃんっ！」

バチコーン。

ヒトを木の板で叩いたにしてはあまりに重すぎる音だった。

映姫の身長が小町よりも低かった故か、妙な角度で振り下ろされた

悔悟の棒に、頭を押さえたまま蹲る小町。当然のごとく小町の目下に溜まった涙が非常に痛々しい。だが自業自得である。

そんな姿を晒す小町を見下ろしながら映姫は鬱憤を晴らす、いや、こうやって叱りつけることについて心を痛めているのは違いない。サボリ癖の治らない彼女を何度も説教やら物理的戒めによって矯正しようとして心砕いている映姫の心労はいかほどのものか。

映姫は疲れたようにため息を吐くと、沸騰しっぱなしの頭を落ち着かせた。

「どこに行っていたのですか」

「つつー……あれですよ、その、声が聞こえましてね」

「声？」

「死神のあたいがどこからともなく聞こえた声なんかに胆を震わせる道理なんてありませんが……どうにもその声が無縁塚の方から聞こえてきたものでして」

ちなみに彼岸と無縁塚は微妙な位置関係の上で繋がっているとはいえず、職務に励んでいるはずの小町がこの船着き場で無縁塚から聞こえた声に気づくことなど不可能である。

映姫の浮かべるジト目に小町も誤魔化すように笑っただけだったが、それは半分嘘で半分真実である。再思の道をぶらり散歩しようとした小町の耳にハイイロの声が届いただけ。サボろうとした事実は何一つ変わらない。

（減給ですね）

映姫は静かに小町の行為に値する罰を思い浮かべた。それが重いかどうかは微妙なところではあるが……ひよっとすれば映姫も厳格なだけの人物ではないのかもしれない。



そんな一人敵しい顔を浮かべる映姫の顔色を浮かべながら、小町は聞きたいことがあったと口を開いた。

「それで、ですね。無縁塚で灰色つて、あー、『夢喰』とかいう人にあっただんですけど、ありや誰ですかい？ 四季様やら伊賦夜さんのことを知ってる風なことを言ってたんですが」

「……彼に会ったのですか？」

「ええ、まあ。それで一応注意してはみたんですが、なんだか四季様とも色々知り合いだったようで」

「むう……まさかあなたが無縁塚に近づくとは思いませんでしたね。しかし彼のことを話すのが遅れたのは此方の落ち度でした。すみません」

まさか、そのことに対して映姫が頭を下げるとは小町にとって予想外だったらしく、その態度に小町は手を振りながら酷くうろたえた。未だ小町は映姫との距離を測れずにいる。彼女がサボる理由もまた軽い話ではない。

ハイイロのことについて説明すべく口を開いた映姫は、慎重に言葉を選びながらポツポツと話し始めた。

「『夢喰』と彼は名乗っていますが、それは便宜上の話でしかありません。実のところ、彼が名乗るべき種族は存在しないのです。しかし『我思ふ故に我あり』という西欧にある言葉に従えば、そこに他者が疑問を挟む余地はありません」

「はあ」

「そもそも、彼の存在は誰に定義できるものではありません。何せこの『現実』に存在しない者ですから。我々閻魔側から見てもどのような対処すればいいのかがはっきりとせず、この世に存在する多くの概念も、彼からすれば酷く歪んでしまっ」

「ちよちよちよ、ちよつと待って下さいよ。なんだか話が大きすぎ

る気がするんですけど。……えっと、灰色さんでしたっけ？」

小町からすれば映姫の言葉はそう易々と理解出来るものではなかった。彼女の説明は要領を得ないばかりけた者にしか見えず、映姫本人もどのように説明したらいいのか戸惑っているようにも見える。

ただ一つ小町に理解できたのは、閻魔という人物をもつてしてもハイイロという存在を紐解くことは非常に難関であるということくらいだ。そんな事実を目の前にしてか、何故か彼を呼び捨てにすることは何となく憚られてしまう小町だった。

「その反応がおそらくは正しいのでしょう。話は変わりますが小町、『獺』という生物を知っていますか？ 無論ただの動物として亜細亜にて知られる者たちではなく、です」

「獺、ですか……夢を喰う神の一種として……ん？ もつと昔では病や邪気を払う守護神として……」

「そこまで知っているのならばよいでしょう。兎にも角にも獺、という存在はヒトの信仰を得て現世に降り立った神の一種でもあるのです。今は悪夢を食らうという面が強く認識されていますが」

「じゃあ、灰色さんもその眷属……ん？ 夢喰？ 何だかこんがらがってきましたね」

こめかみをトントンと人差し指で打てば、頭の中で情報が錯綜する痛みが小町を襲った。そも、映姫の説明は本当に的を射ているのだろうか、などと不敬な考えが頭を過ってしまう。

小町に投げ掛けられた欠片ほどの疑惑に、映姫は苦笑するばかりだった。

「ではもう一つ重要な話を。小町、あなたは『夢』をどう思いますか？」

「はあ？ 夢、ですかい？ どうって言われてもそんな……」

「そう、それこそが狭間灰色を語る最大の焦点となり得るのです」

突き付けられた悔悟の棒に、小町は何だか寺子屋の教壇に立つ教師のような、はたまた演劇で見られるような仰々しさを感じていた。なんだか四季様の妙な部分を刺激してしまった気がする。そんな不安に駆られる小町。

「実のところ、私もどう結論付けていいのか困っているのです。何せ彼の生まれた場所は夢であり、彼の元も夢であり、そして生き抜いてきた場も夢でしたから。現実を生きる我らにとって、夢の道理が通らないことと同じく、現実の道理も夢には通らない」

「……………」

「彼は言います、夢とはヒトの意思によって生み出される不可能があつてはならない世界だと。現実にて起こり得る全ての事象はねじ曲がり、ただ『在る』ということのみが認められる世界」

「それは」

その先になんと続けようとしたのか。小町自身、分かつてはいなかった。

「誰もが焦がれるでしょう。誰もが希望を見出すでしょう。何せ夢の中では誰しもが主役で、脇役で、裏方であることができる。それ故に現実には勝ち得ないと彼は口を酸っぱくして言うのですが」

「だけど四季様。あれは一日で、目が覚めれば消えてしまう……………」

「その通りです。『現実』には存在しない幻でしかありません」

「……………なるほど」

ようやくにして小町はハイイロという存在の異常さを理解する。

夢の生物。夢の神。夢の悪魔。そのどれもが実のところ珍しくもなんともない。海外に広がる神話の1ページでもめくればそんな存在

は腐るほどいるだろう。

だが、夢そのものから生まれ出づる存在などあるのだろうか。

ヒトが見る夢を操る神、ヒトの夢を食らう生物、ヒトの見る夢に入り込む悪魔。どれもこれも間接的なものにしか成り得ない。彼ら自身は、夢ではない。現実が存在するのだから。

ならばハザマハイイロとは。彼は言う。俺は夢より生まれたと。

「彼自身が危険人物だとか、存在そのものが害だとかそういう事実はありません。ただ彼という存在を表すことのできるものが全く存在しないのです」

「だから夢喰と」

「彼が連れてくるクロとシロという名の獺と共に過ごしてきた年月はありましたが、所詮それは獺の真似事でしかなかったそうです。夢を食らうという必要性も特になかったとか」

「それじゃあ、夢喰と名乗るのは単なる名残だとかそういうもんですかい？」

一度、映姫は深く頷いた。彼女本来の性格である物事をはつきりと判断する強さもどこか薄れ、その言葉の節々が小さくなる。

小町からすればなんと言っていていいかわからずに、ただその事実を受け入れるだけだった。

何だか面倒な話になったな、と小町は思う。いつもは彼岸に流れる静寂な雰囲気も今はどこか鬱陶しい。確かにハイイロの正体を、というよりも無縁塚に彼がいる理由を問うたのは自分だけでも……此処でようやく小町は、その理由そのものは何一つ聞けていないことに気付いた。

「……それと無縁塚に彼がいるのは関係が？」

「縁もなく、空間も歪み、存在を許されなくなったモノが集うあの地は、酷く狭間に似ている、と」

「狭間？」

「夢と現実の間に存在する空間だそうです。彼に頼めば連れて行ってもらえるでしょう。……私は二度と御免ですが」

何か嫌な思い出でもあるのだろうか。小町の純粹な疑問に映姫はただ笑って流す。悲しさを感じさせるような浮かない笑みだった。

「あなたが此処に来る前に彼とはそのことで何度か意見を交換しています。今は時折迷い込んでくるモノに対する門番役というか、忠言役というか。兎に角正式に私たちの許可を持って彼はあそこにいるので、そう認識しておいてください」

「……ま、それが聞ければあたいは構いませんよ。何だか難くて理解がおっつかないっていうのが本音ですけど」

からからと笑う小町は、既にハイイロ関連の問題を思考の外に捨てていた。それが正しいのかもしれない。幻想郷では始まりも過程も不明すぎる人物は腐るほどいる。

映姫もそれを見て一度首を振ったが、咎めはしなかった。しかし一度緩めた表情を引き締めて、彼女は真剣な目で小町を見据えた。

「危険ではない、とは言いました。しかし彼の思想や価値観は非常に危ういものがあります。絆されることなどないでしょうが、一応気を付けておいた方がよいでしょう」

「大丈夫ですよ。それでも伊達に死神をやっているわけじゃないんです」

「まあ、いいでしょう。それで仕事をおろそかにしなければもっと

よいのですがね！」

「……あー」

表情がコロコロ変わるように眉をつり上げた映姫を前にして、小町はなんだかよく分からない安心感に包まれた。

先ほどまで語られた狭間灰色という名の男に対する話は、小町にうすら寒い何かを感じさせるものがあつたから。

「ど、どっつ……此処は!？」

一人、無縁塚に外界より迷い込んできた男がいる。

今まで生きてきた世界から外れ、目の前に広がるのは紫の桜と訳のわからないガラクタ。

本当の意味で、男は何一つ理解できていなかった。

「今日は多いな」

「だっ……」

縮こまってしまった首を勢いよく振って後ろを見れば、そこには灰色の甚平を身に纏った男がいた。それだけならばいいが髪も瞳も灰

色というのは妙に気味が悪い。

「お前つ、だ、誰だ……」

「狭間灰色」

打てば響く、と言わんばかりに淀みなく答えるハイイロというナニカに、迷い込んだ男は彼との距離を測りかねた。

情報が足りない。何もかも足りない。自分がつい先ほどまで何をしていたのかすら覚えていなかった。

「そ、そうか。なら、此処は……」

「無縁塚。此処に来たってことは……縁でも無くした？ ただの間が迷い込むにはちつとばかり異常過ぎるが まあ、いつか」

訳の分からない単語が並ぶ。

そんなことよりも、ハイイロと名乗った男が顔を歪めた意味が分からなかった。

「縁がねえとはいえ、理由なしには迷い込まん。あれだ、その理由、聞かせて貰わんとどーにもならねえ」

「ど、どういう……」

一歩、一歩此方に近寄ってくるハイイロに男は腰を抜かしそうになる。いや、既に足は震え、言葉さえもおぼつかない。

そんな男を前にして、ハイイロは満面の笑みを浮かべてこう言ったのだ。

「話、聞かせてくれ」





## 第8話 「逢魔時の制空権」

人里やら妖怪の山やらのヒトたちにちよっかいを掛けながら過ごした今日と言つ一日も、空を見上げれば紅く燃える夕暮れ時。そういえば日中の空に広がっていたうろこ雲はどうなったのかだろうか。常に空は頭の上に広がっていると云うのに、雲の流れもそこを飛び交う生物の影も俺の記憶には残っていない。

やはり人は地に足を付け、届くこと叶わぬ空にこそ想いを馳せるんだろうか、などと俺は妙にセンチメンタルな気分陥っていた。それも悪くないんだが、詩人にもなれないだろう俺には少々むず痒すぎる。

表も裏もなくただ感情のままに言葉を吐き出す方がよほど俺らしい。

そんなことを考えてもう一度空を見やる。遠くに見える妖怪の山は今日も多分に漏れず天狗たちの宴会で盛り上がっているんだろうか。鬼にしる、天狗にしる、幻想郷のヒトガタたちは揃いも揃って酒豪ばかりのような気がしてしょうがない。どいつもこいつも見た目はアレだつていうのに。

妖怪の山を覆う濃緑の木々たちもそろそろ赤みを帯びてくる季節。

この夕焼け空も相まってか幻想郷中が赤に彩られる瞬間が楽しみだ。血の赤はご免被るが。

一鳴き。鳥の間抜けな声が空に響く。あの烏天狗は今頃どうしているんだろうか。真夏の終わりに書き上げる新聞はおそらく内容の濃いものになるだろう。季節の終わり目つてのは大体そんなもんだ。

ならばと俺も今年の夏を思い返す。

かき氷は一度しか喰えなかった気がする。冬になれば腐るほど空か

ら降ってくるというのに、何故にこんなにも未練が残るのだろうか。遠い先を知る俺の記憶には真夏の風物詩として名を馳せる、空に轟音を響かせる花火の光景がこびりついて離れない。やはり、未だ幻想郷には贅沢が足りない。いや、俺が贅沢なだけか。

花火。俺の記憶にあつたのはそう特別なものではなかった。

色取り取りの閃光が形を運び、空に踊る。余所行きの小奇麗な着物を着こんだヒトがそれを見上げ、時にその轟音に耳を押さえながら火薬の匂いに季節を感じる。

ああ、綿アメなんかも花火の代表的なお供だった気がするな。

思い浮かべる。

人間の科学が行き届かないこの幻想郷の澄んだ空に、あの光景を重ねる。星々の輝きを遮ることなく広がる満天の夜空に、無粋なほどに騒々しい煌びやかな光を解き放つ。

……いや、やはり詩人には向いていない。

幻想郷中が空を見上げるだろう。神も妖怪も妖精も、あの光景に見とれるだろう。

(……………)

俺の記憶は、花火とやらにナニカ思い入れがあつたのだろうか。

材料も、職人も、知識も幻想郷には存在しない。そもそも火薬のそれを紫さんが認めるだろうか。人間と妖怪のバランスがちよつとでも揺らげば崩れてしまうほどに脆弱なこの世界では、ただの芸術品にも崩壊の兆しがちらついてしまう。

それが俺は悲しい。この幻想郷における、あの紫さんの過保護過ぎる愛が、俺は悲しい。

世界の管理つてのがどれほど難しいものなのかは俺にはわからないさ。経験も実践もしていない俺には其処に口を挟む資格なんてないのだろう。

故に、不安になる。不幸と幸福の揺れ幅を極端なまでに狭め、まるでぬるま湯のような変化と管理された停滞の中で生きるヒトガタに、未来はあるのだろうか。

紫さん。本当に、呆れるくらい幻想郷は楽園だよ。

空に吠えるほどの慟哭によって感じる不幸もないのだろう。涙を流して叫ぶほどの幸福もないのだろう。

最近、人間と妖怪の関係が形骸化し始めていると紫さんは悩んでいた。

妖怪が人間を襲い、人間がそれに恐怖し、その果てに行われる闘争において人間が生を勝ち取る。そんな関係を繰り返すにはこの世界は小さすぎた。

同じ戦場、同じ相手、同じ結果。それが妖怪たちに飽きを齎すのはそう遠い話でもない。

妖怪が人間を襲うという行動は本能であり、本質であり、誇りであった。しかし、今幻想郷におけるその行為は薄れつつある。

昔からやっていたから。なんとなく。そんなあやふやな目的で行われるものに意味はないだろう。そもそも強力な結界によって保護されているこの幻想郷では、別段人を喰わなくても妖怪は生きていくという話を耳にしたこともある。著しく、妖怪としての力は弱まるが。

駄目だ。どーにも考えが面倒な方へ向かっていく。

何だろうか。黄昏時つてのは人の心を陰鬱にさせるものでもあるん

だろうか。人里より少し離れた野原に一人佇む俺は、急激に不安のようなものに駆られる。

唐突に振り返れば、太陽を背にして長く伸びるヒトガタの影がそこにあった。なんだ、俺のものか。

今日は無縁塚じゃなくて狭間にでも帰ろうか。あれだけあの世界を毛嫌いしていたというのに、結局のところあそこが一番心落ち着く場所だというのが我ながら呆れてしまう。

誰に向かっていているわけでもないのに、つい両手を上げてやれやれなどと首を振った。不審者極まりない。遠くに見える太陽は既に半円を越えてその頭しか見えていなかった。

サワサワと足首を撫でる雑草が鬱陶しい。今は耳に入る風の音も気分を害するような雑音にしか聞こえないってのは重症だ。

妖怪の山に背を向け、そのまま地平線に落ちていく太陽を眺めながら無縁塚へと足を進める。今すぐこの場から狭間へ転移するのも構わないが、それだと余計な歪みが出来る。結界の修復に紫さんやら藍やらに手間をわざわざ掛けさせる必要はないだろう。

魔法の森、再思の道、そして無縁塚。ちよつとばかり遠いが頭を冷やすにはちょうどいいかもしれない。故に空を飛ぶという選択肢もなし。

まったり行くかと決めた手前、聞こえてくる風の音の中に明らかに質の違う風切り音が含まれていた。まるで飛行機のように甲高い音を響かせるそれは、確かに俺が知っている音。

風が強くなる。

赤みの帯びた灰色の甚平が激しく靡き、ばさばさと湧き立つ髪が俺の視界をちらつく。そういえば最近髪を切っていないな。限りなく

人間に似せている俺の身体は、そういった変化も備えている。所詮表側だけだが。

もう視界には入れんと決めていた妖怪の山を再び見やる。その空に映る黒点が徐々に輪郭を取り戻しながら俺に近づいて来ていた。相変わらず速い。

果たして取材されるような問題事でも起こしたのだろうか。彼女の熱意に応え、何度も言葉を交わした日々は実に有意義だったけど。

ふわり。肌を打つくらいには強い風圧を纏っている癖に、その黒翼の女性はやけに優雅に俺の前へと着地する。黒のスカートが拍子に揺れる。曰く鉄壁。

いつものように片手に持ったメモ帳は見当たらない。プライベートか。どちらにせよこちらを見やる彼女の顔は、いつものような狡猾そうな笑みは湛えていない。

「……なんか、機嫌良さそうだな」

「そりゃ、もう。今日の風は久しぶりに心地いいもの。そうは思わないの?」

「まあ、涼しいとは思っけど」

「纏わり付くような風は嫌いな。それがなきゃこの季節も悪くないんだけど」

揺れる黒髪の間から見える無邪気な笑顔に、何だか寒気がする。こいつってこんなに子供っぽく笑えるんだなどと今更ながらに気付いた。

射命丸文。妖怪の山に住む天狗の中でも古参の烏天狗。新聞記者としてちよくちよく人里に下りてくる彼女こそ、『里に最も近い天狗』だとか。二つ名などよく覚えてはいない。俺には灰色の名があればいい。

「あんたって一人の時は大体考え事に没頭してるわよね」

「そうか？ …… そうかもなー」

「はぁ…… 変わらないように何より」

「そっちな」

旧友。そういった関係でいいのだろうか。未だ友と自信を持って言えるヒトガタは少ないけれど、気を張らずに入れるってのはいいことだ。別段気を張ってる時なんてないけども。

彼女と知り合いになったのはいつだったのか。

ヒトと触れあい、言葉を交わすことに喜びを感じる俺と、記者として幻想郷のありとあらゆる情報を得るために飛びまわっている彼女とは、その邂逅もすぐだった。

同じように聞き手である俺たちが出会ったとしても何だか噛み合わない。目的こそ同じ方向を向いているわけでないのに、何だか話が進まない。

双方共に相手の噂を知っている癖に、話がまるで盛り上がらなかったのを覚えている。此处はあなたが。いやいや君が。いやいや。いやいや。

記憶の中。帽子を地面に叩きつける中年男が浮かび上がった。

似たもの同士などと俺は勘違いしたもののだが、そのまどろっこしい会話の中に、俺は一つの忌むべき事実を見出した。

互いに聞きたいのは相手の話。身の上話か、経験した話か、それとも常日頃抱く愚痴か。それを投げ掛けられた時、俺は初めて自分が何一つ話すことがないことを知る。

俺はあいつのあんなことを知っている。俺はあの時あったことを知っている。俺はあれに対してこういう風に感じている。どれもこれも、観客にすぎないものばかりだった。

「また何か考えてる？」

「んー……お前と会った時のこと」

「何そのセリフ。夕焼けでも背負って愛を叫んでみる？」

「アホか」

眉を顰めて否定してはみたものの、文の言う通り「お前と初めて」なんてセリフ、まともな雰囲気が出るような言葉じゃねーか。顔を赤くはしてやらない。そんなものに羞恥心を抱くほど俺は繊細でもない。

「珍しく悩み事だった？」

「んだあ？ 随分斬り込んでくるなあ」

「言っただでしょ？ 気分がいいって」

「いや、大丈夫だ……っ！ つか、悪いな。詮無い話に過ぎねーんだ、実際」

吐き捨てるように呟いた言葉に、文は不満を露わにじつと此方を見つめた。ちと不躰だっただろうか。これでは空気が読めないと言われても仕方がない。

頬をわざとらしく搔いてみれば、いつのまにやら文は漆黒と燃えるような紅色が混ざり合って広がる空を見上げていた。……もう、陽は見えなくなるな。

「ねえ」

「あん？」

「空でも飛ばない？」

告げられた言葉に、俺はしばしその意味を考えるのだった。

満天の、と言いたいところではあるが残念なことに今日の夜空に星の輝きは見えやしない。雲を追いつくほどに高く飛べば其処には絶景が広がっているのだろうけども、そこまでする必要も今はない。疲れるし。

文の提案にどこか不穏なものを感じつつも、俺は彼女と共に遊覧飛行としゃれこむことに同意した。無縁塚に帰ると決めたあの時こそ空を飛ぶなどという選択肢はなかった。なんと調子のいい話だ。

そんな悩みも彼女に連れられて空へ飛びあがれば霧散する。

肌に感じる風は少しばかり冷え込み、眼下にうつすらと見える多くのモノが少しずつ小さくなっていく。ふと遠くを見下ろせば、人里やら天狗の山頂上やら、ヒトガタが集まる場所には点々と光が灯っていた。

綺麗だ、と単純に思った。



月も見えない。星も見えない。なのに眼下に広がる光には俺の心を打つ何かがある。ふと草むらに屯する蛍の光景が頭に浮かんだ。今年も奴らは元気に、健気に、幻想的に光ってたけど。再び思う。今日の俺は何だかセンチメンタルな気分だった。

「んー」

漏れ出た言葉にいちいち問いかけるようなことを、文はしてこなかった。

阻むモノ一つとない空を彼女と並んでどこまでも飛んでいく。無論、空を飛ぶことにかけて並ぶものなどいない文は、俺のためにいくらか力を押さえているのだろう。俺がいなければ彼女はもつと強く、もつと心地のいい風を纏うことができたはずだ。

まあ、そんなことを進言してみればぷりぷりと怒りながら指を振った。

空において私に気を使うなど千年早い、と。

事実、そのくらい彼女は歳を重ねているのだから分からんでもないが。

「なんか言っただー？」

「お？　おお！？　何でもねー」

問いかけるようなことはいちいちしない、などと評価を上げてやったのにも関わらず、口には出していないはずの声にはやたら反応してきやがる。慧音にしろ、文にしろ勘がいい女が多すぎる。この幻想郷は。

そのくせ、わかりやすいほどにうるたえた声には鼻で笑って返してくるんだからどうしようもない。吊りあがった口角に憎たらしさを

感じる今日この頃。

「あー……有難う。なんとなく靄が晴れた」

「そう？ よかったわね」

他人事のように、よく言う。視線を合わそうとしない文の横顔を見ながら緩んでしまいそうな頬を引き締めた。ここで笑えば高確率で蹴りやら風圧やらが飛んでくるだろう。風を操る烏天狗に空の上で逆らうことは死に等しい。死なんけど。

にしても本当に今日の文はどうして、こんなにもしおらしいんだろ  
うか。ご近所のねーちゃんみたいな気軽さこそが、プライベート時の彼女には備わっていたはずだ。風を受けて空を縦横無尽に駆け回るような自由奔放さが。

優しすぎると言えばその通りなんだが、こうやって気分転換に連れて行って貰っている手前、そんな礼儀知らずなことは思っても口に出来ない。

そも、この時期の彼女は新聞製作などで忙しいのではなかったのだろうか。

「疑問に思ってるんだが」

「何よ」

「お前こそ、あれだよ。なんかあったん？」

「まあ、ね」

それは何だ、とは聞かなかつたけれども。

風の音だけが響く時がしばらくの間続く。いくら文の能力によって多少なりとも緩和されているその音も、こつも沈黙が互いの間で続いてしまえば耳に残る。

ようやくにして言葉を吐いてくれた文の声は、心底うんざりといっ

た間延びした声だった。

「私って真実を暴く新聞記者よね？」

「……そういうことにしておく、で？」

「兎に角！ だから隠し事をされるといつい追求したくなるのよ」  
「だから、で繋がられることでもねーけどな」

こいつは自分の風聞つてものを知らないんだろうか。ちょっと時代が進めば、パパラッチだとかゴシップ記者だとか言われそうな所業を数多く繰り返し返している彼女が言うには、真実なんて言葉、少々安すぎる気がする。

いや、彼女だからこそ真実と言う言葉に重みがあるのか？

「そりゃ世の中のあらゆる、だなんてつもりはないけどね。でも仲間内からそういった隠し事をされるってのはどうも」

「あん？ 天狗の間でなんかあったのか？ あんまり想像つかねーんだが。お前らは組織的にも情情的にもそう仲が悪くはねーだろ」

「大天狗様やら天魔様が最近ピリピリしててね。いくら噂好きの天狗ってつたって上司の悩み事を笑い話にするほど腐ってはいないわ。ただ、天魔様たちが懸念するほどの何かが隠されているのが気に食わないだけって話」

「天魔が、ねえ」

記憶を巡らせてみてもそういったきな臭い噂はないはず。排他的な天狗社会の中にある重大そうな問題なんて俺が知っているわけでもないし、そも、文が知らないってんなら俺が知ることができるわけもない。

文の横顔に浮かぶ不満顔の中には、不安のようなものもあるのだろう。

「それにね。どうにも天魔様たちがあなる前に八雲紫が会っていったって話があるのよ」

「紫さんが？……なんだか急にややこしくなってきた気がするな」  
「まあ、八雲紫だしね。だからこそ私たちの間でも容易に他人事出ない問題があるんじゃないかって話になるんだけど」  
「なあるほど」

そういえば紫さんが冬眠するのはいつごろだっただろうか。既に秋の始まりぐらいには藍がいろいろと動き回っていた気がする。どちらにせよ、多くの天狗を取りまとめる天魔がそういった緊張を表に出すほどって言うことは……。よくわかんねーな。情報が足りなさ過ぎてどうコメントしていいものか。

一人腕を組んだまま空を駆ける。文はくるりと身体を一回転させて翻せば、どこからともなく取り出したメモ帳をパラパラとめくり始めた。

何だ、俺はこの件に関しては言えることなんてねーぞ。

「ああ、あつたあつた。でね、大天狗様がぼそつとその件について話していた所を偶然にも見かけてしまったんだけど……『文明開化』ってどういう意味？」

「なーにが偶然だよ……って文明、開化っておい」

「あや？ 知ってるんですか！？」

「取材モードに変わんな。しかしお前、文明開化って言えば」

キラキラと露骨に瞳を輝かせた文に肉薄されるが、非常に鬱陶しい。しかし文明開化って言えば外界の文明がアレでアレになることだろ？ あれっでもうちよつと後の話だったと思うんだが、今は……あー、幻想郷だと正確な年代が出てこねー。確か阿七の嬢ちゃんがつ

い前に転生の儀に入ってたって言ってたから……。

なんだろうな。一定の期間に蘇りを繰り返す人物を基準にして年代を計算する俺が、どうしようもなく罰当たりな気がする。

映姫様あたりにばれたら半日くらいは正座させられそうだ。

しかし、これはどうするべきか迷う。

確かに俺は文明開化という言葉を知っているし、その内容も少しくらいは理解できている。が、所詮それは未来の知識。今此処で彼女に全て伝えてしまうのは非常に拙い。

そもそも、文明開化の話題が天魔と紫さんの間に何で出てくるんだ？ 外界の変化によっておこる幻想郷への影響など。

「ほらほら、此処はズバーっと隠し事なぞせずにこの射命丸文にぶちまけてくださいよ！ 心配せずとも、って……灰色？」

「あー」

「……言えないっての？」

一つ、というか色々と思い当たることがある。というかこんなことになるんだったら天魔とか各勢力の長よりも当事者の俺を優先して貰いたいんだがなあ、紫さんよ。

此方を咎めるように鋭い視線を向ける文に、俺はただ曖昧に笑う事しかできなかった。

目的地なく空を飛んでいた俺たちは、なんとも微妙な空気を感じてその場に留まるのだった。

「あれだ、多分本人に聞いた方が早い気がする」

「本人って誰よ」

「まあ、呼べば来るだろうし……紫さん」

「あんた、何を……げ」

口に手を当てて空に叫べば、俺たちの目の前には空間の裂け目が現れた。

すぐ横で顔を歪める文に悪い事をしちゃったかなーなどと少しばかりの罪悪感が浮かぶ。上司の隠し事を暴こうとする者は果たして彼女にどう映るのだろうか。真実を知った者には死を！ なーんて飛びかかってくるようだったら遠慮なく阻止するんだけど。

「その必要はありません」

「そうかい？」

「なんだか踏み込んだんじゃない話題だったみたいね。まだ新聞には文明開化なんて書き込んでいませんよ？」

「構いませんわ。そんな言葉など何一つ意味を持ち得ませんもの」

自ら這い出たスキマに腰を下ろし、手に持つ扇子で口元の妖艶な笑みを隠すのは紫さん。俺たちの動向を逐一見ていたのか、それともただの偶然なのかは知らないけども、俺の声に応えてくれたのは僥倖だ。

いや、便利な道具扱いしてるわけじゃないんだけどね。大体の場合、彼女は全ての一歩手前を行っているからこんな形になるわけで。

「はい、じゃあ互いに言いたいことでもあれば」

「はあ？ あんたは何、妖怪の賢者の使いっぱしりにでもなったわけ？」

「あら、どちらかと言えば私が彼の小間使いみたいですけどね。ふふふ」

「じゃー俺の好きなように話を進めていいのん？」

揃って俺に痛烈な批判と言葉を吐き捨てる二人の間で一つ、ため息。こっちから歩み寄ってみれば、彼女らは揃って俺の申し出を断った。まー、今は所詮第三者だ。しゃしゃり出る時じゃないね。

「真実を知るのも結構ですが、その過程で消えていった草たちは果たして何人いるのやら」

「脅すとなれば随分と今回の件は重要な様子。なればこそ外野に押し出されるのは屈辱ですね。それとも「あなたのため」なんてお決まりなセリフでも吐きますか？」

「ええ。もちろんあなたのために、ですわ。まあ、協力して下さるというのであればやぶさかじゃありませんが」

「協力？」

聞き返す文に紫さんはにっこりと笑った。

そりゃあ今現在俺は実況席で固唾を見守るくらいしかできないけれども、どうして妖怪が二人かち合うところも物騒な空気になるんだろうね。

もう、先に帰っちゃおうか。……二人とも既に俺のこと眼中になーなー。

「そう、協力。……ただ、私の言い付けを忠実に守ってくれるお人形さんになってくれるのであれば、真実などいくらでも教えて差し上げますわ」

「何を世迷言を……そんなこと射命丸文の名にかけても御免被ります」

「だったら、あなたもいつも通り新聞製作にでも精を出して下さい。私も楽しみにしてますのよ？ あれは」

「それは、恐縮ですね」

ギチリ。射命丸から齒を食いしばったような音がした。

単純な話、彼女と紫さんでは持っている力量が違いすぎる。どうにも妖怪たちの揉め事は大抵にして殴り合いで解決されるため、今の文には引き下がってもらうしかないだろう。

でなけりや『犠牲』だとかいう名目で紫さんが文を殺しかねない。

どちらにせよ、此処らが引き際だ。

俺は今にもはち切れんばかりに緊迫した空気の中で、ゆっくりと息を吐いた。おー、緊張する。

「妥協すべきはどっちかー、なんてのも無粋だけどね。文、此処は頼むよ」

「……はあ。わかったわよ。そもそも天魔様が隠すってんだから多少は信頼して見せなきゃね。一応、私たちの長だもの」

「賢明ですわ」

「紫さん、此処は黙って見送るのが美德ですうー。余計な口挟まずにちと黙っとけ」

口を尖らせつつも目は笑っている紫さん。どうにも何でこう人をおちよくるようなことを好むのだろうか。

全く目も口も笑っていない文に俺は手を合わせ、顔に浮かべるのは愛想笑い。固く握り込まれた彼女の両手が直視できなかった。

やがてゆっくりと息を吐く彼女を前に、俺は何とも居た堪れない気分にならざるを得ない。

「灰色。事情が公表できる時になったら真っ先に私に知らせなさい」

「私が教えて差し上げてもよろしいのですよ？」

「信用という言葉をご存じで？ ……もう行くわ。まだ仕事が残ってるもの」

「ごめんなー。近いうちにきちんと埋め合わせはするからよ」

また双葉にでも連れて行ってやろうか、などと発想の貧困なことを考えていれば、文は首を振りながら、背中 of 翼を大きく羽ばたかせた。



今まで耳に届くことなく巻き起こっていた風が、徐々に音を取り戻し始める。どうやら能力を切ったらしい。

帰るのか、そう気付いた俺は兎にも角にも気分転換に此処まで連れてきてくれたことへの感謝だけは忘れまいと、口を開こうとした。  
だが。

「実のところ、今日こうして一緒にいるのも、あんたなら詳しいことを知ってるんじゃないかって当たりを付けてたからなのよ。だから、まあ、礼ならいらないわ」

「何だとお……しおらしいとか思ってた俺が馬鹿みたいじゃねーか」  
「ふふふ、軽蔑する？」

「ありえんなー」

俺の言葉に文は妙に満足そうに微笑みながら遠く、妖怪の山へと飛び去って行った。瞬く間に視界から姿を消すその速さはさすがと言わざるを得ない。

もしも彼女が、俺ならば許してくれるだろう、という目論見で接触を図ってきたというのなら、なんとも微妙な気分だ。単純そうだからそう思ったのか。それとも器が大きいとかそんな理由か。

後者は明らかにないだろうな、などと我ながら思う。

そんなことを考えながら振り返れば、その妖しい笑みを絶やさず此方を見つめる紫さんが其処にいた。何をそんなにニヤニヤと笑っているのやら。

悪趣味だなー、ホント。というかこの人、とりあえず笑ってりゃいいやってくらいによく笑う。そりゃ強者の湛える表情は須らく笑みだっていうけどさ。その美麗な笑い顔もそんなに頻繁にされちゃあ希少価値が下がるんじゃないの？

……それでも価値が下がるというのが美人って奴か。

「彼女にしては随分と喰い下がったわね」

「そういえばそうだな。弱気をくじき、強気を助けるを地で行く奴なの」

「それほど今回のことは頭に來たのかしら」

「どーだろーね。あいつ、常日頃組織社会は面倒だなんて愚痴をこぼすけど、何だかんだ言って同族思いだもの。しかも……古参だし」

二人揃って文の飛んで行った軌跡を眺めながら、言葉を交わす。

確かに彼女の紫さんに向ける瞳はただの疑念を越えて敵意のようなものさえ見て取れた。新聞記者としての信条以上に、古参として天狗社会に生きてきた責任やら誇りやらがそれをさせたのかもしれない。

そう思うと、誇りばかり高い……あー、いや。言い方が悪いな。

つまりは誇り高い種族の多い幻想郷では、紫さんのような秘匿主義者だとうにも貧乏くじを引かされることが多いのだろう。

まあ、愉快犯であることを好むせいというのもあるんだろうけど。

紫さんがあんまり幻想郷において信用されていないという事実には変わない。

だとしても、今は彼女の隠しているという話にでもちよつとくらい触れておいたほうがいいだろう。このままいつまでも受け身受け身の体勢でいては、契約の名の下に好き勝手されそうで怖いです。

脇道に逸れまくっていた俺の思考は、ようやく焦点となる『隠し事』に向き始めるのだった。

「で、俺もそんな話聞いてねーぞ」

「言ってないもの」

「そっかー」

「そうよ」

話す気あんのかね。この人。

所詮俺の推測に予想と未来知識を重ねた拙い考えだけれども、多分、彼女の計画には俺という存在が多かれ少なかれ関わっているはずだ。どうせ、前に幻想入りの仕組みを作った時のような結界構成の話になるんだろうけど。

あの考えの元に形成される結界って、俺あんまり好きじゃない。

「不満そうね」

「俺の考えてることが合ってるならね。まあ、契約だ。仕方ねー」

「契約だから、か……どうやら烏天狗さんとの間にあるような麗しい友情関係は作れそうになさそうね」

「ああん？ 紫さんだって嫌々やってんじゃねーか。そんな考えに不満なく賛同できるわけねーだろうに」

はっとしたような表情を浮かべた紫さんに、俺は迷うことなく真正面から視線をぶつける。

どうしても、とか。しょうがなく、とか。そんな断腸の想いで成される事实に、軽々しく歓喜の態度を表すことなんて出来るはずもない。外野ではいられない。

俺と紫さんの考えは根本的な所で合致している。口を紡いでそれこそ人形のように従う意味はない。時折、不満気に愚痴をもらすだけでも俺たちは十分だろう。

「ごめんなさいね。どうにも切羽詰まって」

「いいよ、別に」

「それじゃあ、詳しい事だけでも話すわ。実行はまだ先だけど」

「それはいいんだけどさー……」

辛気臭くなりかけた空気をリセット。どうやら話くらいは教えてく

れるようだけれども、正直な話、それよりも今は大事なことがある。何せ、今現在言葉を交わす俺たちは上空1000メートルってところか？

紫さんの真面目な顔を制しながら、俺はなんとか空気の読めないことを言ってしまうのだった。

「下に降りねえ？ もう、疲れちゃって疲れちゃって」

意表を突かれたように呆れる紫さんの視線が痛かった。

## 第9話 「変容」

八雲亭。幻想郷縁起にもその場所が不特定のまま記されるその場所は、その名の如く、幻想郷の守護者たる八雲紫の住むお屋敷である。一説には博麗神社と同じように外界との結界に接する東端にあると言われているが、それを見たものは今のところ指で数える程度といったところ。どちらにせよ隠れ家的な雰囲気のある屋敷だった。

特に見た目が幻想郷の文明から逸脱しているということはない。稗田の屋敷や冥界に存在する白玉楼と比べるには分が悪いが、それでも人里のあばら家などと比べれば、彼女の屋敷は真実豪邸だろう。主たる八雲紫の式神、八雲藍によって管理されることもあってか、絵画の中からそっくりそのまま持ちだしてきたような情緒溢れる景觀が其処にはある。それでも生活感の薄れることのない雰囲気は、確かに八雲紫が心を落ち着ける場所にふさわしい。

そんな屋敷の玄関がガラガラと音を立てながら開かれた。よく管理されている割にはどうにも戸の開きが悪い。それを開けた人物は戸に手を掛けたまましばし思索した。

調達するにしても、作成するにしてももう少しは使えるだろうか。いや、戸の滑りさえ良くすれば問題はない。

存外、裕福そうな景觀の屋敷に似合わず、その人物はやけに庶民的な考えを持っていた。

合わせた手が袖に隠れてしまうほどの割烹着然りといったその衣服は、そんな性格の表れなのかもしれない。紋様の入った藍色の前掛けがなければ、どうにもその見てくれは家政婦にしか見えないだろう。

件の人物、八雲藍は未だ帰らぬ主人の帰りを入り口で待つ。スキマと式のシステムを組み合わせた連絡方法とでも言うべきか。夕食の準備をしていた彼女の頭に響いた声は、これより知り合いを一人連れて帰宅するといった内容の紫からの連絡だった。

主の友人と言われて彼女が連想するのは、冥界の白玉楼に住んでいる西行寺の亡霊姫。出迎えの準備する前に米櫃の中を確認したのは間違いないだろう。あの亡霊は、おかしいくらいに飯を喰う。

続けて紫から送られてきたその友人の正体に、ひと安心といった具合に胸を撫で下ろしたわけだが。

（しかし、何故に今頃彼が……？ 計画でも早まったのか？）

しかし彼は彼で紫によって連れられてくる理由が藍には思いつかなかった。確かにハイイロと紫は別段仲の悪いわけではない間柄だが、夕食に随伴させるほど親密なわけではない。藍が紫から今の名前を与えられた以前より、彼と紫の交友があつたためにその正確な関係を藍は把握しきれていないのが現状だった。

別段、深いことなど何もないのだが。

藍がハイイロに抱く印象とえば、主と契約を式とは違う形で結んでいる赤の他人、というだけである。

そういった点では藍としても微妙な心象が彼にはある。妖怪としても非常に格の高い八雲紫の式として存在することは、一種の誇りでもある。彼女自身九つの尾を持つ妖狐として格も力も高い存在なのだが、それを八雲紫は越える。

言ってしまうえば、大妖怪・八雲紫と九尾の狐・八雲藍は共にその位の高い存在であるというのに、狭間灰色という存在はそれに吊り合

わなといった話なのである。

そこに深すぎる嫉妬や蔑みを覚えるほどに藍は子供でも無く、そして器の小さいヒトガタでもない。だが、疑問には思ってしまうのだ。

紫から藍に贖されたハイイロについての情報は極わずか。彼と契約を結んでいる旨を説明されただけ。彼の種族も、性格も、その価値観も全て藍独自で探し当てたものだ。

そもそも幻想郷のあちこちを徘徊する彼を捕まえるのは、非常に困難だ。それこそ主のようにスキマを使えることが出来れば楽なのだが。

そういった表だけのものしか見ていない藍には、狭間灰色が持つ異常性と危険性に未だ気付いていない節がある。

何故主である紫が彼のことにについて多くを語ろうとしないのかは未だ不明。ひよっとすればいつもの愉快犯然りといった悪ふざけなのかもしれない。藍はそのことについて深く考えようとはしなかった。

暗がりの中、玄関口にぶら下げられた外用の行灯に照らされながら藍はひたすらに主を待つ。といってもスキマを使う事の出来る八雲紫だ。そう長時間待たずとも時期にあの薄気味悪いスキマを介して現れるだろう。

雑事やら結界の修復やらと馬車馬のように働く藍の一日の中で、そうやってただ待つというのはなんとも手持無沙汰な時間だった。実際のところ幻想郷の管理も藍のお陰でどうにかなっている所が多い。彼女の主の使い勝手が荒いと言えはそれまでだが。

今でこそきちんとした生活リズムの上に生きてはいるが、幻想郷の荒事の前では目も回るような勢いで忙殺されるのが彼女の常だった。

故に、どうにもこのように手持無沙汰な時間が続くと彼女にとって

は如何ともし難い居心地の悪さを感じてしまふのだった。視線を虚空に彷徨わせてみたり、玄関口から箒を取りだしては朝に掃除し終わったはずの玄関を掃いてみたり。

じつとしていられない、ではない。真面目な性格の上に主人想いである彼女にとつては、何か自分にできることを模索するのが常となつてしまつていた。

ハイイロもまた八雲亭に訪れる『客人』には違いない。それを持て成すのに無礼があつてはいけなないと考える彼女は、良くも悪くも真面目一辺倒のヒトガタだった。

「すぐ紫さん家の前に転移すりゃいいのによ。どうしてまた」

「概要の末端くらいは道すがらでも十分よ。それに、今なら藍が夕飯を作っている頃だろうしね」

すっかり日も暮れて視界が真つ暗になった森の中を紫さんと並んで進む。彼女はふよふよと宙を浮きながら、俺は草花やら木の根などを飛び越えながら。

よっ、ほっ、などと掛け声が漏れつつも飛び跳ねるように動くのは嫌いじゃない。だけど俺ってば、疲れるからっていう名目で下に降



りたいって提言したはずなんだけどね。

俺が疲れちゃった発言を受けて紫さんが提案したのは彼女の家で話を聞くと言う事。どうにも聞けば藍が夕飯の支度をしている最中らしくご同伴如何とのこと。

彼女の作る晩飯と聞いて無意識に唾を飲み込んだのはここだけの秘密。表側だけとはいえ人間らしい反応に歓喜した。

で、冒頭の会話のようにどうにも面倒くさいことになっていた。んだよー、飯食った後にゆっくり話すればいいだろうがよー。

咎めるような視線を向ければ、返された視線はガキンチョの我儘を聞くような甘ったるいものだった。子供扱いすんなよー……とは、言ったもん負けだな、こりゃ。

どちらにせよ、八雲亭より少しばかり離れた森より散歩しながら目的地へ向かう。道中に話された内容は　まあ、予想通りだった。

2000年前だか3000年前だかに幻想郷を覆った結界は、所詮完全に外界から隔離するほど強いものではなかった。忘却の憂き目にあう様々な幻想たちが効率よく幻想郷に迷い込むためのシステムに過ぎない。それ呼応して陰陽術師やら魔法使いやら人間側の異能者も入り込むことは未だ可能であった。

しかし今回のものはそれとは規模が全く異なる。

そもそもの発端は紫さんが認める文明開化というものに当たる。俺の記憶と今の年代を駆け合わせてみても100年ほど未来の話にすぎないそれを、紫さんは類稀な頭脳と経験を持つてして予測していた。

いや、そもそも日本における文明開化など鎖国によって押し込まれ

た科学への認識が一気に発露した結果に過ぎない。海外の『流れ』をきちんと理解するヒトガタであれば、こんな島国の引きこもりなど時期に瓦解することなど目に見えることだろう。

で、結果、日本は歴史的に類を見ない速度で発展し始める。

俺の中にある記憶を探る。

果たして2000年という節目の年に浮かれる人間達の中に、妖怪やら神様やらそんな話題などあっただろうか。その時期に世間を騒がせた預言者だって所詮ペテンのままに終わったはずだ。魔法使い？ 陰陽術師？ 精霊？ 妖精？

そんなもの、現実にはいたのか？

もし、そんな世界が未来に広がっているというのなら、其処に幻想の居場所は存在しないのだろう。それほどまで人間は幻想を否定するに至る根拠を手に入れる。

それが科学。か弱い人間が手に入れた物理的な力。真実を否定する理念。

八雲紫は決断する。外界と幻想郷の関係を完全に断絶するということを。

我ら幻想を幻想たらしめんとするのなら、真実、その名の如く幻想となってやろう。

『存在しなかった』と我らに突きつけるのであれば、その通りになつてやろう。

故に、お前たち人間がそれを手にすることなどもはや永劫叶わない。

それは開き直りにも近いことなんじゃないかと俺は思う。が、それ

を人間が選び、紫さんが選んだというのなら口を挟む隙なんてありません。

そもそもこの事態に至っちゃ俺だって他にどうしていいもんかわからない。

紫さんの話じゃ力の強い妖怪やら神様などはその強力な結界を通ってこちらに来られるらしいが、外界に残っている弱小妖怪やらの幻想はほぼ見捨てる形になるそう。原理的にその結界を抜けるには力が必要なよう。

それほどの強力なものでなければ外界からの完全隔離など不可能と言う事。どうにも俺にはそんな仕組みなど予想もつかないが。

まあ、彼女の語る計画とはこんなものだ。それ以上に重要なのは。

現実が、幻想を、『存在しない』と定義し始めるという点だ。

おいおいおいおい。そりやないだろう人間達よ。そりやないだろう幻想達よ。

お前らはそのどちらとも現実であり、存在するものであり、俺と対にならねばならん者たちだろう。存在しないだあ？ そんなことを言ったら俺の常に抱く羨望と焦がれはどうしてくれるんだよ。

夢の残滓として零れ落ちて幾年月、常に現実を侵しながら生きていく俺が、どれほどお前たちに焦がれているのか分らないのかよ。存在しない者として生まれたくせに、その内に存在する現実への渴望を抑え続けた俺の立場はどうするんだよ。

とまあ怒り狂うのも一つの手段なんだが、そういった外界の変化も幻想郷の変化も、俺にとっては全て現実だ。

幻想など有り得ないと人間が叫ぶ。好きにしる。俺は知っている。幻想で構わないと幻想が叫ぶ。好きにしる。俺は知っている。

どこで線を引こうが、どこで線が途切れようが、常に俺はお前たちを見ている。

そして、常に俺はお前たちを羨ましく思っている。

故に紫さんが今回起こした計画というものにも、強引な力を持ってして否定しようとかいう気持ちにもならないんだ。そんな力持っていないけど。

ちなみ計画に俺が関係する云々かんぬんは俺の持つ特殊性に起因する。

存在しない者と開き直る幻想郷。元々存在しないという俺。つまりは俺を分解して結界内に強力な概念として組み込むのだとか。

夢のような楽園『幻想郷』。複雑だな、なんとも。

まあそこらの仕組みなんて境界を操る紫さんにしかわかんね だろうし、分解されたって反則的な侵食度で再び現実に現れる俺には無意味な話だ。

結界の関係上、幻想郷から出られないけど。

それが契約。現実へ這い出る契機となった紫さんとの邂逅で交わした、彼女との契約。

「家に着く前に大体は聞き終わっちゃったな」

「まさか。あなたが一番知らなきゃいけないのは結界を形成する過程。結界を張るまでの成り行きなんて知らなくてもいいじゃない」

「まあ、在る意味道具だからな、契約上に関しては」

「そういうこと。あなたはこの閉じられた世界で現実を満喫してく

ればいいの」

まあ、所詮全容を聞いたところで理解出来ないところは多いだろうし、直接関わることも少ないだろう。紫さんの言う通り、結界を張るその時のみが俺に必要な情報なのだろう。

暗闇の森の中を二人で進めば、俺の視界にぼんやりと明りのようなものが見え始めてきていた。

どうやら八雲亭に着いたらしい。徐々にくつきりと見えてくるその屋敷の前には、予想通り紫さんの式である八雲藍の姿が。……ずっと待ってたんだろうか。

「あれ、いいのかよ」

「……ずっと待ってたのかしら」

「ちよつとくらいは優しくしてやってもいいんじゃないか？」

「失敬な。きちんと優しくしてやってるつもりよ」

つもりってというのが一番危ない気もするけれど、別段藍本人が嫌がっているという話も聞かないし、口を挟むことでも無いが。

そうやってぼんやりとしていた視界が玄関口に吊るされた行灯によつてくつきりと見え始めた時、あちらも俺たちに気付いたようで、肅々と頭を下げて歓迎の意を表してくれた。

が、藍の足元には何だか見慣れた奴らの姿が。

「ありや？　なんでお前らが」

「……久しぶりに見たわね。彼ら」

「ようこそ八雲亭へ、灰色殿。お帰りなさいませ、紫様。……どうやら灰色殿が呼びだしたわけではなさそうですね」

「敬語はもういいよ。前みたいに気軽に呼んでくれ。で、お前らはどうして此処に？」

何だか戸惑ったように笑う藍の足元で、利口にお座りをしたまま此方を見据えるのは、俺の身内であるシロとクロだった。

夜ということもあってか、この暗がりで彼らの色は此処まで近づかねば気付かなかった。シロならばどうにかなりそうなのだが、相変わらず彼の体色は汚い。

たまに水場で身体を洗ってやったりしているっていうのに。

彼らは俺の姿を見つけると同時に此方に駆け寄り、俺と紫さんを比べるように眺めては結局俺の足元に寄り添ってきた。何だ今のは。何か意味でもあったのかよ。

まあ、何故に彼らが此処にいるのかは全く分からないが、今日の夕方頃までは狭間に帰る気でいたんだ。二匹に会ったことで俺の鬱気味な心も大分解れていく。わしゃわしゃと身体を弄ってやれば、擦ったそうにシロもクロも身体を擦った。

「……兎に角、中に入りましょうか。藍、夕飯は出来てるかしら？」  
「ぬかりなく。冷えた西瓜も用意してありますよ。おそらく今年最後でしょう」

「おー、そりゃ楽しみだー……って一応聞くけど俺も喰っていいんだよね？」

「客人だからな」

心配そうに聞き返してみれば、藍は困ったように笑いながらそれを認めてくれた。かき氷はあんまり喰えなかったが、西瓜は腹いっぱい食えるらしい。こりゃ僥倖と言わざるを得ないな！

一人テンションを上げていれば、ふと、俺を見上げる二匹の瞳が眼に入った。何だ、お前らも喰いたいってのか。夢だけ食ってりゃいいって言ってたのはどこのどいつだ。

仕方なしにそのまま見下ろした視線を藍に戻せば、彼女は苦笑しな

がらも　　優しくはなかった。

「仲良く分ければいいんじゃないか？」

ちくせう。

縁側にて星の見えぬ夜空を眺めながら、三人並んで西瓜を貪る様はなんだか長閑過ぎて顔が緩んでしまう。もちろん藍が切り分けてくれた西瓜もほどよい甘さで喉を通る。本当だったら種を口から飛ばしてみたい気もあつたけど、人ん家なので止めておいた。着ている服を濡らさないように喰うのも中々に難しいというに。

で、シロとクロはといえば、俺が半分に分けてやった西瓜を我先にと言わんばかりにかぶりついている。もうちつと謙虚になるつもりはねーのかと眉を顰めかけたが、その気持ちから分かんないという理由から怒るのは止めた。うめーもんな。これ。

皮まで喰おうとしたクロが一噛みした後すぐに様喰うのを止めた時はなんだか笑えた。どうやら彼に喰えるものでもなかったらしい。欲張るからそーなる。

「ごちそうさん」

三人揃って布巾で手を拭く。作った農家と出してくれた藍に感謝感謝。

そういえば藍とか食材の買い出しってどこでやってんだろうか。最近是人里に妖怪が入り込むことも微妙にスルーされ始めてるけど、彼女の場合はあのもふもふの尻尾が目立つだろに。ひよっとすれば人間に化けているのかもしれない。狐だし。

というかクロとシロの事を話の流れ的に後回しにしちまったけど、あいつらなんで此処にいるんだろうか。また俺の行動でも読んでるのかね？

ま、結界云々に俺が関係している話だ。こいつらがそれを予想して此処に来たっていうのもあながち否定できそうもない。

「なあ、藍よ。こいつらって何時此処に来たのさ」

「ん？ 紫様から連絡を貰ってすぐくらいだったかな。屋敷前の草むらを掻き分けながら現れたよ。……ああ、別に侵入者だとは思っていなかったから安心してくれ」

「彼ら、妖気だとか敵意だとか、そういった気配を感じさせるものなんて何一つないものね。……ホントに信仰を受ける獣なのかしら？」

「……まあ、神だか獣だかはつきりしねーしな」

俺たちの話を聞いたのか、クロとシロは此方に顔を向けてぶるりと身体を震わせた。そうして縁側に座る俺たちの目の前にある庭先にごろんと転がり始めやがった。

喰っては寝る。実際俺とその生活は変わらんのだが……呑気なこと。



まあ、腹ごしらえもさせてもらってゆつくりしたいところは山々だが、まさか宿まで期待するわけにもいかん。さらに言えば俺は今日、狭間に帰りたいんだ。

紫さんの言う、結界についての本題をさっさと聞いてお暇したいところだ。

「で、本題と行きたいところなんだが」

「本題？」

「あれ？ 紫さんつては藍に伝えてねーの？」

「そういえば忘れてたわね。新しい結界の話よ。別にいますぐ動くとかそういう話ではないわ」

俺の唐突な言葉に藍さんは首を傾げて疑問を向けてきた。どうやら紫さんはまだ彼女に話していなかったらしいが、まあ、いちいち通達しておく話題でもあるまい。

紫さんのお茶を啜る態度に藍もただ、そうですかと答えるだけだった。

そういえば西瓜喰った後に茶ってどうなんだろうな。水分の過剰摂取で腹が痛くなりそうだ。

「まあ、でも正直な話、前の結界創った時と対して変わらないと思ってるんだけど」

「そうでもないわ。今回は博麗神社を起点に結界符術やら境界操作やら、そういった技術の集大成になるんだし。前みたいにあなたを一気に侵食させるわけにもいかないし。徐々に侵食させるわ」

「つまり？」

「結界を創る時が近づいたら、一時的に博麗神社に封印するから」

おお………なんという拷問。俺を現世から一時的とはいえ切り離す気

かよ。

そりやないぜ紫さん、なんて言おうとしても彼女の視線は有無を言わさず、なんていう鋭いもの。そりや、まあ、どうせ20年弱くらいだろうから問題ねーけどよ。

ていうか博麗神社って、元々他の誰かが封じられてなかったっけ？

「そもそもあなたの能力、というよりはあなた自身がこの幻想郷にも危なっかしい存在なのは重々承知してるでしょう？ 大抵の……ヒトガタだっけ？ そのヒトガタが聞けば嫌悪すると思うわよ？」

「大抵の異能っていうのは本人の気質とは合致しないってね。俺自身とて認めたくないってのに、それをしなければ俺は西瓜を喰う事さえできやしない。やなもんだ」

やれやれと首を振れば、紫さんは瞳を閉じ、藍は困ったように俺と紫さんを見比べた。あれ、藍って俺の能力を知ってるだけだったっけか？ どちらにせよ、『俺のアホさ加減』はまだ知らないらしい。そういえば幻想郷縁起に書かれてるやつもほとんどの嘘みたいなもんだ。

たぶん知ったら 顔を顰めるだろうなあ。

まあ、知れば知ったでしょうがない。嫌われようがどうしようがこの考えと、生き方だけは変えられそうにもないんだから。

「まあ、別に逆らおうとは思わんさ。で？ 何時頃封印されればいいわけ？」

「これから100年前後。詳しい日にちなんて決められるものではないけれど、私が判断したら、ということになるのかしらね」

「横暴な」

「我慢なさい。歴史の転換期とも言える流れをはっきり予測出来るなんて私にも不可能だわ。あなたみたいな例外でない限り」

一応非難してみても紫さんの言い分に突っつけるところがないために閉口せざるを得ない。

そりゃ未来の知識のある程度が記憶にあるもんな、俺。ひょっとしたら俺が知識をひけらかしたりして歴史の流れを操作することも出来たのだろうか？

とんでもなくつまらない気がして、そんな妄想は遠くに放り投げた。吐き気がするほどのつまらなさだ。

「ていうか結界構成する時って紫さんも藍も博麗の巫女も手一杯ってことじゃねーの？ 外に対する対策はいいとして中身で何かおかしいことがあったらどーすんのさ」

「藍？」

「ぬかりはありません。きちんとあの方に話を通しておきました。報酬として大量の酒樽が消費しましたが」

「……必要経費ってことにしておくわ」

どうやら問題はなさそうだが、藍の申し訳なさそう顔を伏せる所を見る限り、どうにも紫さんにとっても手痛い出費だったらしい。

というか酒樽ぐらいでそんな顔を顰めて無くてもいいーだろーによ、紫さん。

つか、誰？ その『あの方』って？ もしかして。

「萃香？」

「あら、予想できたかしらね。抑止力としては申し分ないと思うけど」

「気まぐれすぎねえか？」

「でも、約束を反故にするような子じゃないわ」

俺の頭の中にポンと浮き出た予想は、意外にも当たっていたらしい。

ということは必要経費つてのはあいつを幻想郷に引っ張り込むためのものだったってわけか。

あいつ、今は地獄か天界に引っ込んでんのか？　なんと面倒くさい奴だ。

しかし紫さんの約束云々は信用できるだろう。何せあいつは、鬼だしな。

種族がこうだからこう！　なんて言いまわし好きじゃねーけど。

「兎に角、あなたが心配することなんて特にないの。文句言わずに幻想郷守護のための礎となりなさい」

「横暴だ。なあ、藍」

「光栄に思うことだな。灰色」

俺のジト目に構うことなく笑みを浮かべる二人を見て、なんとなく思う。

この決断とて腸が煮えくりかえるようなものだろうに、と。

人間が未来へ歩む度に、その道すがら捨ててきたモノの一部に、今、彼女ら幻想が加わりうとしている。

歪な形に変わりながらも、楽園を彼女らは守ろうとしている。

歪な形を保ちながらも、幻想郷は消えゆくことなく普通の日常を受け入れ続けている。

ならば、それを見守り、あわよくばその一端を担おうとするのも悪くはない。

たとえ、俺がこの厄介な事態に、心の底から歓喜を覚えているとしても。

## 第10話 「デシャバリーノ」(前書き)

読むにあたっての諸注意。

今回、主人公の狭間灰色が、調子こきます。

十分にご自分の精神状態を加味した上でご覧下さい。ちなみに作者は書いている途中で、二度ほど主人公を蹴り飛ばしました。

## 第10話 「デシャバリーノ」

はてさて、幻想郷が真実誰にも知られぬ秘境となることが決定した今日この頃。完全に外界から隔離される影響がどれほどこの世界に与えるのかは未だ不明だが、神算鬼謀を誇る紫さんのことだ。通常の生物が考えられる方法の中で最も効率のよい形を以って幻想郷を平和の楽園と変えていくのだろう。

いやはや、たかが妖怪の一匹が一つの世界を変化させ、管理し、そして存続させるというのは真に傲慢な話だ。しかし彼女にはその力と資格と覚悟がある。

境界を操る、なんて一つの存在には大それた能力など持たずにいれば、能天気なままに生きていけることもできたのだろうに。

そんな変容の時が迫る、大体にして文明開化の日まで後100年ほどといった時期。俺は封印されるという事実には少々不安と嫌悪を抱きながら、いつも通りに様々なヒトガタに話を聞いて回っていた。まるで「これから死ぬんで最後に話をしようぜ」みたいなノリではある。

紫さんの話では20年前後の期間を博麗神社の奥で過すという話だっけか。いやあ、そりゃ暇になるだろうなあ、おい。

悪いが俺は20年という期間を無為に過ごすようなことは許容できない。

よくある話なんだが、1000年生きたヒトガタや不老不死になったヒトガタは何故にああも世間に対して斜に構えるようになるんだろうかね？

長生きすると暇になる。傍観することを好み始める。ありとあらゆる物事を無駄と切り捨てる。

全く……長生きすることの何が偉いのやら。

たかが千や万や億を生きただけでこの世の真理が全て明らかになる  
とも思ってたのかね？ 彼ら彼女らは。

小さい命を激しく燃やすその有様を無様と断じ、儚き夢に縋る様を  
愚かと言う。たかが1000年の時を経たくらいで、この世の真理  
を知ったかぶる。

いやあ、やだねえ、やだねえ。生きるのに飽いたってことかね？

何故にこんなに他者をこき下ろしているかと言えば、そんなつまら  
ないものに捉われて生きることを放棄した輩とこれから会うからで  
ある。

あのちびっ子もそれさえなければ気持ちのいい奴なんだけどなあ……  
…ヒトガタの生における多くの事象を好む俺にとっては、ただ死ん  
でないだけで生きていない輩はどうにも好めない。

例えば 人間を見捨てたとか言って日々飲んだくれる鬼とか。

好きじゃない、などとは言ってみても実のところ鬼の生き方は嫌いじゃない。というか俺が嫌いな生き方なんて正直な話一つもない。何せどのような生き方をしたところで、その全てが俺の興味の対象だ。

そんな生き方とかしてどう思ってるの？

傍から見ればこの上なくウザったらしい問いではあるが、残念ながら撤回はしない。

散々こき下ろしたものの、これから久しぶりに会う伊吹萃香には好意を抱いている。何せ人間に対する愚痴さえなければ一本気のある気持ちのいい奴である。あいつと飲む酒は確かに美味い。まあ、気を付けないと俺の身体を構成する成分の90%以上が酒になってしまうのは危険だが。

ということで、彼女と会うのならまずは酒を用意せねばなるまい。酒、酒、酒。萃香じゃなくてもこの幻想郷に住まうヒトガタたちは非常に酒を好む。故に幻想郷は酒に関する製造技術が半端ねえ。

1000年続く秘伝の酒だとか、100年は寝かした秘蔵の酒だとか、それこそ飲むのが勿体ないくらいに高級な地酒が跋扈しているのだ。

まあ、値段もたっけーけど。

そんなこんなで俺が今居るのは人里の酒屋さん。

入口にでっかい樽があったり、その奥には酒が入られているのだろつ風情ある陶器が並ぶ。中には『鬼』と大きく書かれた酒器が飾られてあつたりと中々に大胆不敵な店である。

店主の名は鍋島さん。酒屋なのに鍋とは如何に。まあ、鍋と酒は合っやね。



「度が高いのつてやつぱ泡盛とか焼酎？」

「いやいや狭間の旦那、度が高いだけが酒の価値じゃありませんぜ。味も確かに大事ではございますが、風流や風情を活かした酒宴もまた魅力でさあ」

「そんじや酒を脇役にしちまっていいのかね」

「大立ち回りを気取る傾奇者にも月夜の晩に栄える姫君にもなれるのが酒の魅力つてね。酒の飲む相手が誰で、何処で、そしてその酒宴に旦那がどんな意味を込めたいのか。それさえ教えてくれりゃあ、あつしが一番の酒を用意しましょうぜ」

ほほう、何だかその気取った様に鼻を鳴らす様は店主に全く似合わないが、それはそれで非常に頼もしい。そういえばこんな風に記念的な意味で酒を用意するなんてなかったかもしれんからなあ。これは張り切らねばならんね。

「で、どちら様と一献を傾けるんで？」

「鬼っ子」

「……旦那あ、せめて人間にしてくださいよお」

「幻想郷一の酒造りを謳うんなら、どんなヒトガタにも合う酒を選べて当然じゃねーの？ うらうら、いい酒を紹介してくれよ」

酒の造り手としてはひよろつとして情けない体格をしている鍋島の親父が、目に見えて肩を落としたまま意気消沈してしまった。

彼が代々から伝わるこの酒屋と技術を受け継いでから約10年弱。まだまだ先代の気概を持つのはまだまだらしい。

そういえばこの男、既に30を越えて嫁の噂が一つもないようなのだが、後継ぎは大丈夫なのだろうか。代々此処で売られている安いどぶろくを俺は好んで飲むのだが、それがなくなっちまったとすりゃあ、そりゃ悲しい。

此処でその技術と歴史を潰えさせてしまふのは勿体ない話だ。

「……長年離れた友との再会ってところですか。だったら話を肴にするんじゃないくて、酒を肴にしてください。酒が二人の間を邪魔するようじゃ居たたまれねえ」

「なんだか生き別れた夫婦みてーな言い方だな」

「旦那なら鬼を娶っても驚きやしませんがね。おっと、この話は内緒ということで」

「分かったからさっさと選んでくれつつーの」

にへへと人懐こいような汚らしいような笑みを浮かべて店の奥に消えていった店主の後ろ姿をしばし眺める。しかし脳裏浮かぶのは懐かしい萃香の顔。

果たしてあいつは地獄に引き籠る前と変わらぬ生を過ごしているのだろうか。空白の300、400年の間に何をしていたのだろうか。

そこで俺はふと気付く。酒樽一個じゃあ、それを語るにはあまりに少な過ぎる。

俺は質素な財布の中身をちらりと見ながら、酒は萃香の瓢箪から貰おうかと決心した。

いやはや、酒の全てを俺が負担しちゃあいくら銭があっても足りないぞ。

一時間かけて買った酒瓶を右手にぶら下げたまま人里を出る。これより待ちに待った萃香との酒盛りが行われるだけだが、実のところそれが行われる場所も日時も指定してはいないし、それについて彼女に連絡した覚えもない。

そりゃそうだ。だって萃香と酒が飲みたいなんて思ったのは今日の朝方の話だもの。

紫さんから幻想郷に萃香が帰ってくる旨は聞いただけであり、その詳細を知っているわけでは勿論ない。

しかし久々に彼女に会えると思った俺は、居ても経ってもいられず宴の準備に取り掛かり始めてしまったのだ。

いやあ、この愚行には反省も後悔もないがね。

どっちにしてもこれから萃香のことを探さねばならないということだ。

彼女の行き先の当てがあるのは萃香を呼び出した紫さんが、それとも昔の癖だった妖怪の山のどちらかといったところ。

元々妖怪の山を支配していた鬼たちが幻想郷から消え、その支配権が天狗に移ったのが妖怪の山の現状である。

文から話を聞いてみてもいいのかもしれないが、もしも今、萃香が妖怪の山に帰っているというのなら、天狗たちは彼女の持て成しで忙しいのかもしれない。

そもそも捨て去った元の癖に萃香がこのこと顔出すのだろうか。なんとも面倒くさい奴らだ。

そこでふと思い出す。

そういえば彼女の能力は『疎と密を操る』だったかな？ 自分の身体や物質の密度を自由に変えるだなんてさすが戦闘種族の鬼らしい反則気味な能力。

その力を利用して自分の密度を霧状にまで薄めさせ、幻想郷中に散らばっているという話をどこかで聞いたような。

ということは、だ。

「萃香ー。す、い、かー」

人里から原っぱでどこに向かって叫ぶでもなく、空に吠えてみる。さすがに紫さんみたいに呼ばれて飛び出てゝなんてさすがにないかと思っていた手前、俺の前に突然靄のようなものが！

……いやはや、なんとも便利なことで羨ましい限りだよ。

徐々に人の輪郭を作りながらヒトガタの色を濃くしていく極小の粒子。栗色の長い髪、そこから生えた雄々しい二本の角、じゃらじゃらと慣らしながら引きずられる両手両足に繋がれた鎖。

そして何よりも俺の鼻を刺激する濃い酒の匂い。音一つなかったはずの野原に、チャポンと水の跳ねる音が響いた。

「誰が誰を娶るって？」

「なんだよ、最初から見てたんじゃん」

「ぬふふー。私が恋しくて仕方がなかったらしいねー」

「おー、恋しくて仕方がなかったぞー」

「………… ホント、張り合いがないね、灰色」

「いつも通り酒臭くて安心したぞ、萃香」

小さな百鬼夜行。伊吹萃香の姿がそこにあった。

しかし変わらない。幻想郷という世界に根を下ろし、様々なヒトガタを見ていると常々そういつた時の流れを感じられない無常感に苛まれる。

が、それと同時に幾年月過ぎようと変わらないモノがあるという事実<sup>が</sup>に歡喜する。相反、矛盾。しかしどちらの感情も俺のもの。

目の前で一口、持っていた瓢箪に口を付ける彼女の容姿も雰囲気も全く変わらない。幼げな貌の中に光る双眸は常に達観した鈍い光を燈し、酒の匂いを撒き散らしてはただ笑う。

こんな見た目童女の輩がかつて山の四天王の一人であつた鬼であるから侮れない。

まあ、一種の詐欺のような気もするけど。

「久しぶり」

「久しぶり」

何故に久しぶりに会う人物を前にすると、口にしたい言葉さえ飲み込んでしまうのだろうか。多分、あまりにも投げかけたい言葉が多過ぎて迷ってしまうのだと俺は思う。あとは一種の羞恥心のような

ものだろうか。

別に萃香とは喧嘩別れをしてきたわけではないというのに。  
そんなことを黙って考えてみれば、あちらも同じように恥ずかしそうにして頭を掻いた。

「帰ってきちゃった」

「いいんじゃないの？　むしろ俺は嬉しいぞー」

「うん、有難う」

曇りなき心のままに口に出した言葉は、やっぱり歓喜だった。

狭間灰色という男と伊吹萃香という女が会ったにしては、やけに双方の距離感は微妙なままだ。俺たちが出会ったのならば、余計なこととは考えずに酒を飲むのが一番であるというのに。

彼女と話をすることに我慢できなくなった俺は、ひとまず持つていた酒瓶を揺らして彼女を誘う。自然と笑みが浮かんでしまう自分が気持ち悪い。

「飲もうぜ。話したいことも聞きたいこともたくさんある」

「……ホント、変わんないね……」

「それを確かめるためにも、さあ話そう、さあ飲もう」

「ふふっ……その酒にも期待してるからね」

二カッと満面の笑みを浮かべる萃香がやけに眩しく見えた。

へるぷみー、と言わせてもらおうか。

既に陽がとつぷりと沈んでしまった夜の幻想郷。そんな漆黒の闇が広がる野原の一角で、萃香が術みたいなもので作り上げてくれた焚火を囲む俺と萃香。

そしてその周辺に生え渡る草花すら腐食させてしまふんじゃないかってくらいに漂う酒の香り。酒瓶も酒樽も転がっていないというのに、そこらに漂う匂いの密度は嗅いだだけで酔っ払うんじゃないかってくらいにきつい。

そりやそうだ。鬼とサシで飲むってんだからなあ。

しかも今回の酒宴は久々にあった俺と萃香のためのもの。それだけのもの。そうなれば互いが求める酒は増えるばかり。

話す。飲む。話す。飲む。話す。飲む。

そうやって時が過ぎていくのを忘れるほど浴びるように飲めば、俺たちはどうしようもないくらいにべろんべろんになっていた。

いや、ちよつとは狭間灰色を調整して気を失う一步手前にしてるけどさ。それでも頭が振りまわされるように揺らぐ視界は酔っ払いのそれと同じ。もう一段階薄めてみようかなんて思ってしまう。

「ひえっひえっひえっ……んだめだぞう、酔いを薄めちゃだめえ」

「いや、でも、お前、きつついてこれ……お前も似たようなもんだろ」

萃香の口がどんな風に回っているのかは既にはつきと見えないが、それでも酷い有様になっているのは声と言葉からもよく分かる。俺なんて喋ることすら億劫だっているのに。

しかしこれほどの酔いが回るまでに交わした言葉は数えきれないほど多かった。

手で数えることも出来ないほどの話題が廻りに廻り、相応の口から吐かれる言葉は喜怒哀楽の全てを宿して虚空に消える。

だがその全てを俺は宝箱の中に収めるようにして記憶した。

地獄の有様が変わるにつれて激化する亡霊と鬼の闘争。現世との一切を断ち切る故に集まってくる『忌避された妖怪たち』。そして微妙な安寧と凄惨な有様によって歪んだ樂園は作り上げられた。

およそ300年の生を凝縮した萃香の言葉は、俺にとっては最大の美酒であった。

俺も地獄にいつてみようか。忌避された妖怪にも会ってみようか。勇儀の奴は元気だろうか。元地獄っていうからには、やっぱり苦痛やら絶望やらが渦巻いていたりするんだろうか。

尽きぬ興味は疑問と期待に変わり、そして欲望に戻っていく。

貪欲だ。どこまでも貪欲に俺は望む。

といってもやっぱりそういった特別なことでは俺の腹は膨れない。忌避された、などとうしようもないほどに苦境な立場において何を感じた？

地獄のようなものを見て、お前たちは何を思う？

幻想郷以上に閉ざされた地でその胸に何を宿した？



ああ 聞いてみたい。

呂律の回らない萃香の声は既に遠く。俺の心は既に遙か遠い地底へと向いていた。

すまない、萃香。もうちょつとしたら俺のどうしようもない思考も終わりを告げるから。こういうのは一種の発作のようなものだ。そういえばこの発作を竹林の奥に住む医者には『不治の病』と称していたな。

嬉しい限りだ。何かに興味を抱く度にこの高揚感が得られるというのなら。

「聞けつてばあゝ、うおおおい……聞いてるう？」

「エイゴワカリマセーン。もうちょつと落ち着いたら喋れー。萃香だったらずくに酔いを覚ますこともできんべや」

「お酒飲んでるのにい？」

「いやはや鍋島のおっさんも上手く言ったもんだね。肴は酒。酔っ払って言葉も交わせないんじゃないあつまらんよ」

俺の言葉に寝転がったままじたばたと駄々を捏ねていた萃香は、一度頬を膨らますとやれやれと言った感じに瞳を閉じた。

寝るんか、とも思ったがどうやら周りの酒気の類が少しだけ薄まったように、萃香が能力を遣ってちょつとだけ酔いを醒ましたらしい。やつぱは便利。

その作業が完了したのかお徐にむくりと上半身を起き上らせた彼女は、此方を見るなりにへら、と赤みを帯びた頬を吊り上げながら笑った。

なんぞ。気持ち悪いな。

「変わんなくてよかった」

「ああん？ 何、人間といつもいるから俺も卑怯な奴に変わってん  
じゃねーかとかそういう話？」

「うぐ……」

「おめー、潔癖すぎんだろ」

半眼なまま黙ってしまった萃香にやれやれとため息を吐く。なんで  
こいつらはこんなに人間嫌いになっちまったんかねー……アンビバ  
レンツとか言う奴か？

ああ、いや、こいつらが嫌ってんのは人間じゃなく、嘘そのものか。

「だって、それが原因で地底に潜ったようなもんだし……」

「まあ、たった一つの種族が一つの知恵を得ただけでそんなんなっ  
ちまうってのは、それほど愛してたってことだからなんとも言えね  
ーけどよ」

「うん……そうだね、愛してた。人間、好きだもん」

「今は？」

ちいーつとばかり意地悪な問いだったろうか。俺の言葉に萃香は口  
を紡いだまま俯いてしまった。こいつちよつと酔いが醒めすぎなん  
じゃねーのかって思ったのはここだけの話。この鬼っ子って酔って  
ないとただの童女だからな。

しかし、まあ、相変わらず卑屈なことで困ったもんだ。

嘘は悪。はっきり言ってこんな論議に時間を費やすつもりなど俺は  
ない。

そもそも善悪の判断なんか基本的に解釈するヒトガタによって様々  
だ。自分の信じる定義で生きていけばそれでいい。

そして鬼たちは嘘を卑怯な、嫌悪すべき事象として判断し、それに

埋もれた人間を捨てた。

ここまではいい。

これに関する言い分なんて人間にも鬼にもあるだろうし、それに至った理由には当事者にしか分からぬ何かがあるのだろう。故に俺が口を出すべき言葉は何もなし。

ならば何が『ダメ』かって言うところ。

こいつら事あるごとに、それを後悔してるんだもん。いや、囚われていると言った方がいいのかもしれない。

だってお前ら嘘はダメだった決めたんだろ？ 嘘は嫌いだって感じてしまったんだろ？ そしてそれが我慢できなくて人間を捨て去ったんだろ？

だったら事あるごとにあの時はよかったとか、人間はここが駄目だとかって言うって未練タラタラなのはどういうことなのよ。

人間を捨て去る。それは前へ進むための決断だったんじゃないの？ 鬼が鬼らしくあるために、人間を捨て去ったんじゃないの？

悪いか、良いか。正しいか、間違っているか。そんな理屈じゃあ、ない。

「お前、相変わらず格好悪いのな」

「……………懐かしいね。酒に酔いながらだをまく私たち鬼に、アంతはおくびもなくそうやって詰った」

「いやあ、だってすっぱー格好悪かったもん。やれ昔はよかったーだの、今はダメだーだの」

「はははは……………私たちは何を余所者が！ って怒ったもんだよ」

臆面なく放った言葉に、萃香は懐かしそうにして瓢箪の酒を喉に流し込んだ。

彼女の言った通り、俺はただ単純に彼女らのことを『格好悪い』と思っただのだ。

事あるごとに過去に縋り、今を貶め、自分たちが捨てたモノにさらにクソをぶちまける。これを格好悪いと言わずになんと言う。

我らは真っ向から闘争を誇りとし、その果ての心意気に敬意を抱き、そして酒によって全てを流す、『粹』に生きる者。

いつだったか、鬼の中でも随分と偉い立場にあるような奴がそんなことを言っていた。

人は変わったと鬼は言う。

ならば鬼はどうなんだろうね。

「なあ、灰色」

「うん？」

「やっぱ私は人間が好きだよ。でも、人間は嫌いなんだ」

「いいんじゃないの？ 嫌いって言いながらチラ見するから格好悪いんだよ。迷って、答えを探して、落胆してみたり、喜んでみたり……暇だろ？ お前ら」

迷い、軟弱、虚構。

一つ俺から言える彼女の短所と言えば、誇りに忠実すぎるんだと思う。

刹那的に生きてるんじゃないかってくらいに鬼は『誇りに生きることを誇り』にしている。

まあ、それも面白いんだけどね。

そうやって今の引きこもった鬼が出来ちゃったって言うんなら……

まあ、違う形もあつていいんじゃないかとは思つ。

「人間とまた拳を合わせる日が来るんだろうか」

「探さなきゃ見つかんねーだろーな。探さなきゃ」

「こつちから挑もうつて気概のある奴はいないの？」

「気概があるつてことが鬼と戦うことでしか証明できないつてんなら、挑みにくるやつもいるんじゃない？」

空になった杯を萃香の目の前に出せば、彼女は少々乱暴にその伊吹瓢の中身を注いでくれた。

ごくり、と飲み干せば、焼けるような痛みと爽快感を伴いながら流れていく酒。少しだけ目の前が歪んだ気がするが、別に構うことなんてあるものか。

「一つ、忠言というか出しゃばらせてもらえるというのなら」

「……話して」

「俺はな、種族で見るとのがあんまり好きじゃない。いや、話を円滑に進めるにはそういった認識が必要なのはそうだけどさ。人間はどーだの鬼はどーだのと。そんなもんで判断してちゃあ、俺にとつては鬼も人間も全部同じヒトガタだ」

「……………」

「だから俺は話を聞くんだ。名前。人生。双つ無き心。それが全くと同じに被る奴なんて存在しない。そうやって生きていけば、俺はこの世の全てが例外によつて解釈出来ることに気がついた」

「例外？」

「人は嘘を吐く。ああ、そうとも。それが当たり前として世間では流れているだろう。しかしその一人一人が吐く嘘は内容も、背景も、そしてそれに込めた意思もまるで違う」

「当たり前じゃん。何を言ってるのさ」

「しかしその当たり前前を無視してヒトガタは枠に当て嵌める。そう

だ、俺は枠に当て嵌めただけでは我慢ならない」

「……………」

「だから萃香。もうちょっとみみっちく生きてみたらどうよ。人の在り方を細かく理解することをしてもいいとは思っけどね。嘘を吐いた。ただそれだけ捨て去るのは少々もったいないぞ」

少々長く喋り過ぎただろうか。

どちらにせよ言いたいことが伝わってくるといいのだが…………いや、こんな馬鹿げた話では通らないか。

ムフー、と鼻から息を吐いてみれば、胡散臭いものを見るような目で萃香が此方を見ていた。

「どした？」

「狂人」

「……………傷つくなあ」

「そんな生き方アンタにしか出来ないよ。神でも、出来やしない」

大げさな。こんな生き方ちょっと時間があれば誰でも出来るんじゃないの？

人と触れあう時にどうしても生じるだろう『お前もやはり周りと同じなのか』みたいな考えをちょっとだけ我慢すれば、普通に出来る生き方だと思っけど。

「まあ、久しぶりに地上に出てきたんだ。ゆっくり生きてみるってのには賛成だよ」

「それがいいとも。そのうち鬼をぎったぎたにする超絶人間とかも生まれるんじゃない？」

「ふふふ……………そうだといいね」

果たしてジョークのつもりだったんだが、もしかして本気にしてた

りしてるんだろうか。

もしかすれば今のジョークも嘘とか言われちゃうんだろうか。

何にしてもどこか疲れたようにして酒を飲む萃香の横顔は、さっきよりも酔いのせいで赤らんでいるようにも見えた。

## 第11話 「ある日、森の中、近さんに、出会った」

バクという生物の生態なんぞ俺が知っているわけでもないが、シロとクロという生物についての知識なら幾らか俺は持ち得ている。

そりゃ100年も1000年も一緒に生きてりゃ、あいつらのことなんて隅から隅まで知っているに決まっているんだが、クロとシロもまた変容を嗜むヒトガタのようなもの。

例えを出すとするならば、あいつらと出会った当初は夢だけ食ってりゃいいと言っていたのに、今となっちゃ現世に這い出てみては果物やら野菜やらを貪っていたりすることか。

バクという括りで彼らを測ろうとしたところで、彼らもまた日々変化を伴いながら生きている。まるで生物学者の如く彼らの生態を調査したところで一体そんなもの何の意味があるのやら。

もしもなんらかの書物にバクは草食動物だとか記したとしても、その次の日には彼らは俺と一緒に肉鍋でも突っついているのだろう。

というかそもそもあいつらはバクではなくて獾だったか。

俺の目の前に鬱蒼と茂る草々の群れ。それを掻き分けて行く二匹の獾の後をついていきながら俺はそんなことを考えていた。

曰く散歩の道中という話ではあるのだが、彼らと行く散歩というのは一般的なそこらの整備された道をのんびり歩くようなものではない。

俺の腰くらいにまで伸びた雑草の群れを掻き分けて行くその様は、まるで財宝を探す冒険者と言った所か。それとも戦に負けて落ちぶ



れる落ち武者と言った所か？

どちらにしてもあいつらがこのような獣道だか何だか知らない道なき道に行くものだから仕方がない。

散歩と言っても俺が彼らを連れていくのではない。

彼が俺を連れて行くのだ。

一体何の意味があってこんな歩きにくい道を行くというのだろうか。陽の光が遮られて薄暗い森の中では、彼らの小汚い身体は今にも視界から消えてしまいそうだ。全くもって面倒くさい。

ある種、探検隊のような気もして心躍る時もあると言えはあるのだが、さすがに脛やら足の甲やらを草木とのすれ違いで傷だらけにしては、俺も眉を顰めざるを得ない。

案外いてーんだぞ、地味に。

などとジト目を彼らに向けたところで、彼らはわっさわっさと先を行くばかり。

散歩は一種のストレス解消だとかいう話をどっかで聞いたこともあったが、本当にこんな散歩ですつきりしてんのかね、あいつら。

あ、散歩云々は犬の話だったっけか？ いまいち分からん。

「おーい……何処行っただんだ？」

などとしていればそれ見たことが。もうあいつらの姿を見失ってしまった。

あーもーこのまま無縁塚に帰ってやろうか。とか思っただけであいつらも俺もその気になればすぐに狭間に帰ることもできるんだった。まあ、結界が揺らぐから紫さんに半殺しにされるけども。あ、いや、結界直すのは藍か。

半ばうつんざりしながらもぼつぼつとそこらに生え渡る草木を掻き分けながら彼らの姿を探す。日中だと言うのにまるで夕暮れ時のような暗さの森はいささか恐怖を生み出してしまいそんな光景ではあるが、いかんせん俺にはそういった感情を抱くにはちと温い。

そりゃあおつかない閻魔様やら大妖怪と会ってんだもんなあ。そう簡単にはヘタレないぜ、俺。

「ほあっ!？」

と、言いながらふと後ろで草が妙な音を立てて揺れれば、俺は素っ頓狂な声を出しながら構えてしまった。

んだよ、キツネとか兎でも通ったのかね？

まるでどっかの戦隊ものにでもありそうな間抜けなポーズを取ってしまったのだが、これは違うぞ。恐怖とかじゃなくてただ単に驚いただけだかな。

ホツとして胸を撫で下ろすよりも、言い訳がましい自分の心に嫌気が刺し掛けた時に、再び草が揺れる音が！ もうわざとらしいくらいに、ガサツと。

今度は別に驚きやしないぜ、俺。

……………何やってるんだ、俺。

なんだかくだらない芸をやっているような気だるさに肩を下ろせば、俺の視線は自然とその音が鳴った方を向いていて、そして俺の足もまたその方向へ向いていた。

何か動物と言うにはちとわざとらしい気がするし、何より獣の気配じゃあない気がする。

ということは、ヒトガタかね？

確かに魔法の森や迷いの竹林といった名のある森ではないためか、普通のヒトガタが入り込むには別段問題もない地域ではあるが、なんといても此処は幻想郷。

深い森の中に蠢くと言えば妖怪とかそんなイメージされるには容易いだろう。そもそもキノコ狩りとか野草狩りにしてはまだ時期じゃない。

ということは、妖怪かね？

徐々に形を為していく俺の推理。

いや、おそらくは隠れているだろうそのヒトガタを前にすればそんな推論など無用の長物と化すのだが、何だかかくれんぼをしているような気がしてちょっとだけ楽しい。

これでも幻想郷では名の知られている身。全身灰色の衣装というそれなりに目立つ格好をしているというのに、俺を前にして隠れるとは一体どんなヒトガタだろうか。

ということは、怖がりの妖怪かね？

にへへーと変態っぽい笑みを浮かべながらずんずん草を掻き分けて行く。

先ほどまで音を鳴らしていたヒトガタの気配は既に動いておらず、どうやら俺との邂逅をやり過ごすことに決めたようで、そのままその場から動かない。

もしも実際にその姿を見れば、身体を蹲らせながらガタガタと震えているのかもしれない。

ああー、成程ー、妖怪が人間を狩る時ってこんな気持ちなのねー。などと軽い喜びを抱きながらその隠れるヒトガタの場所へ赴く。溢れる高揚感とも満たされる嗜虐心とも言えぬものを感じたのだが、

残念。俺は3日くらいで飽きそうだ。

「みーっけ！」

「え？ ……うわっ！」

そしてとうとう見つけたかくれんぼの相手に、俺は満面の笑みで宣言してやった。

俺の予想通りに木の根元蹲るヒトガタの姿。俺の声を聞くなり腰を抜かしたようにこちらを凝視する金色の瞳。どこかの民族が羽織っているような青い衣服と優男風な端麗な顔つきをしばしば隠そうとして揺れる銀色の髪。

そしてそんな彼の横に置かれた旅人然りといった大荷物。

おおっ、なんだか良く分かんないが男だ。

俺を姿に恐怖を抱いている瞳は相も変わらず震えているが、どうにも戦いや悪戯を好むために俺に近づいた悪妖というわけはないらしい。まあ、別にそっちでもよかったけど。

まあ、目的がなんであれ、俺と彼はようやく互いの姿を確認できたわけだ。

しかもこの男、始めてみる顔じゃないか。

名前を聞かせる。此処にいる目的を聞かせる。さあ、話を聞かせる。

「やあやあ、俺の名前は狭間灰色だ。こんな辺鄙な世界のこんな辺鄙な森の中で会うなんて奇遇としか言いようがない。いや、むしろこれは奇跡だと思いたいね。さあ、教えてくれ、君の名前を！」

「……………」

ありったけのセンスを捻り出して選んだ言葉だと言うのに、目の前の彼が浮かべた瞳には既に恐怖なんてなかった。

あるのはただ、胡散臭えー……という侮蔑のような色の瞳だけ。  
畜生。お前らは馬鹿だ。

「ま、そういう目で見んなよ。凹むだろ」

「……どうやら人喰い妖怪というわけではなさそうだね」

「結論付けるのが早いぞ、ヒトガタ。もしかするとおしゃまな凶悪妖怪かも」

「それはない」

最後まで台詞を言わせて貰えなかった現状に乾杯。

こっちはテンション上がってんだ。あんまり意気消沈させるような言葉を吐かれちゃ泣いちゃう。

森近霖乃助、という名前らしい。

俺に向ける半眼がやけに似合う二ヒルな青年は、何やら言葉を選ぶようにして俺の質問に答えてくれた。

話を聞いていけば何やら彼は幻想郷を目指して各地を旅していたらしく、ようやくこの秘境に辿り着いたものの人里が見つからずここらの森を右往左往していたらしい。

幻想郷に自ら辿り着くというのも中々に凄い事ではあるが、それよりもこんな魑魅魍魎の蔓延る魔境へわざわざ入り込もうとする彼の心情もまた凄い気もする。

「つーことは、何。その大荷物を見るからに」

「まあ、出来れば此処に住みたいとは思ってるけどね」

「ほー、へー、ふーん」

「何か？」

つい顎を撫でながら彼を値踏みするように声を漏らせば、彼はその半眼を鋭くさせながら俺より一歩か二歩ほど引いて見せた。別に取って食うわけでもないというのに。

そんな物騒なことに俺の興味なんぞあるわけもない。そんなことより重要なのは彼が此処に住みたいと言っていることだ。こんなところに住みたいと言っていることだ。

はてさて、その理由を知りたい。その理由を掲げるに至った過程を知りたい。

しかし彼の俺に対する態度はあまりいいものとは言えない。これでも彼と出会った掴みは外していないと自負しているのだけでも、なんか愉快的なヒトガタとか思われてそうじゃない？ 俺。

「そんな警戒心丸出しにしくてもいいーじゃん」

「悪いけど幻想郷についての知識がないというわけではなくてね。

多少の危機感を持つてはいるんだよ。今この瞬間もね」

「とか言いつつ着いていくしかない霖乃助くんでした、と」

「……………」

今現在彼を連れて人里の方へと歩いてはいるのだが、いかんせん俺たちの進む道は道とも言えない森の中。二人揃ってがっさがっさと

道なき道に行く様は何かシユールだ。

そして俺の物言いに眉を顰めて着いてくるしかない霖乃助。

だって迷ったっていうんだもんね。迷ってから二日目くらいだもんね。ちゃんと話の聞けるヒトガタに久しぶりにあつたんだもんね。

俺に着いてくるしかないね。仕方ないね。

まあ、此処で彼が『お前になんて着いていけるか！俺は此処に残る』なんて言えばそれはそれで面白い事態になるんだろうけど、せっかく知り合えたヒトガタをむざむざ誰かの餌として見逃してしまふのは中々に惜しい。

「だから俺は妖怪じゃないってば。悪魔でもないし、悪霊でもないのですよ」

「じゃあ、こんな人気もない所で何をしていたのさ。しかも丸腰で」

「散歩。連れはどっか行っちゃったけど」

「連れ？」

散歩云々よりも連れのことに興味がいったらしい。何だ、まさか人喰い仲間とか思ってたのか。

というか自分で言っておきながらアレだけでも、すっかりシロとクロのことを忘れていた。まあ、あいつらを喰う妖怪なんていないだろうし、そもそも食う事の出来る妖怪もいない。別段放っておいてもそのうち帰ってくるだろう。

「そ。シロとクロっていう獺なんだけど……あー……獺ってお分かり？分かってくれると俺の素性も説明しやすくて吉」

「獺……まさか夢を食ってるっていう」

「博識だなあ。案外いないのよ、この国でそれを知ってる奴って。それと俺は似たようなもんだって覚えておいてくれや」

「そ、そうか……そんな存在までいるのか」

最後らへんは俺に言った台詞でもないのだろう。ただ驚愕する自分を納得させるように零した声に、俺は苦笑した。

確かに獏も珍しいかもしれないが、そんなことを言えば閻魔はいるし鬼も天狗もいれば神様だって此処にはいる。やはりその個体数の多さから幻想郷では妖怪が有名ではあるのだが、幻想郷と言う名前は伊達ではない。

天人だっているし、最近では西洋の魔法使いみたいな技術も広がっているぞ。

「ままま、そこらへんは幻想郷縁起でも見れば分かりやすいやね」

「人外一覽でもあるのかい？」

「そりゃなー。そもそも人外であればあるほどそういった伝承やら歴史やらに名前が残されるもんじゃね？ 妖怪とか神様って。むしろ縁起に乗ってる妖怪たちは率先してねつ造しようと編集者に詰め寄ってる始末」

「ね、ねつ造、ね……」

誇り高いと言うか、ケチくさいと言うか。そりゃ人物紹介の部分にかっけー二つ名とか興味そられる紹介文を載せられるっていうのは気分がいいけど、どうなんだろうかね。

向日葵畑の彼女なんてちよつと誇張し過ぎたって凹んでたし。

花畑を荒らされると怒るってのはまともな話だけどさー、入るだけで即効デリートっていうのは誇張し過ぎだろ。

ならあの美しい花々は誰が見てくれるのさって話。

実は彼女、そんなにドSってわけじゃないらしいよ。

話が逸れた。



兎にも角にも霖乃助の縁起に対する興味は中々熱いものがあるらしい。確かに彼、粗暴を好むというよりは文学を嗜むことを好みそうだしね。眼鏡とかあつたらすんげー似合いそうな予感。

「……何か？」

「いんや、何でもねーっす」

ちと彼の顔をまじまじと見つめすぎたのかもしれない。

いくら俺がいるとはいえ、日が暮れてしまつてはその獲物を寄せせとか言ってくる妖怪が現れるかもしれない。

此処はさっさと人里に向かうのが優先事項だろう。

そも、話しながらでも目的地には近づける。

「ででで、何故に幻想郷へ？」

「そこはさらつと流してはくれないのかい？」

「流してもいいけど俺はしょんぼりするぞ？ どうだ、しょんぼりするぞ？」

「……君、あんまり人に好かれない性質だろう」

俺は嫌いじゃないけどな。自分。

さてさて辿り着いた人里の入口。

どうやら日が暮れるのは辿り着いたと同時にたらしく、既に里中には家々の中でぼんやりと光る灯と、そこらにぼつぽつと点在する行灯が見えるくらい。

所々暗がりの中で道を行く人々の影が見えるが、誰も彼も仕事帰りのような風体の者ばかり。

ちよつと遠くで酒盛りに行くかなどと盛り上がる男たちの声も聞こえた。

「ほい、到着」

「……………」

「どーしたよ」

「あ、いや、何でもないんだ」

どうせ『ホントに案内してくれた』なんて俺のことを考えてるんじゃないかと邪推するが、霖乃助の視線には俺を欠片とも入れる気がないらしく、日暮れの人里をこれでもかと言わんばかりの田舎者の雰囲気で見まわしている。

田舎の人里をおのぼりさんの目で見るとは中々に面白い話ではあるが。

そういえばつい最近まで外界にいたという霖乃助から見れば、この幻想郷という世界は随分と古めかしいものに見えるのかもしれない。完全に木造のあばら家や、そこらを行き交う人間の纏う衣服は甚平やら草臥れた着物やら懐かしいものばかり。

「予想外」

「え？」

「森近霖乃助の今を表す一言」

「……ははは、そうかもしれないね」

ようやく彼が俺の前で笑ってくれた。やはり妖怪という危機より逃れられる人里においては、多少なりとも余裕の一つは出てくるか。兎にも角にもさっさと休める場所に連れて行かんと、俺も彼も疲労でへとへとだ。

しかし考えなしにここまで連れてきたモノの、果たして誰に紹介してやればいいものか。さっさと里長に紹介するにはちと遅過ぎる。だからと言ってそこの知り合いの家にお邪魔してこいつ泊めてやつてとは言えない。いやー俺が言えば渋々ながら了承してくれそうな人は何人かいるけどさ。

俺が考えている間にも里をこれでもかと言わんばかりに見まわす霖乃助を見ながら、少しばかり頭を捻らす。

そもそも幻想郷に来た目的も話してくれないと言つのもマイナスなんだよなあ……これで、幻想郷の王になるべくやってきた悪人だっ！　なーんてことになっちゃあ目も当てられない。

まあ、そんなことを考える様なヒトガタではなさそうだけど。

そんなことを考えていれば、ふと俺たちの前から道の真ん中を歩いてくる人影が。

暗がりの中でもぼんやりと見える長い髪は白い残像を残しながら揺れ、近づくに連れてはつきりとするもんぺは燃えるような赤。しかもそこらに貼り付けてあるのは無数の札。

こんな分かりやすいヒトガタなんて彼女しかない。

「おろ？ もこーさんじゃん」

「……その馬鹿にしたような伸びで呼ばれるの、嫌いって言ったはずなんだけど」

「そりゃ残念。こんばんは、妹紅」

「はぁ……」

挨拶にはきちんと返すべきだっ！ とは言わないものの、彼女が零したため息は少しばかり痛い。

俺と彼女の話に霖乃助も気付いたのか、純粹に疑問符を浮かべたままに首を傾げていた。

彼女の名前は藤原妹紅。

竹林傍の一軒家に住んでー、不老不死の蓬莱人でー、慧音と仲良しでー。などと込み入った内容まで話すわけにはいかなかったが、霖乃助には適当に知り合いだと言っておいた。

ちよっとだけそっけない妹紅と戸惑いながらもきっちり自己紹介をこなす霖乃助。それぞれの性格が出ているようで何か笑えた。

「で、人里に来たってわけね」

「うん」

「はい」

霖乃助の目的云々の説明は省略。

やっぱり妹紅にも幻想郷に来た目的とかそういう部分は話そうとしない霖乃助にちよっと口を尖らせる。

妹紅には気持ち悪いと言われ、霖乃助にはジト目で見られた。

残念だけどご褒美とか感じる性質じゃなくてね。褒められた方が嬉しいさ。

「まあ、自分で背負ったなら自分でなんとかすることね」

「おう、なんとかする」

「……………ま、いいわ」

それっきり俺たちと妹紅はそこで別れた。既に里の入口には屈強な門番が立っていたが、彼女はその間を何でもないかのように闇の中に消えていく。

いやはや、相変わらずツンケンしているようで。普通この流れなら霖乃助の手伝いを名乗り出てもいいだろうに。いや、そりやさすがに横暴な考えか。

そんなこんなで彼女の消えていった先を見つめていれば、霖乃助が苦笑しながら俺に話し掛けた。

「さすがにここまで世話してもらうのは悪いよ。人里には無事に辿り着けたし、ここからは自分でなんとかするさ」

「おおん？ 別に気にするもんでもねーぞ」

「いや、それに最初から信じてなくてすまなかった。ここまで助けてくれてありがとう」

「むむむ……………」

朗らかな笑みを浮かべて頭を下げてくれる彼の姿に、ちょっとだけこれで別れるのもいいかと思いついた俺がいる。これで別れるのもそれはそれで理想的なのだが、ここまで面倒を見た手前、最後までなんとかしてやりたいものだ。

ますます何も関せず去っていったもこーに見当違いな不満を抱いていたのだが、彼女との邂逅はそれほど意味の無いものでもなかったようだ。

ふと俺の頭上には豆電球が光るがごとく名案が生まれていた。

「おー慧音ならなんとかしてくれるやも」

「慧音、さん？」

「おう、人里の寺子屋で教鞭をとっている女性なんだけどな、ひよつとしたら力になってくれるかもしれねーぞ？」

「……さすがに女性に対して宿がどうだのと便宜を図ることはできないよ」

「いくら慧音でも無防備に『うちの泊まれ』とは言わないだろうよ」

見当違いのことを言う霖乃助に笑ってしまったが、成程そういう懸念もあるのかもしれない。破廉恥な話が彼女に通じるとは思われないが。

彼女の優しさに付け込むのは少々良心が痛むが、他に良心的なヒトガタが俺には思いつかない。

そもそもだ。

それ以上に森近霖乃助という存在に対するちょっとした予想が俺にはある。

おそらく次の一言で彼が妙な反応をすれば、俺の予想は確信に変わるだろう。

なんだろうな。自分の考えが真実として浮かび上がる瞬間と言うのはこつも期待感に溢れるものだろうか。

顔がニヤニヤする。

でも止める。

おそらく、下種な考えだから。

でも、まあ、言っちゃうけど。

「上白沢慧音っていうんだけど、彼女、半人半獣なんだよね」

「うん。」

「うん。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8506m/>

---

灰色の話

2010年11月19日21時31分発行